志木市の文化財　第31集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 2

中野遺跡第25地点

2001

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長　細田信良

私たちの住む志木市は、埼玉県の南西部に位置し、人口６万５千を擁する緑豊かな自然環境に恵まれた都市です。この地には、現在私たちの先人たちが遺した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が16遺跡確認されています。

本書は、平成４年度に実施された発掘調査のうち、駐車場建設に伴う中野遺跡第25地点の発掘調査報告書です。

中野遺跡は、柏町地区に存在する遺跡の１つで、今までの調査により、旧石器・縄文・弥生・古墳・平安時代、中・近世の複合遺跡として判明しています。

調査内容については、本書で詳しく記述していますが、縄文時代の住居跡・土坑・炉穴、弥生・古墳時代の住居跡、近世の土坑など多くの遺構・遺物が検出されています。

特に、古墳時代後期（５世紀終わりから７世紀初め）では、10軒の住居跡と豊富な土器が発見され、中でも一辺10ｍを越える大形住居跡は県内はもとより関東地方でも最大級の規模を誇るものとなりました。おそらく、当時この一帯を治める有力者の家であったのかもしれません。当時の村落跡の一端を知る上で大変貴重な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査の大切さを理解し、快く調査を承諾していただいた開発主体者の（個　人）には心から感謝申し上げます。また、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する中野遺跡（県No.09－002）第25地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、開発主体者である個人から、志木市遺跡調査会が委託を受け、平成４年２月22日から同年７月20日まで実施した(平成４年委保第５の238号)。

3．本書の作成において、執筆は尾形則敏・深井恵子が分担して行い、編集は尾形が行った。なお、朝霞市博物館の野沢　均氏には、中・近世の遺物についてご教示を頂いた。

尾形則敏　第１・２・４章、第３章の検出された遺物

深井恵子　第３章の検出された遺構

4．旧石器・縄文時代の石器の実測及び観察表の作成は、㈲アルケーリサーチ代表取締役藤波啓容に依頼した。

5．遺物の実測は、鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。写真撮影は尾形が行った。

6．本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

Ｊ＝縄文時代の住居跡　　Ｙ＝弥生時代の住居跡　　Ｈ＝古墳時代～平安時代の住居跡

Ｄ＝土坑　　Ｐ＝ピット　　ＦＰ＝炉穴

8．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井　寛・飯田充晴・井上洋一・上田　寛・梅沢太久夫・江原　順・柿沼幹夫・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・小出輝雄・肥沼正和・小滝　勉・小宮恒雄・笹森健一・斯波　治・鈴木一郎・鈴木重信・隅田　眞・高橋　学・田中広明・照林敏郎・並木　隆・根本　靖・野沢　均・土師由美・早坂廣人・廣田吉三郎・福田　聖・藤波啓容・松本　完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・山田尚友・和田晋治

志木市遺跡調査会組織

〈役　　員〉

会　　長	秋山　太藏（志木市教育委員会教育長）（～平成12年６月）
	細田　信良（志木市教育委員会教育長）（平成12年７月～）
	星野昭次郎（志木市教育委員会教育総務部長）（～平成７年３月）
	川目　憲夫（　〃　）（～平成12年３月）
	谷合　弘行（志木市教育委員会生涯学習部長）（平成12年４月～）
	神山　健吉（志木市文化財保護委員会）
	井上　國夫（　〃　）
	宮野　和明（　〃　）（～平成５年３月）
	尾崎　征男（　〃　）（～平成10年３月）
	高橋　長次（　〃　）
	高橋　　正（　〃　）（平成５年４月～平成８年３月）
	高橋　　豊（　〃　）（平成８年４月～）
	内田　正子（　〃　）（平成10年４月～）
理事兼事務局長	並木　勝司（志木市教育委員会生涯学習課長）（～平成８年３月）
	鈴木　重光（　〃　）（平成８年４月～平成12年３月）
	土橋　春樹（　〃　）（平成12年４月～）

〈監　　査〉

監　　事	根岸　正文（志木市立郷土資料館長）（～平成５年３月）
	武川　洋子（　〃　）（平成５年４月～平成８年３月）
	萩原　洋子（　〃　）（平成８年４月～）
	根岸　清躬（社会教育指導員）（～平成５年３月）
	野口　　泰（　〃　）（平成５年４月～平成６年３月）
	鈴木　憲三（　〃　）（平成５年４月～平成９年３月）
	佐藤　　茂（　〃　）（平成６年４月～平成10年３月）
	永田　伸夫（　〃　）（平成10年４月～）

〈事　務　局〉

担当課・係	志木市教育委員会社会教育課（～平成５年３月）
	志木市教育委員会教育総務部生涯学習課文化財保護係（～平成12年３月）
	志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当（平成12年４月～）
理事兼事務局長	並木　勝司（生涯学習課長）（～平成８年３月）
	鈴木　重光（　〃　）（～平成12年３月）
	土橋　春樹（　〃　）（平成12年４月～）
	山中　　満（生涯学習課長補佐兼生涯学習係長）（平成５年４月～平成６年３月）
	尾崎　健市（　〃　）（平成７年４月～平成10年３月）
	金子　雅佳（生涯学習課長補佐）（平成12年４月～）
	岡本　　孝（生涯学習課文化財保護係長）（～平成９年３月）
	関根　正明（生涯学習課文化財保護担当主査）（平成９年４月～）
	佐々木保俊（生涯学習課文化財保護担当主査）
	清水あや子（生涯学習課主任）（～平成12年３月）
	新井由起子（生涯学習課文化財保護担当主任）（平成12年４月～）
	尾形　則敏（生涯学習課文化財保護担当主任）
	今野　美香（生涯学習課主事）（～平成８年３月）
調査担当者	佐々木保俊・尾形　則敏
調査補助員	深井　恵子・内野美津江
調査協力員	井本　大輔・大里勝之進・小林　健次・清水　芳子・杉原　芳香・鈴木　裕介
	寺内　良夫・宮本田ず子・村井　京子・吉谷　顕子
整理協力員	遠藤　英子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦　恵子・山口　優子

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次

挿図目次

図版目次

第１章　遺跡の立地と環境 …… 1

　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1

　第２節　遺跡の概要 …… 8

第２章　調査の経緯 …… 13

　第１節　調査に至る経過 …… 13

　第２節　調査の方法と経過 …… 13

第３章　検出された遺構と遺物 …… 16

　第１節　縄文時代 …… 16

　　（１）住居跡 …… 16

　　（２）土　坑 …… 17

　　（３）炉　穴 …… 25

　第２節　弥生時代 …… 30

　第３節　古墳時代 …… 31

　第４節　平安時代 …… 63

　第５節　土　坑 …… 64

　第６節　遺構外出土遺物 …… 71

第４章　まとめ …… 83

　第１節　古墳時代後期の住居跡構造の基礎的考察について …… 83

　第２節　古墳時代後期の土師器の様相について …… 94

図　　版

報告書抄録

挿図目次

第1図　市域の地形と遺跡分布（1／20000）　2
第2図　周辺の地形と調査地点（1／3000）　9
第3図　遺構分布図（1／200）　14
第4図　1号住居跡（1／60）　16
第5図　1号住居跡出土遺物1（1／3）　18
第6図　1号住居跡出土遺物2（1／3・4／5）　19
第7図　土坑1（1／60）　21
第8図　土坑2（1／60）　22
第9図　4号土坑出土遺物（1／4）　23
第10図　土坑出土遺物（1／3）　24
第11図　炉穴（1／60）　26
第12図　2号炉穴出土遺物（4／5）　27
第13図　3・4号炉穴出土遺物（1／3）　29
第14図　4号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）　30
第15図　10号住居跡（1／60）　32
第16図　10号住居跡カマド（1／30）　33
第17図　10号住居跡出土遺物（1／4・1／3）　34
第18図　13号住居跡（1／60）　36
第19図　13号住居跡出土遺物（1／4）　36
第20図　14号住居跡・17号土坑（1／60）　38
第21図　14号住居跡出土遺物（1／4）　39
第22図　15号住居跡・カマド（1／60・1／30）　42
第23図　15号住居跡出土遺物（1／4）　43
第24図　16号住居跡（1／60）　45
第25図　16号住居跡カマド（1／30）　46
第26図　16号住居跡出土遺物（1／4）　46
第27図　17号住居跡（1／60）　48
第28図　17号住居跡カマド（1／30）　49
第29図　17号住居跡出土遺物（1／4）　50
第30図　18号住居跡・カマド（1／60・1／30）　52
第31図　18号住居跡出土遺物（1／4）　53
第32図　19号住居跡（1／60）　55
第33図　19号住居跡出土遺物1（1／4）　58
第34図　19号住居跡出土遺物2（1／4・1／3）　59
第35図　20号住居跡・出土遺物（1／60・1／4）　62
第36図　21号住居跡（1／60）　63
第37図　12号住居跡出土遺物（1／4）　64
第38図　土坑1（1／60）　67
第39図　土坑2（1／60）　69
第40図　土坑出土遺物（1／4）　69
第41図　遺構外出土遺物1（1／4）　74
第42図　遺構外出土遺物2（1／3）　75
第43図　遺構外出土遺物3（1／3）　76
第44図　遺構外出土遺物4（1／3）　77
第45図　遺構外出土遺物5（1／3）　78
第46図　遺構外出土遺物6（1／3・4／5）　79
第47図　遺構外出土石器1（4／5）　80
第48図　遺構外出土石器2（1／3）　81
第49図　住居跡の規模の分布図　84
第50図　住居跡の主軸方向の分布図　84
第51図　住居跡の平面プランと設計　91
第52図　器種構成と分類1（1／8）　96
第53図　器種構成と分類2（1／12）　97
第54図　坏・坩・高坏・鉢形土器の変遷（1／8）　100
第55図　甑・甕形土器の変遷（1／14）　101

表　目　次

第１表　志木市の時代別にみた考古資料一覧 …… 4
第２表　志木市の発掘調査報告書一覧 …… 7
第３表　中野遺跡調査一覧 …… 10
第４表　石器一覧表 …… 82
第５表　大形住居跡一覧 …… 85
第６表　住居跡計測一覧 …… 90
第７表　住居跡の細部構造の計測一覧 …… 92
第８表　尺の種類と長さ …… 93

図　版　目　次

図版１　１．調査区近景　２．確認調査風景　３．１号住居跡　４．４号土坑遺物出土状態
５．23号土坑遺物出土状態　６．27号土坑遺物出土状態　７．28号土坑　８．29号土坑
図版２　１．２号炉穴　２．３号炉穴遺物出土状態　３．４号炉穴　４．４号住居跡　５．10号住居跡
６．10号住居跡遺物出土状態　７．10号住居跡貯蔵穴遺物出土状態　８．10号住居跡貯蔵穴
図版３　１・２．13号住居跡遺物出土状態　３．14号住居跡　４．14号住居跡遺物出土状態　５．15号住居跡
６．15号住居跡カマド　７・８．15号住居跡遺物出土状態
図版４　１．16号住居跡　２．16号住居跡カマド　３．16号住居跡遺物出土状態　４．17号住居跡遺物出土状態
５．17号住居跡カマド遺物出土状態　６．17号住居跡カマド　７．17号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
８．17号住居跡
図版５　１．18号住居跡遺物出土状態　２．18号住居跡　３．18号住居跡カマド　４．18号住居跡遺物出土状態
５．19号住居跡発掘風景　６～８．19号住居跡遺物出土状態
図版６　１～３．19号住居跡遺物出土状態　４．19号住居跡貯蔵穴　５．19号住居跡
図版７　１．20号住居跡遺物出土状態　２．21号住居跡　３．５～７号土坑　４．９～11号土坑
５．12号住居跡・12～15号土坑　６．18～20号土坑　７．21号土坑遺物出土状態　８．21号土坑
図版８　１．１号住居跡出土遺物　２．１号住居跡出土石器　３．４号土坑出土遺物
図版９　１．22・23号土坑出土遺物　２．24・25号土坑出土遺物　３．26号土坑出土遺物
４．27・28号土坑出土遺物　５．29号土坑出土遺物　６．２号炉穴出土遺物
図版10　１．３・４号炉穴出土遺物　２．４号住居跡出土遺物
図版11　１．10号住居跡出土遺物　２．13号住居跡出土遺物　３．14号住居跡出土遺物
４．10・14・16号住居跡出土鉄滓
図版12　１．15号住居跡出土遺物　２．17号住居跡出土遺物
図版13　１．16号住居跡出土遺物　２．18号住居跡出土遺物　３．20号住居跡出土遺物
図版14　１．19号住居跡出土遺物　２．19号住居跡出土鉄製品　３．19号住居跡出土鉄滓
図版15　１．12号住居跡出土遺物　２．５～７号土坑出土遺物　３．８・９号土坑出土遺物
４．17～19号土坑出土遺物　５・６．21号土坑出土遺物　７．遺構外出土石器
図版16　１．遺構外出土石器　２．遺構外出土遺物
図版17　遺構外出土遺物
図版18　遺構外出土遺物
図版19　遺構外出土遺物
図版20　坏・甕形土器にみられる調整技法
１．ハケ目＋ヘラ磨き　２．ヘラ磨き＋ヘラ削り　３．ヘラ削り　４．未調整部分＋ヘラ削り
５．暗文　６．暗文　７．ハケ目＋ヘラ削り　８．ハケ目＋ヘラ磨き
図版21　甕形土器にみられる調整技法
１．ヘラ磨き　２．ヘラ削り　３．ヘラナデ（ささくれ状）　４．ヘラナデ（ささくれ状）＋ヘラ磨き
５．口縁部横ナデ＋ヘラナデ（スリップか）　６．口縁部横ナデ＋ヘラナデ（スリップか）　７．ハケ目
８．ヘラナデ（横方向）
図版22　甑形土器にみられる調整技法
１．複合口縁（指頭押捺）＋ハケ目　２．ハケ目＋ヘラ磨き　３．ヘラナデ（ささくれ状）
４．ヘラナデ（ささくれ状）　５．ヘラ削り＋ヘラナデ（スリップか）　６．ヘラナデ＋磨き（縦方向）
７．ヘラナデ（ささくれ状）　８．ヘラナデ（斜方向）

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7km、東西4.7kmの広がりをもち、面積は9.06㎢、人口６万４千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（７）、中道遺跡（５）、新邸遺跡（８）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、氷川前遺跡（４）、市場裏遺跡（15）、市場遺跡（１）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた16遺跡である（第１図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

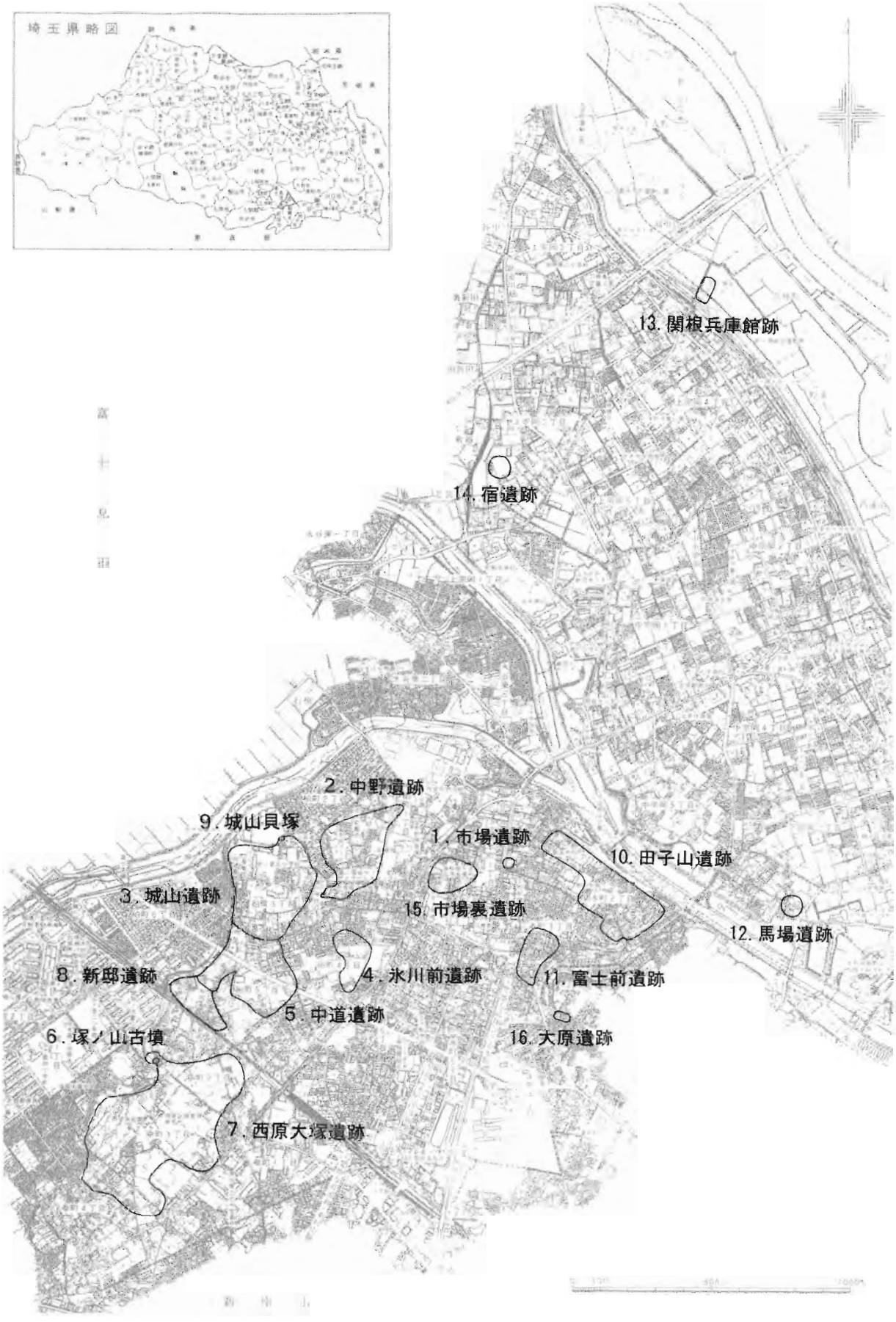
志木市内に最初に人が住みついたのは、**旧石器時代**からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成11～12年度にかけて実施された東京電力志木変電所の増設工事に伴う中野遺跡第49地点でも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器１点、田子山遺跡から有茎尖頭器１点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ１軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が１軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。晩期にな



第1図　地域の地形と調査地点（1／20000）

ると、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡１軒と遺物集中地点、晩期の溝跡１本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上て重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の３遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

さらに、最近では、平成11年度に西原大塚遺跡で発見された一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壷、吉ヶ谷式系の壷、在地系の壷などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壷が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、６世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7ｍのやや不整円形で２ケ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞆、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「冨」１文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。

第１表　志木市の時代別にみた考古資料一覧

１．旧石器時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
7	西原大塚	区画整理	石器集中地点４ヵ所	No.19
		市史掲載	ナイフ型石器、尖頭器など	1984『志木市史　原始・古代資料編』

２．縄文時代

2	中野	第２地点	土坑　１基、土製円盤　１点、包含層出土土器片	中　期	No.２
		第16地点	集石　１基	不　明	No.17
		第43地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
3	城山	第３地点	包含層出土土器	早～後期	No.７
		第４地点	埋甕　１基	中　期	No.８
		第９地点	土坑　１基	不　明	No.11
		第12地点	包含層出土土器	早～晩期	No.17
		第11地点	土坑　２基	前・中期	No.12
		第29地点	土坑　１基	早～後期	No.18
		第32地点	包含層出土土器	早～中期	No.18
		第34地点	包含層出土土器	早～中期	No.20
		第35地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
5	中道	第２地点	住居跡　３軒、土坑　８基、集石　２基、土坑、石器	中　期	No.６
		第13地点	住居跡　１軒、土坑　１基、土器	中　期	No.13
		第21地点	包含層出土土器	前　期	No.17
		第27地点	包含層出土土器	前～後期	No.22
		第41地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		第44地点	包含層出土土器	早～後期	No.21
7	西原大塚	第１地点	住居跡　４軒、土坑　８基、土器、石器	中　期	No.１
		第３地点	住居跡　５軒、土坑　２基、土器	中　期	No.２
8	新邸	第１地点	住居跡　１軒（貝塚）、土坑　２基、包含層出土土器	前・中期	No.３
		第２地点	住居跡　１軒（第１地点と同一）、土器、石器、貝類	前　期	No.４
		第３地点	包含層出土土器	早・前期	No.10
10	田子山	第４地点	土坑　１基	不　明	No.13
		第10地点	住居跡　１軒、土器	中　期	No.17
		第19地点	土坑　２基、遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第21地点	遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第25地点	炉穴　１基、遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第32地点	土坑　１基、遺構外出土土器片	早～中期	No.16
		第37地点	遺構外出土土器片	早　期	No.16
		第39地点	土坑　３基、集石　２基、炉穴　２基	早　期	No.18
		第47地点	遺構外出土土器片	早・前期	No.20
		第49地点	遺構外出土土器片	早　期	No.20

３．弥生時代

2	中野	第２地点	住居跡　２軒、土器	後　期	No.２
		第９地点	住居跡　１軒、土器	後　期	No.８
3	城山	第４地点	住居跡　２軒、土器	後　期	No.８
		第35地点	住居跡　１軒、土器、砥石	後　期	No.20
7	西原大塚	第１地点	住居跡　１軒、土器	後期～古墳	No.１
		第２地点	住居跡　３軒、土器	後期～古墳	『志木市史　原始・古代資料編』
		第３地点	住居跡　２軒、土器	後期～古墳	No.２
		第４地点	住居跡　３軒、土器、砥石	後期～古墳	No.４
		第６地点	住居跡　１軒、土器	後期～古墳	No.８
		第７地点	小竪穴状遺構　１基	後期～古墳	No.10
		第８地点	住居跡　13軒、方形周溝墓　１基、掘立柱建築　１基	後期～古墳	No.９
		第９地点	住居跡　１軒、土器	後期～古墳	No.９
		第10地点	住居跡　１軒、土器	後期～古墳	No.９
		第14地点	住居跡　４軒、土器	後期～古墳	No.17
		第21地点	方形周溝墓　１基、土器	後期～古墳	No.22
		第32地点	住居跡　２軒、土器	後期～古墳	No.16
		第36地点	住居跡　４軒、土器	後期～古墳	No.20
		第37地点	住居跡　７軒、土器	後期～古墳	No.21
		第39地点	住居跡　１軒、方形周溝墓　１基、土器、石器	後期～古墳	No.21

7	西原大塚	第45地点	住居跡　72軒、方形周溝墓　1基	後期～古墳	No.23
		区画整理	住居跡　106軒、方形周溝　3基（記述のみ）	後期～古墳	No.19
10	田子山	第1地点	住居跡　1軒、土器	後　期	No.9
		第4地点	住居跡　1軒、土器	後　期	No.13
		第10地点	住居跡　5軒、土器	後　期	No.17
		第19地点	遺構外出土遺物　土器3点	後　期	No.22
		第31地点	住居跡　17軒（21号住居跡記述のみ）	後　期	『田子山富士』文化財第22集
		第32地点	方形周溝墓　1基	後期～古墳	No.16
15	市場裏	第1地点	住居跡　1軒、土器	後期～古墳	No.17
		第2地点	方形周溝墓　1基、土器小片	後期～古墳	No.17
		第3地点	方形周溝墓　1基、土器小片	後期～古墳	No.14

4．古墳時代

2	中野	第2地点	住居跡　1軒、土師器	後　期	No.2
		第7地点	住居跡　1軒	後　期	No.10
		第12地点	住居跡　1軒、土師器多数	後　期	No.12
		第16地点	住居跡　1軒、土師器	後　期	No.17
		第18地点	住居跡　1軒、土師器、鉄鏃多数	後　期	No.14
		第31地点	住居跡　1軒、土師器、鉄鏃、砥石	後　期	No.15
		第41地点	住居跡　1軒、土師器多数、紡錘車	後　期	No.18
3	城山	市史掲載	住居跡　2軒、土師・須恵器	後　期	『志木市史　原始・古代資料編』
		第1・2地点	住居跡　55軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期	No.5
		第3地点	住居跡　4軒、土師器	前・後期	No.7
		第4地点	住居跡　1軒、土師器多数	後　期	No.8
		第6地点	住居跡　3軒、土坑　1基、土師器多数	後　期	No.10
		第7・9地点	住居跡　7軒、土師器多数、鉄製品	中・後期	No.11
		第11地点	住居跡　3軒、土師器	前・後期	No.12
		第13地点	住居跡　1軒、土師器	後　期	No.17
		第25地点	住居跡　2軒、土師器、初期須恵器	中・後期	No.16
		第29地点	住居跡　1軒、土師・須恵器	後　期	No.18
		第34地点	住居跡　3軒、土師器	後　期	No.20
		第35地点	住居跡　1軒、土師器多数	後　期	No.20
5	中道	第2地点	住居跡　5軒、土師器	後　期	No.6
		第12地点	住居跡　3軒、土師器	後　期	No.13
		第13地点	住居跡　1軒、土師器	後　期	No.13
		第21地点	住居跡　2軒、溝跡　1本、土師器、鉄製品（鎌完形1点）	後　期	No.17
		第33地点	住居跡　1軒、土師・須恵器	後　期	No.16
		第36地点	住居跡　1軒、土師器	前　期	No.18
		第37地点	住居跡　1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品	中　期	No.18
7	西原大塚	市史掲載	土師器	前　期	『志木市史　原始・古代資料編』
		第11地点	方形周溝墓　1基、壷棺　1基、土師器	前　期	No.11
		第45地点	住居跡　2軒、土師器	後　期	No.23
8	新邸	第2地点	住居跡　1軒、土師器	前　期	No.4
10	田子山	第5地点	住居跡　1軒、土師・須恵器、炭化種子（ヤマモモ多数）	後　期	No.13
		第13地点	住居跡　1軒、土師器（暗文土器1点あり）	後　期	No.17
		第29地点	住居跡　2軒、土師・須恵器	後　期	No.15
		第48地点	住居跡　1軒、土師器（続比企型坏あり）	後　期	No.20
11	富士前	市史掲載	土師器多数	前　期	『志木市史　原始・古代資料編』
		第15地点	住居跡　1軒、土師器（元屋敷系高坏あり）	前　期	No.20
12	馬場	市史掲載	土師器（S字甕か？）	前　期	『志木市史　原始・古代資料編』

5．奈良・平安時代

2	中野	第2地点	住居跡　1軒、須恵器	8ｃ後半	No.2
		第16地点	住居跡　3軒、須恵器	9ｃ中葉	No.17
		第41地点	住居跡　1軒、土師・須恵器、鉄製品、転用紡錘社	9ｃ後半	No.18
		第43地点	住居跡　1軒、土師・須恵器、鉄滓	9ｃ前半	No.20
3	城山	第1・2地点	住居跡　6軒、灰釉陶器、土師・須恵器多数、鉄・石製品	8～10ｃ	No.5
		第4地点	土坑　2基、灰釉陶器、須恵器（新開・栗谷ッ産）	10ｃ前半	No.8
		第7地点	住居跡　1軒、灰釉陶器	9ｃか？	No.11
		第11地点	住居跡　1軒	平安時代	No.12
		第29地点	住居跡　1軒	平安時代	No.18

		第35地点	住居跡 2軒、銅印、布目瓦、緑釉陶器片、土師・須恵器	9 c後半	No.20
5	中　道	第12地点	住居跡　2軒、土師・須恵器	9 c後半	No.13
		第21地点	住居跡　1軒、溝跡　1本、灰釉陶器片、土師・須恵器	9 c後半	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、須恵器、炭化米	9～10 c	No.20
		第44地点	土坑　1基	平安時代	No.21
7	西原大塚	第8地点	住居跡　3軒	平安時代	No.9
		第34地点	住居跡　1軒	平安時代	No.18
10	田子山	第4地点	住居跡　9軒、土師・須恵器	8～10 c	No.13
		第5地点	住居跡　4軒、土師・須恵器	8～10 c	No.13
		第6地点	住居跡　1軒、土師・須恵器、刀子、土錘	9 c後半	No.12
		第7地点	住居跡　1軒、布目瓦小片　2点、格子目叩き瓦小片　1点	8 c後半	No.12
		第19地点	住居跡　1軒、土師・須恵器、鉄製品	9～10 c	No.22
		第21地点	住居跡 3軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	9 c代	No.22
		第25地点	住居跡　2軒、土坑　3基、土師器、砥石	9 c後半	No.22
		第29地点	住居跡　1軒、須恵器布目瓦　1点	9～10 c	No.15
		第37地点	土坑か？　2基、須恵器	9～10 c	No.16
		第39地点	溝跡　3本、土師・須恵器小片	9 c代	No.18
		第41･42地点	住居跡　1軒、土坑　1基、土師・須恵器、鉄銅製品	9～10 c	No.18
		第47地点	住居跡　2軒、土坑　1基、土師・須恵器、鉄石製品	9 c中頃	No.20
		第49地点	住居跡　2軒、土師・須恵器	10 c代	No.20

6．中世・近世

2	中　野	第2地点	溝跡　1本	不　明	No.2
		第6地点	溝跡　1本	不　明	No.8
		第8地点	土坑　1基	不　明	No.10
		第11地点	土坑　1基、陶・磁器小片	18～19 c	No.17
		第43地点	井戸跡　1基	不　明	No.20
3	城　山	市史掲載	柏城跡の大堀跡　1本、陶・磁器	中・近世	『志木市史 中世資料編』
		第1･2地点	柏城跡関連の堀跡　5本、土坑　32基、井戸跡　10基、掘立柱建築・ピット群、陶・磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	No.5
		第3地点	土坑　16基、溝跡　2本	中・近世	No.7
		第4地点	土坑　1基	14～15 c	No.8
		第6地点	土坑　7基	中・近世	No.10
		第7･9地点	土坑　3基、土製品	中・近世	No.11
		第11地点	土坑　3基、井戸跡　1基、陶・磁器、板碑、馬歯	中・近世	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古銭	中・近世	No.17
		第25地点	土坑　2基	中・近世	No.16
		第29地点	土坑　11基、溝跡　1本、ピット群、板碑、陶・磁器、馬歯、古銭など	中・近世	No.18
		第35地点	土坑　15基（鋳造土坑　1基・溶解炉　1基・地下式坑　1基）、井戸跡　1基、鋳型、土・鉄製品、陶・磁器、古銭など	中・近世	No.20
5	中　道	第2地点	土坑　数基、溝跡　14本、掘立柱建築　4基ピット群	中・近世	No.6
		第6地点	土坑　1基、陶・磁器小片	15 c代	No.8
		第26地点	土坑　6基（土坑墓1基）、掘立柱建築、人骨、古銭	17 c代	No.17
		第27地点	地下式坑　2基、土坑　2基、陶・磁器	14～15 c	No.22
		第36地点	溝跡　2本、ピット群、陶・磁器小片	中・近世	No.18
		第37地点	土坑墓　1基、道路遺構　1条、人骨、青磁盤、古銭	中　世	No.18
		第44地点	溝跡　2本	中・近世	No.21
8	新　邸	第1地点	土坑19基（地下式坑1基）、井戸跡　1基、溝跡　2基	中・近世	No.3
		第3地点	地下式坑　1基、溝跡　2本、陶・磁器	中・近世	No.10
10	田子山	第25地点	遺構外出土遺物、陶・磁器	中・近世	No.22
16	大　原	第1地点	溝跡　1本	近　世	No.22

7．近代以降

2	中　野	第11地点	土坑　1基	18～19 c	No.17
3	城　山	第35地点	かわらけ　2点	19 c後半	No.20
10	田子山	第31地点	ローム採掘遺構　2ヵ所	19 c後半	『田子山富士』文化財第22集
		第49地点	土坑　1基	近・現代	No.20
15	市場裏	第3地点	かわらけ　2点	19 c代	No.14

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	谷井彪・宮野和明 井上国夫
2	西原大塚遺跡第3地点　中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊 尾形則敏
3	新邸遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
4	新邸遺跡第2地点　西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形 神山健吉
6	中野遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
7	城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木
8	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
9	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
10	西原大塚遺跡第7地点　新邸遺跡第3地点　中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点　城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
11	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
12	志木市遺跡群Ⅳ	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
13	中道遺跡第12地点　中道遺跡第13地点　田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
14	志木市遺跡群Ⅴ	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形
15	志木市遺跡群Ⅵ	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形
16	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木・尾形 深井恵子
17	城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点　中野遺跡第16地点　市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
18	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木・尾形・深井
19	西原大塚の遺跡　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998		志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形・深井
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形・深井
22	埋蔵文化財調査報告書　1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形・深井
23	西原大塚第45地点発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会	佐々木・内野美津江 宮川幸佳・上田　寛 関根正明

第2表　志木市の発掘調査報告書一覧

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、城山遺跡第29地点の127号土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第２節　遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する中野遺跡について概観することにする。

中野遺跡は、志木市柏町１丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北方約1.2㎞に位置している。遺跡は、柳瀬川流域右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約９ｍ、南端で約11ｍを測り、台地縁辺では際立った断崖もみられないままゆるやかに北側の低地に移行する。遺跡の現況は、宅地化が急速に進行している地域で、畑地は減少している。

次に、これまでに中野遺跡からどような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から大まかに振り返ってみることにしたい。そこで、第３表に中野遺跡における発掘調査及び確認調査の内容を示した。

これによると、中野遺跡における第１回目の発掘調査は、昭和59年の第２地点に始まる。その際には、弥生時代後期の住居跡２軒、古墳時代後期の住居跡１軒、平安時代の住居跡１軒が検出されている。

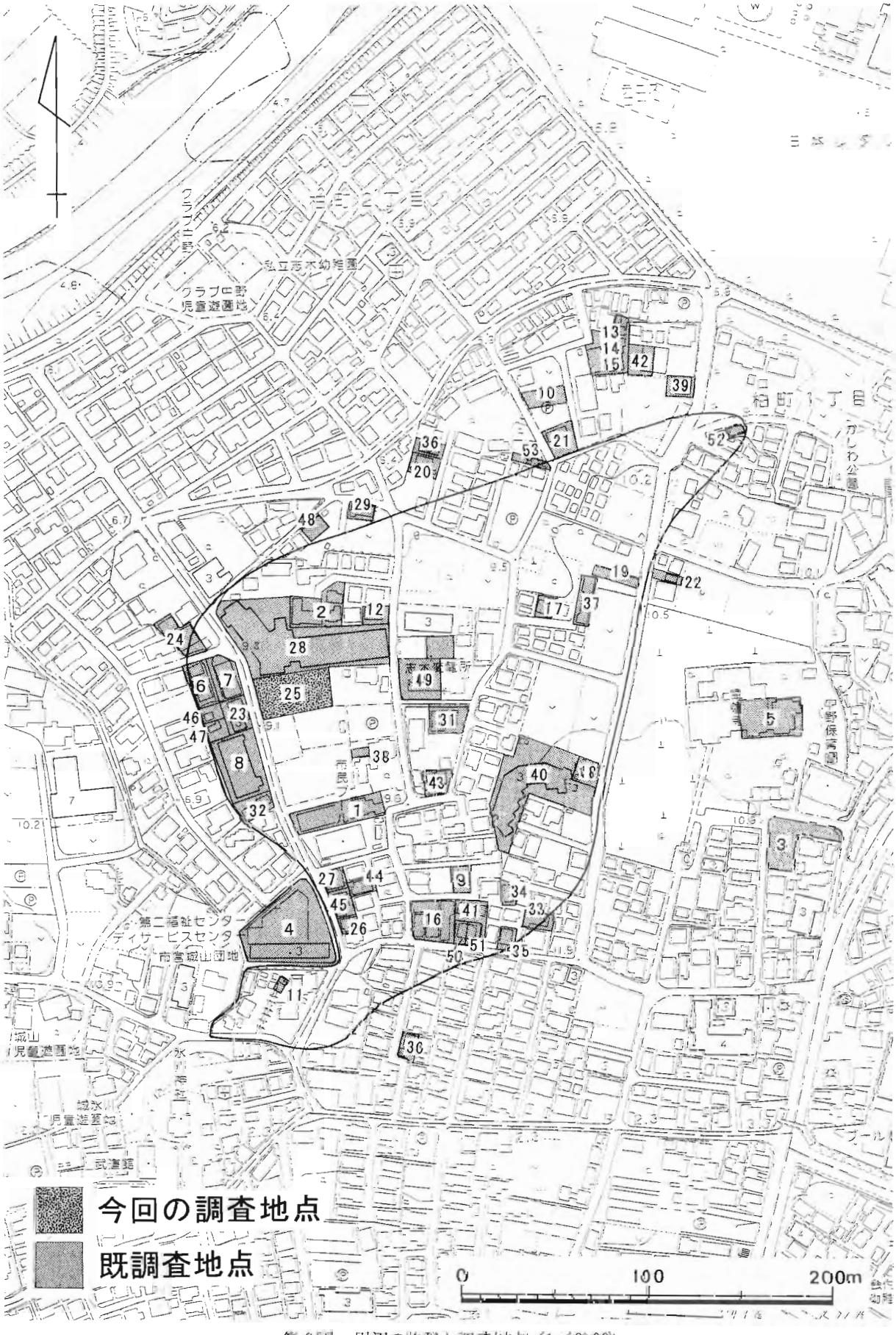
昭和62年の第６地点の調査では、中世以降と考えられる溝跡と縄文時代の可能性がある土坑１基が検出されている。

昭和63年には、第７・８・９地点の発掘調査が実施され、第７地点からは、古墳時代後期と思われる住居跡１軒、第８地点からは、近世遺構の土坑１基、第９地点からは、弥生時代後期の住居跡１軒が検出されている。

平成２年には、第11地点から、近世以降の土坑１基、第12地点からは、古墳時代後期の住居跡１軒が検出されている。また、第16地点からは、縄文時代の集石１基、古墳時代後期の住居跡１軒、平安時代の住居跡２軒が検出されている。

平成３年には、第18地点の発掘調査が実施され、古墳時代後期の住居跡１軒が検出されている。特筆すべきは、住居跡の床面上から、完形品を含め鉄鏃が11点出土したことである。鉄鏃の形態は、長頸箆被腸抉片刃丸造柳葉式、長頸棘箆被腸抉片刃丸造柳葉式、長頸箆被腸抉片刃丸造長三角式などに分類されるもので、その主体は長頸箆被腸抉片刃丸造柳葉式である。

平成４年には、今回の報告である第25地点の調査が実施された（本書参照）。また、平成５年には調査面積2000㎡を超す市内では大規模調査と言える第28地点の調査が実施され、さらに田子山遺跡でもほぼ同規模の第24地点が併行して実施されている。また、西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査が継



第２図　周辺の地形と調査地点（1／3000）

第3表　中野遺跡調査一覧

調査地点	面積（㎡）	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	調査書No.
第1地点	739.20		昭和58年10月27日 ～11月2日	貸倉庫建設	検出されなかった。	
第2地点	587.91		昭和59年5月14日 ～6月8日	共同住宅建設	（弥生）住居跡2軒、（古墳）住居跡1軒、（平安）住居跡1軒 （不明）溝跡1本	No. 2
第3地点	687.00	昭和61年 3月24日		駐車場建設	検出されなかった。	
第4地点	1,775.00	昭和62年 2月23日		市営住宅建設	検出されなかった。	
第5地点	1,609.44	昭和62年 7月23日		寺院庫裡建設	検出されなかった。	
第6a地点	100.15		昭和62年7月23日 ～8月6日	宅地造成	（縄文？）土坑1基 （不明）溝跡1本	No. 8
第6b地点	235.56					
第7地点	250.00		昭和63年7月7日 ～7月9日	宅地造成	検出されなかった。	
第8地点	388.05		昭和63年7月7日 ～7月9日	共同住宅建設	検出されなかった。	
第9地点	156.68	昭和63年 10月15日	昭和63年10月17日 ～10月21日	個人住宅建設	（弥生）住居跡1軒	No. 9
第10地点	258.00	平成元年 1月30日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第11地点	17.00	平成2年 4月23日	平成2年4月26日 ～4月27日	稲荷神社引家	（近代）土坑1基	No.17
第12地点	138.39	平成2年 5月9日	平成2年5月22日 ～6月1日	個人住宅建設	（古墳）住居跡1軒	No.12
第13地点	122.87	平成2年 5月18日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第14地点	215.62	平成2年 5月18日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第15地点	100.00	平成2年 5月18日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第16地点	496.59	平成2年 8月23日	平成2年8月27日 ～9月6日	共同住宅建設	（縄文）集石1基、（古墳）住居跡1軒、（平安）住居跡3軒	No.17
第17地点	118.84	平成2年 10月18日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第18地点	171.44	平成3年 7月8日	平成3年7月11日 ～7月18日	個人住宅建設	（縄文）土坑1基 （古墳）住居跡1軒	No.14
第19地点	179.24	平成3年 8月27日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第20地点	181.34	平成3年 10月2日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第21地点	118.42	平成3年 10月31日		事務所建設	検出されなかった。	
第22地点	67.48	平成3年 11月7日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第23地点	191.30	平成3年 11月25日		個人住宅建設	検出されなかった（工事立会）。	
第24地点	303.00	平成3年 11月25日		宅地造成	検出されなかった。	
第25地点	883.00	平成4年 2月12日	平成4年2月13日 ～7月20日	共同住宅建設	（縄文）住居跡1基、土坑9基、炉穴5基、（弥生）住居跡1軒、土坑1基、（古墳）住居跡10軒 （平安）、住居跡2軒、土坑1基 （中・近世）、土坑15基	本報告
第26地点	196.50	平成4年 5月15日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第27地点	145.80	平成4年 7月6日		個人住宅建設	検出されなかった。	

調査地点	面積（㎡）	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	調査書No.
第28地点	2,579.21	平成5年1月13日	平成5年1月14日～6月16日	共同住宅建設	（旧石器）石器集中分布（縄文）土坑6基、炉穴5基（弥生）住居跡4軒（古墳）住居跡17軒（中・近世）土坑4基、井戸跡1基、溝跡1本	
第29地点	115.71	平成5年6月11日		宅地造成	検出されなかった。	
第30地点	69.82	平成5年7月21日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第31地点	365.14	平成5年8月4日	平成5年8月10日～8月19日	個人住宅建設	（古墳）住居跡1軒	No.15
第32地点	235.67	平成5年11月8日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第33地点	151.23	平成5年11月26日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第34地点	114.51	平成6年3月24日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第35地点	98.27	平成6年7月26日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第36地点	160.80	平成6年9月22日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第37地点	286.59	平成7年3月14日		共同住宅建設	検出されなかった。	
第38地点	46.36	平成7年4月20日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第39地点	173.05	平成7年8月7日		倉庫建設	検出されなかった。	
第40地点	1,903.18	平成7年9月12日	平成7年9月18日～平成8年1月26日	共同住宅建設	（縄文）土坑23基、埋甕2基（弥生）住居跡4軒（古墳）住居跡15軒（平安）住居跡8軒、溝跡1本（中・近世）土坑1基	
第41地点	235.63	平成7年10月26日	平成7年10月27日～11月13日	個人住宅建設	（古墳）住居跡1軒 （平安）住居跡1軒	No.18
第42地点	1,283.51	平成7年11月29日		宅地兼倉庫	検出されなかった。	
第43地点	212.06	平成8年5月30日	平成8年6月3日～6月7日	個人住宅建設	（平安）住居跡1軒 （不明）井戸跡1基	No.20
第44地点	160.64	平成9年5月23日		分譲住宅建設	検出されなかった。	
第45地点	136.89	平成9年8月21日		個人住宅建設	検出されなかった（工事立会）。	
第46地点	68.31	平成9年12月8日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第47地点	85.28	平成9年12月8日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第48地点	73.70	平成10年5月21日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第49地点（第1工程）	140.00		平成11年5月11日～7月6日	志木変電所増設工事	（弥生）住居跡1軒（平安）住居跡1軒、（中世）土坑墓1基、土坑5基、井戸跡1基	
第49地点（第2工程）	490.00		平成12年2月21日～5月23日	志木変電所増設工事	（旧石器）集中地点（縄文）住居跡1軒、炉穴1基、包含層（弥生）住居跡2軒（平安）土坑2基（中世）土坑5基、井戸跡3基	
第50地点	87.75	平成11年6月11日	平成11年6月14日～6月15日	個人住宅建設	（古墳）住居跡1軒	
第51地点	87.75	平成11年6月11日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第52地点	102.78	平成12年4月14日		個人住宅建設	検出されなかった。	
第53地点	87.00	平成12年5月29日		道路造成工事	検出されなかった。	

続的に開始されたのも平成５年度である。さらに、平成６年には2000㎡を超す田子山遺跡第31地点、平成７年には中野遺跡第40・41地点の調査が実施されるなど、志木市における平成４～７年は、発掘調査のラッシュ時期と表現しても過言ではない。

その後、平成８年には、第43地点の調査が実施され、平安時代の住居跡１軒と中世以降の井戸跡１基が検出されるが、平成９・10年には、この地区での確認調査・発掘調査は実施されていない。

そして、平成11年には、東京電力志木変電所の増設工事に伴う発掘調査（３カ年計画）が開始され、この地区では初めて、人骨を伴う土坑墓や掘立柱建築などが検出されている。これらの遺構については、まだ、詳しく検討されていないが、ロームを掘削して造成した平場面にこうした遺構が存在することから、この一帯が『舘村旧記』に記されている、当時の舘村の菩提寺「行光寺」に相当する可能性があるのではないかと考えられる。その他、旧石器時代の剥片・石核の集中地点、弥生時代後期の住居跡３軒、平安時代の住居跡１軒、中世の地下式坑１基・井戸跡３基などが検出されている。

以上の調査から、中野遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であることが判明してきている。中でも、古墳時代の中期・後期に関しては、広範囲で検出される住居跡の分布状況や一辺10ｍを超す大型住居跡、８本・12本柱をもつ住居跡、そして、長頸筒被腸抉片刃丸造柳葉式の鉄鏃を出土した住居跡の存在などから考え、今後、志木市のみならず周辺の地域を含めた広域に亘る古墳文化を比較検討する上で重要な役割を果たすものと考えられる。

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

平成３年12月、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町１丁目1517番地（面積883㎡）内に駐車場建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中野遺跡（コード11228－002）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

２．上記１の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成４年１月29日、教育委員会は、開発者より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、２月12日、午前９時15分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸方向に合わせ４本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区のほぼ全面にわたり遺構が分布していることが判明した。

そのため、教育委員会は、この結果を開発者に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、開発主体者から埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、翌日２月13日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第５の238号　平成４年４月６日付である。

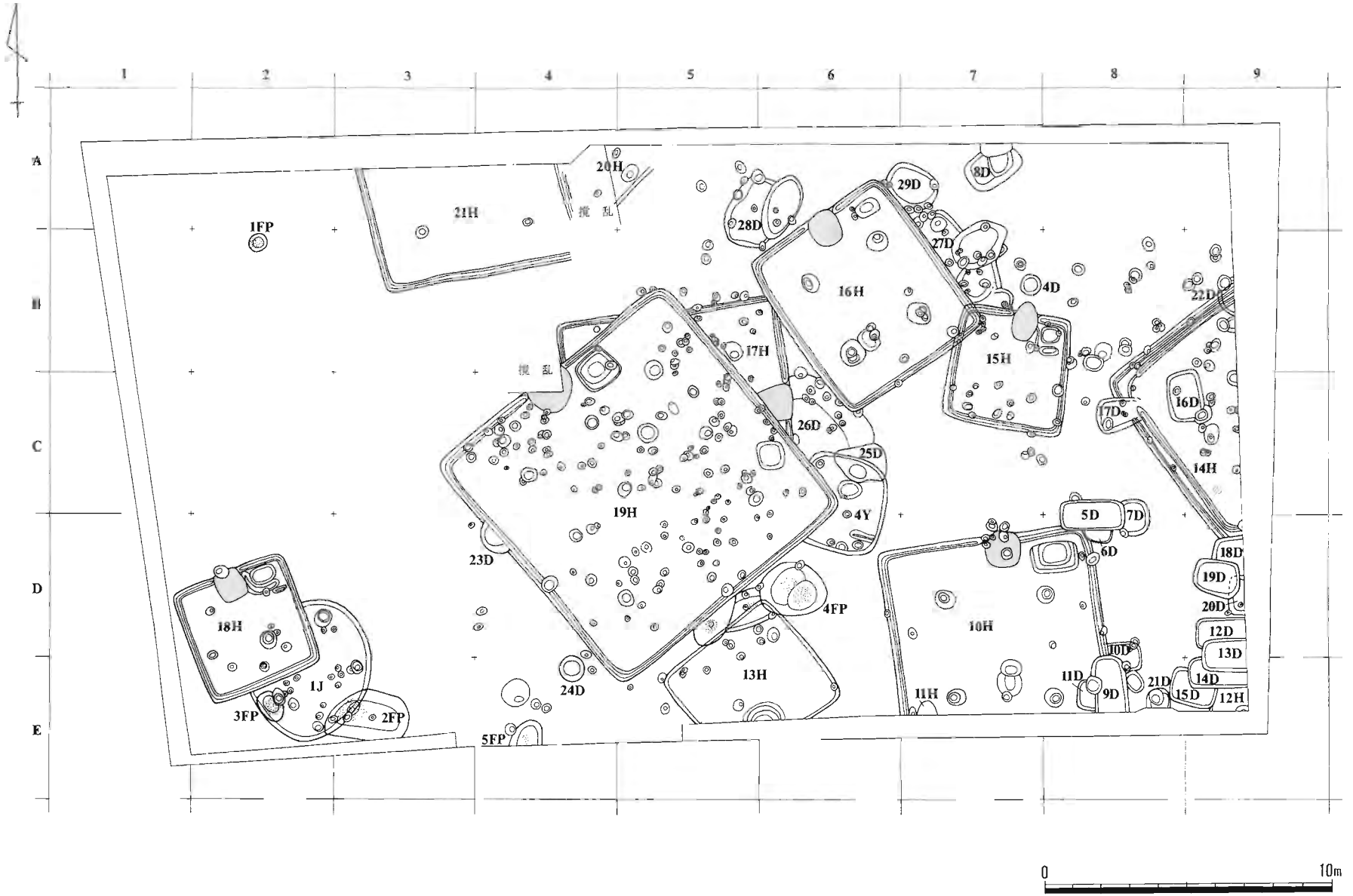
第２節　調査の方法と経過

確認調査は、平成４年２月12日に実施した。人員導入による発掘調査は、翌13日から開始し、７月20日にすべての調査を終了した。今回の調査で検出された主な遺構は、縄文時代中期の住居跡１軒・土坑９基・炉穴５基、弥生時代後期の住居跡１軒・土坑１基、古墳時代後期の住居跡10軒・土坑１基、平安時代の住居跡２軒、中・近世の土坑15基などであった。

発掘調査の経過は、以下のとおりである。

２月12日　　確認調査を実施する。調査区長軸方向に合わせ４本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った結果、調査区のほぼ全面にわたり遺構が分布していることが判明。その後、発掘調査に切り替え表土剥ぎ作業として調査を実施する。

２月13日　　表土剥ぎ作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区の整備と



第 3 図　遺構分布図（1／200）

細部の表土剥ぎ作業を行う。午後からは、10号住居跡の精査を開始する。10号住居跡は出土土器から、6世紀中頃に比定される。

2月下旬　10・13号住居跡の遺物出土状態の写真撮影を終了し、その後、遺物を取り上げる。10号住居跡の東壁に重複する土坑（5～7・9～11号土坑）は、中世以降に比定される。

3月上旬　8・12～18号土坑を完掘し、写真撮影・実測を終了する。また、3月5日～10日までは、会計検査のため調査を中止する。

3月中旬　13号住居跡の写真撮影・実測を終了し、15・16号住居跡の精査を開始する。16号住居跡は15号住居跡を切って構築されていることが判明した。

3月下旬　14・15・16号住居跡・16～20Dの写真撮影・実測を終了し、弥生時代後期に比定される4号住居跡の精査を開始する。21号土坑からは、9世紀の須恵器長頸瓶が1点出土している。

4月上旬　19号住居跡の精査を開始する。本住居跡は、市内では最大規模の一辺10mを越える大形住居跡である。時期は、出土遺物から7世紀前半に比定される。

4月中旬　19号住居跡の精査を行う。大部分が撹乱により破壊されているが、北壁中央からカマドが検出された。貯蔵穴はカマド右横に設置され、その周辺からは土器が比較的に多く土器が出土した。また、主柱穴は四隅の柱穴間に1本を加え、全部で8本柱の構成である。

4月下旬　19号住居跡の遺物出土状態の写真撮影・実測を終了し、遺物を取り上げる。また、17号住居跡の精査を開始し、4号住居跡は掘り方の精査・写真撮影を終了する。

5月上旬　17・19号住居跡の遺構の写真撮影・実測を終了し、その後、カマドの精査・実測を終了する。23号土坑の精査を開始し、その後、写真撮影・実則を終了する。

5月中旬　19号住居跡の床面のピットを確認し掘る。また、4・5号炉穴の精査を開始する。

5月下旬　4・5号炉穴の写真撮影を終了し、20号住居跡の精査を開始する。本住居跡は撹乱により大部分が破壊されているが、出土土器から6世紀中頃に比定される。

6月上旬　4・5号炉穴の実測を終了し、25～29号土坑の精査を行う。

6月中旬　25～29号土坑の写真撮影・実測を終了する。これらの土坑は、出土土器から、縄文時代中期後葉に比定される。

6月下旬　1号炉穴の写真撮影・実測を終了し、18号住居跡の精査を開始する。本住居跡は、出土土器から6世紀前半に比定される。

7月上旬　18号住居跡の写真撮影・実測を終了し、その後、カマドの精査を開始する。また、縄文時代1号住居跡と2号炉穴、21号住居跡の精査を開始する。

7月中旬　1号住居跡を完掘し、その後、写真撮影・実測を終了する。2号炉穴の精査を引き続き行う。2号炉穴からは、やや大きめの条痕文系土器が出土したが、遺存状態が悪いためにアクリル系樹脂を含浸させ取り上げる

7月20日　2号炉穴の写真撮影・実測を終了し、すべての調査を完了する。

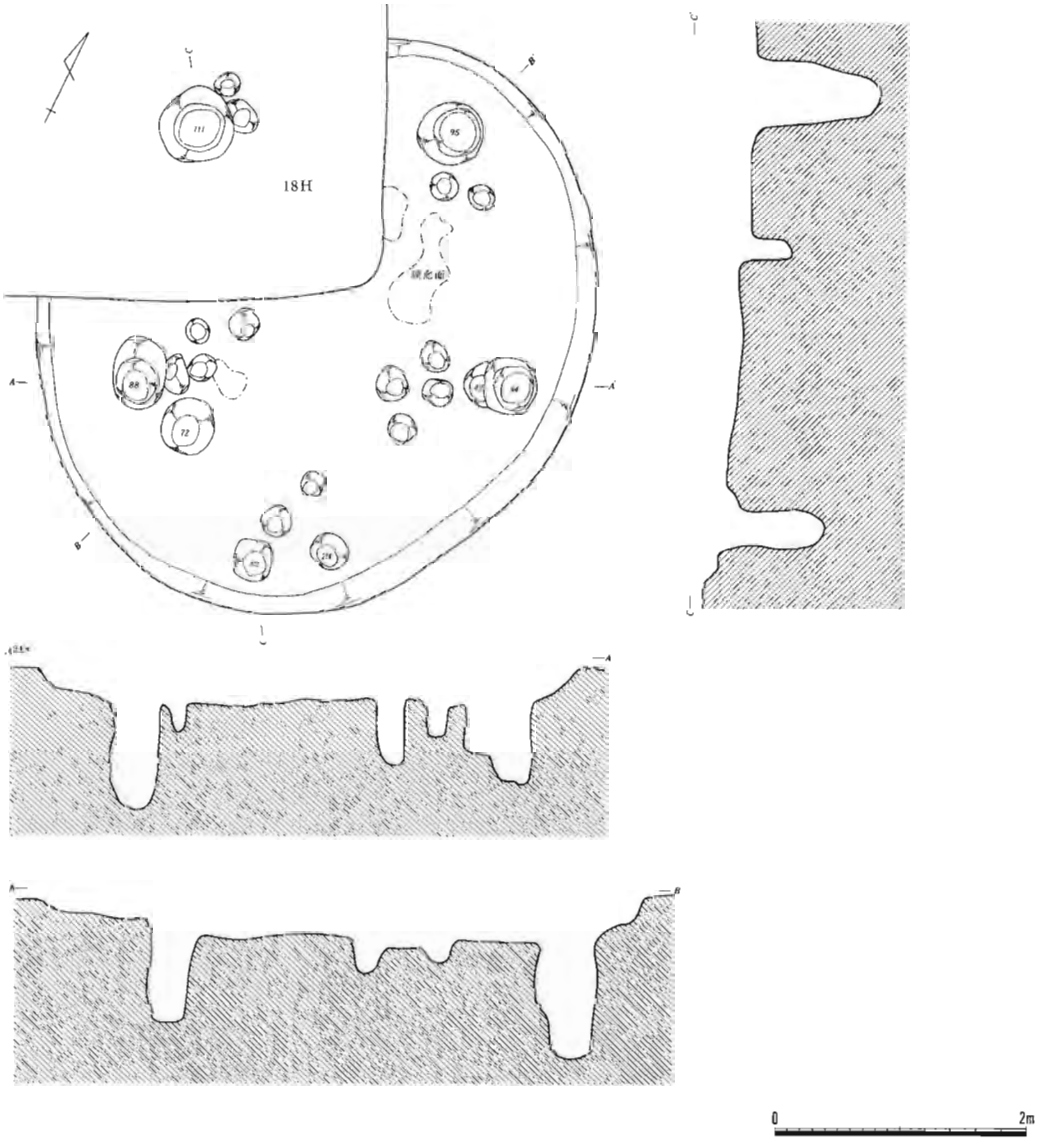
第３章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代

（１）住居跡

１号住居跡（第４図）

〔住居構造〕18号住居跡に切られ、２・３号炉穴を切る。（平面形）楕円形。（規模）4.90×4.50ｍ。（壁高）11～28㎝を測り、壁は緩やかに立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）一部によく硬化した床面が確認された。ほぼ直床と思われる。（炉）確認できなかった。（柱穴）６本確認されたが、主柱穴は５本と思われ、主柱穴を移動した可能性がある。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。



第４図　１号住居跡（1／60）

［遺物］小破片のみで、実測できるものはなかった。
［時期］縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ１式期）。

１号住居跡出土遺物（第５・６図、第４表）

１は縄文時代早期後葉の条痕文系土器である。表裏条痕の土器で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には繊維・小石を含む。

２・３は縄文時代前期前葉の黒浜式土器である。２は口縁部小破片で、２段の無節縄文による羽状縄文がみられる。色調は赤茶色を呈し、胎土には繊維・砂粒を含む。３は半截竹管により鋸歯状文を描き、その下方に単節斜縄文がみられる。色調は茶褐色を呈し、胎土には繊維・茶褐色粒子を含む。

４～11は縄文時代前期後葉の諸磯・十三菩提式土器である。４は大波状を呈する口縁部破片で、文様は半截竹管の平行沈線を地文に連続した爪形文が口縁部に器形に沿って２段施文され、波頂部の直下には縦位に施される。５は口縁部に半截竹管による平行沈線と２段の連続爪形文が施文され、その下方に縄文がみられる。６・７は半截竹管により肋骨文が描かれており、７は地文に縄文が施文され、縦に２ケの円形刺突文が付されている。８は浮線文土器で、縄文を地文に細い隆帯を貼り付け、浮線上には半截竹管により連続した刻み目が付されている。９は半截竹管により平行沈線を施文し、口縁部直下に幅８㎜の隆帯を横位に貼り付けている。10・11は半截竹管による平行沈線文に三角印刻文が施文されている。11の胎土には金雲母を多く含んでいる。

12は縄文時代中期前葉の五領ヶ台式土器の口縁部破片である。口唇上と隆帯上には半截竹管による爪形文が施され、以下斜縄文を地文に１条のＳ字状結節文が横位に施文される。

13～16は縄文時代中期中葉の勝坂式土器である。13～15は刻みをもつ隆帯により懸垂文が施文され、14・15の区画内には三叉文風の文様が描かれている。16は隆帯に沿って上下に連続した刻み目が付されている。

17～34は縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式土器である。17～22は口縁部破片で、17は口縁部がやや肥厚し、胴部はＬの撚糸文が施される。18は撚糸文を地文に隆帯により文様が描かれる。19・20は同一個体で、横位の撚糸文を地文に２本の隆帯により曲線文が施文される。口縁部と胴部の境界には１本の隆帯が横走する。21は隆帯により渦巻き文が描かれ、22は縦位の撚糸文を地文に隆帯により文様が施文される。23～34は胴部から底部にかけての破片で、23・24・26～28・31・33・34は地文に撚糸文、25・29・32は縄文、29は半截竹管による沈線文が施される。29は曽利式土器であろうか。文様は23・24に渦巻き文、25・27・28・33に懸垂文が施文される。26は頸部無文帯をもち、胴部との境界には１本の隆帯がまわっている。

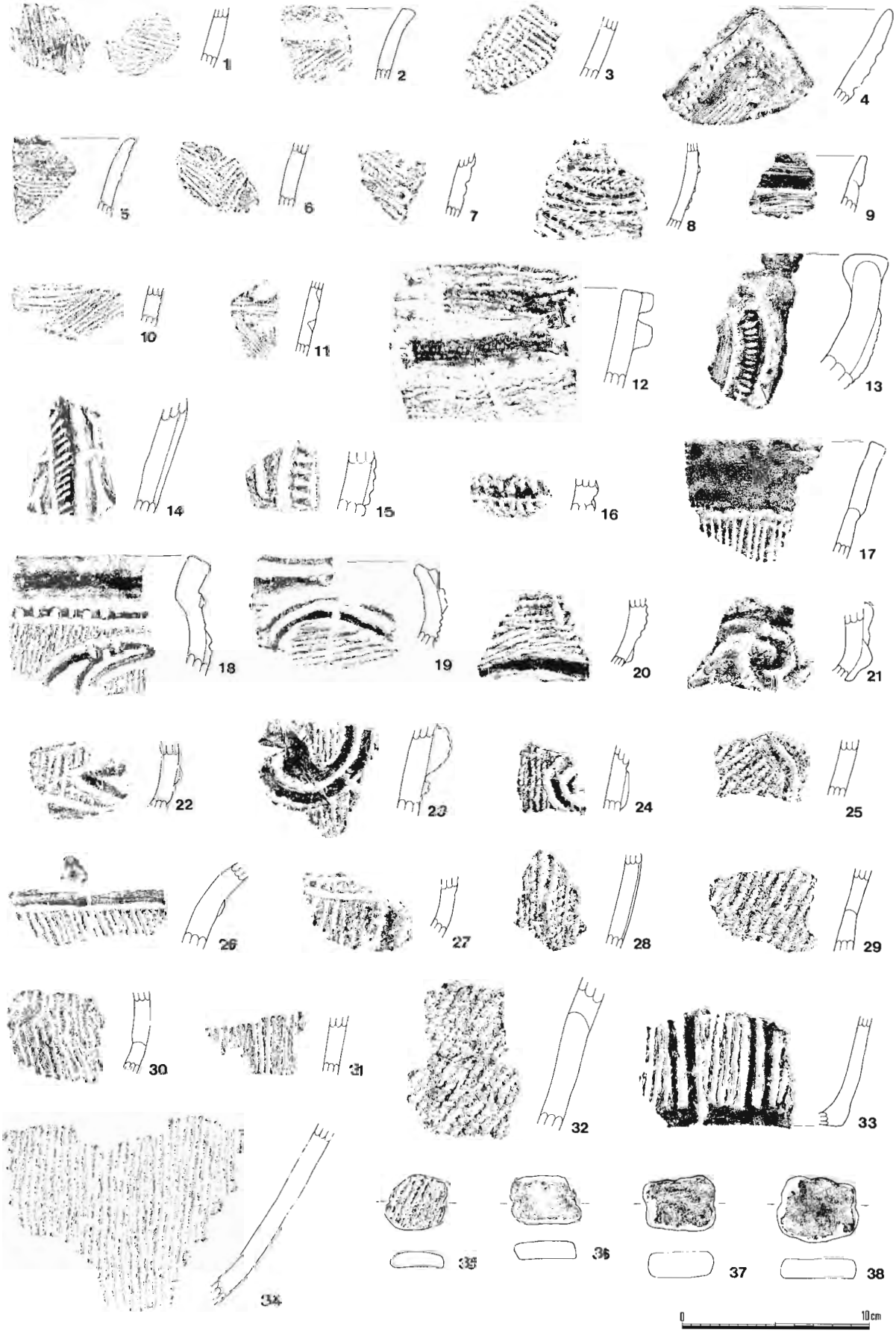
35～38は土錘である。35は地文にＬＲの撚糸文が施されるが、その他は無文である。35は重さ10.0ｇ、36は重さ12.6ｇ、37は重さ20.4ｇ、38は重さ24.0ｇである。

39～53は石器及び剥片である。39・40は打製石斧、41は石皿、42は石鏃、43は彫器、44は二次加工剥片、45～53は剥片である（第４表）。

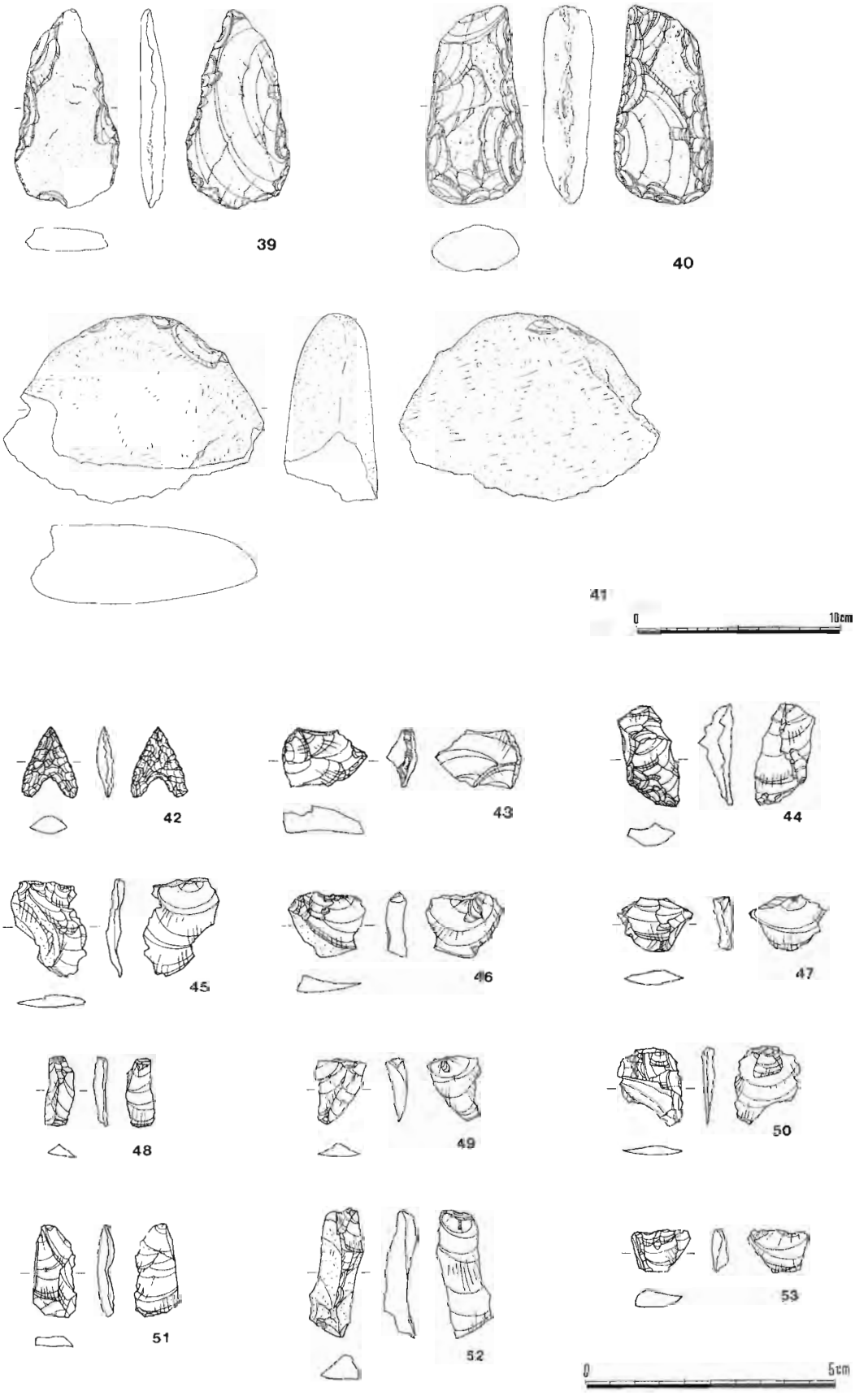
（２）土坑

４号土坑（第７図）

［位置］（Ｂ－７）Ｇ
［構造］（平面形）円形。（規模）74×72㎝。（深さ）８㎝を測る。



第5図　1号住居跡出土遺物1（1／3）



第6図　1号住居跡出土遺物2（1／3・4／5）

［遺物］加曽利ＥⅣ式の深鉢が出土した。
［時期］縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅣ式期）。

４号土坑出土遺物（第９図）

現器高36.5㎝、推定口径44.0㎝。全体的に口縁部から底部にかけてゆるやかにすぼまる器形をもつ大型の深鉢形土器である。文様は口縁部直下に１本の隆帯がまわり、そこから懸垂文が伸び、幅広の縦位区画文を作出するが、その区画中の１カ所のみ胴部途中から１本の隆帯が懸垂している。地文の縄文はＲＬの単節斜縄文が縦位に施文されている。口縁部から胴部下半にかけて、1／2程遺存する。

22号土坑（第７図）

［位置］（Ｂ－９）Ｇ
［構造］14号住居跡に切られる。東半分は調査区域外であるため詳細は不明である。（平面形）円形か。（深さ）66㎝を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）２層に分層される。
［遺物］土器小破片が出土した。
［時期］縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ式期）。

22号土坑出土遺物（第10図１）

胴部破片でＬＲの単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が施文される土器である。

23号土坑（第７図）

［位置］（Ｄ－４）Ｇ
［構造］東側は19号住居跡により壊されているため詳細は不明である。（平面形）円形か。（深さ）49㎝を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。
［遺物］土器小破片が出土した。
［時期］縄文時代後期。

23号土坑出土遺物（第10図２～４）

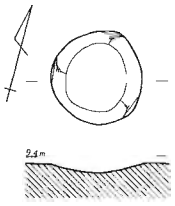
２は斜縄文を地文に区画文が施文されている。３は文様として２段の横走する条線文がみられる。４はＬの無節斜縄文が施されている。

24号土坑（第７図）

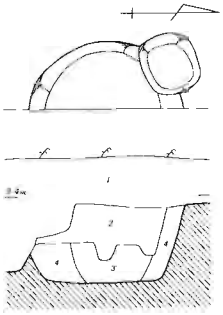
［位置］（Ｅ－４）Ｇ
［構造］（平面形）円形。（規模）96×90㎝。（深さ）18㎝を測る。断面は皿状を呈する。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。
［遺物］早期後葉の条痕文系土器から中期後葉の加曽利Ｅ式の土器小破片が数点出土した。
［時期］縄文時代。

24号土坑出土遺物（第10図５～９）

５・６は条痕文系土器の胴部破片でどちらも胎土に繊維を含んでいる。７は胎土に繊維を含む前期の黒浜式土器で、地文に単節斜縄文が施される。８は集合沈線が施される五領ヶ台式土器であろう。９は加曽利Ｅ式土器で、太沈線による懸垂文が施文される。

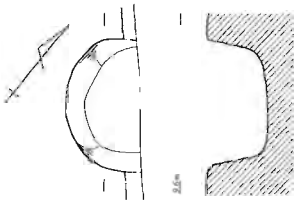


4号土坑

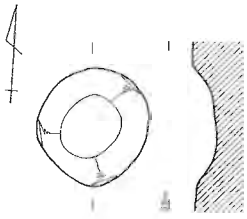


1層 耕作土。
2層 14H覆土。
3層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
4層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

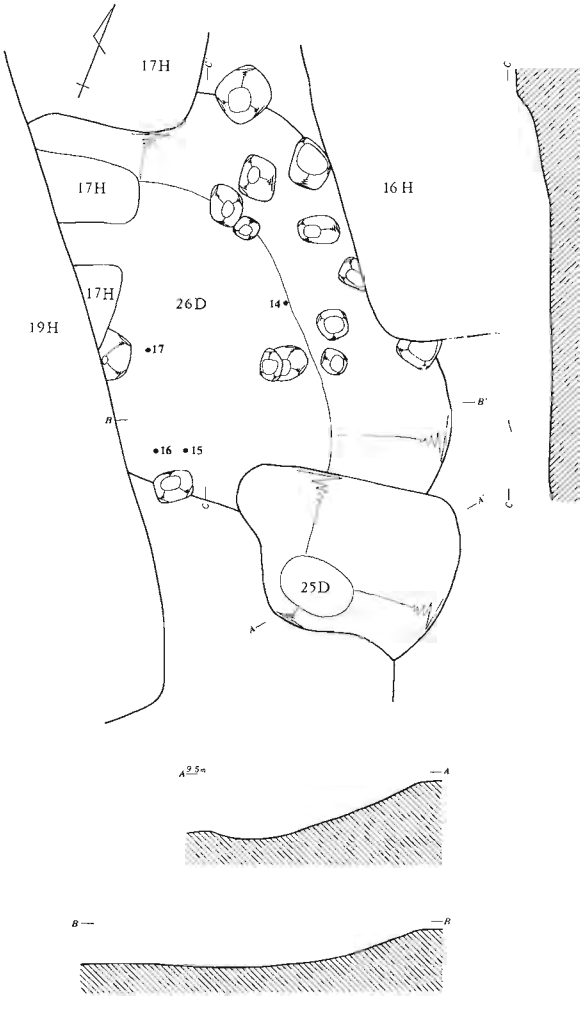
22号土坑



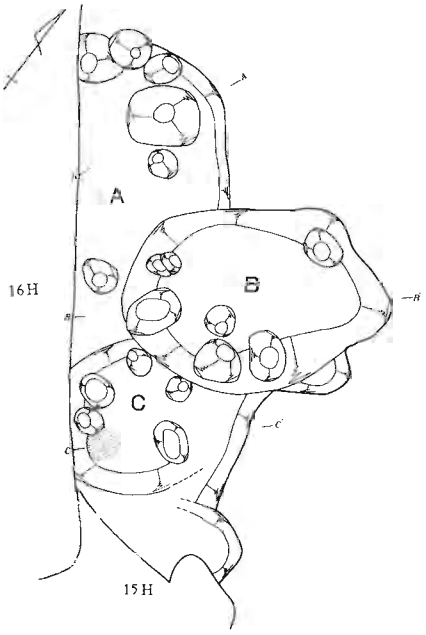
23号土坑

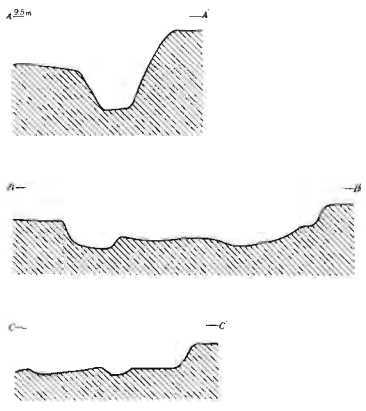


24号土坑



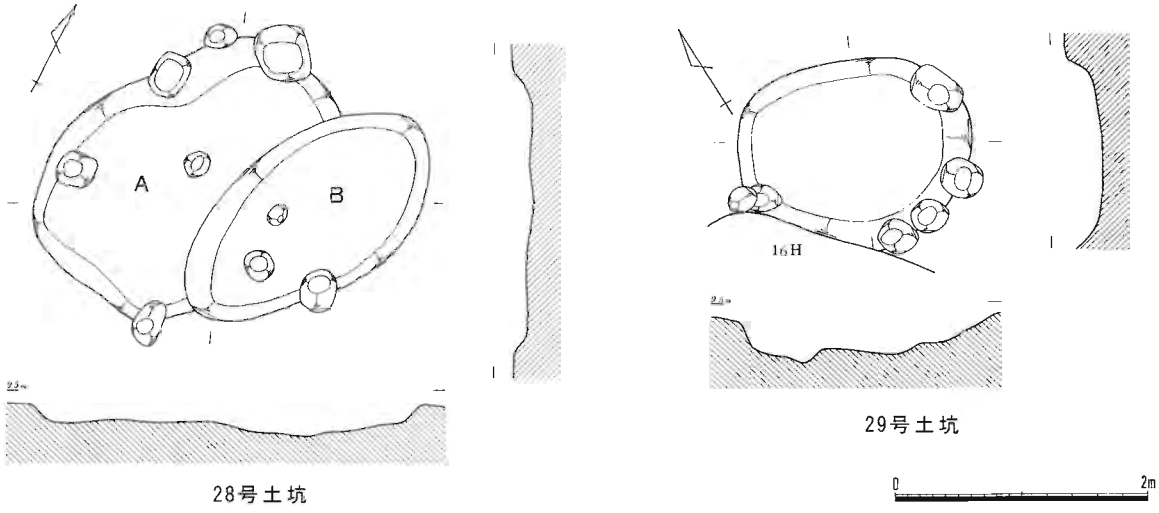
25・26号土坑





27号土坑

第7図　土坑1（1／60）



第8図　土坑2（1／60）

25号土坑（第7図）

［位置］（C－6）G

［構造］4号住居跡に切られ、26号土坑と重複する。（平面形）楕円形か。（深さ）46cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。（覆土）上層はローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］縄文時代の土器小破片が出土した。

［時期］縄文時代早期か。

25号土坑出土遺物（第10図10～13）

10・11は早期後葉の条痕文系土器である。条痕文は斜方向に施文され、胎土には繊維を多く含む。11は条痕文を地文に連続した刺突文が施文されている。12は胎土に繊維を含み、粗い縄文が施されることから、前期前葉の黒浜式土器であろう。13は縄文のみが施文される土器で時期不明である。

26号土坑（第7図）

［位置］（C－6）G

［構造］4号住居跡、16・17・19号住居跡に切られ、25号土坑と重複するため、詳細は不明である。（深さ）30cmを測る。断面は皿状を呈する。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］縄文時代の土器が出土した。

［時期］縄文時代前期前葉（黒浜式期）。

26号土坑出土遺物（第10図14～17）

すべて胎土には繊維を含む前期前葉の黒浜式土器である。

14は口縁部破片で、縄文はRの無節縄文である。15は胴部破片で、縄文はRLの単節斜縄文である。16・17は底部破片で、いずれも無節斜縄文が施文される。

27号土坑（第7図）

［位置］（A－7、B－7）G

［構造］27号土坑として扱ったが、３基が重複していると考えられる。北側からＡ・Ｂ・Ｃとする。

〈27号土坑Ａ〉16号住居跡に切られ、Ｂ・Ｃとも重複しているため詳細は不明である。（深さ）40㎝前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直にに立ち上がる。（覆土）暗茶褐色土を基調とする。

〈27号土坑Ｂ〉（平面形）楕円形に近い。（規模）2.16×1.48ｍ。（長軸方位）Ｎ－55°－Ｅ。（深さ）30㎝前後を測る。東側はさらに４㎝程低くなっている。（覆土）暗茶褐色土を基調とする。

〈27号土坑Ｃ〉16号住居跡に切られ、Ａ・Ｂとも重複しているため詳細は不明であるが、上部から礫が出土しているので集石土坑の可能性がある。また、土坑の南側から直径25㎝程の範囲で焼土が検出された。（覆土）暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］縄文時代の土器小破片が出土した。

［時期］縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ式期）。

27号土坑出土遺物（第10図18～21）

18・19は微隆起線文に区画された磨消懸垂文が施文される土器で、いずれも地文の縄文にはＲＬの単節斜縄文が施される。20はＲＬの単節斜縄文が施される。21は曲線文内に刺突が付されるもので、後期前葉の堀之内１式土器である。色調は黒褐色を呈する。

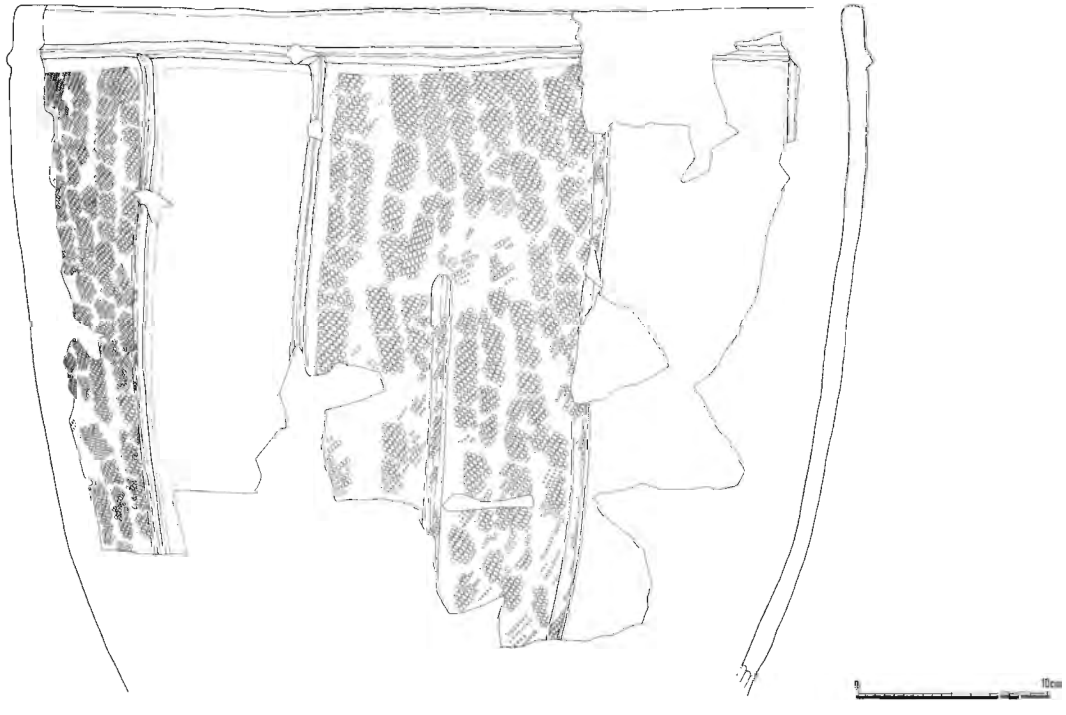
28号土坑（第８図）

［位置］（Ａ－５・６、Ｂ－５・６）Ｇ

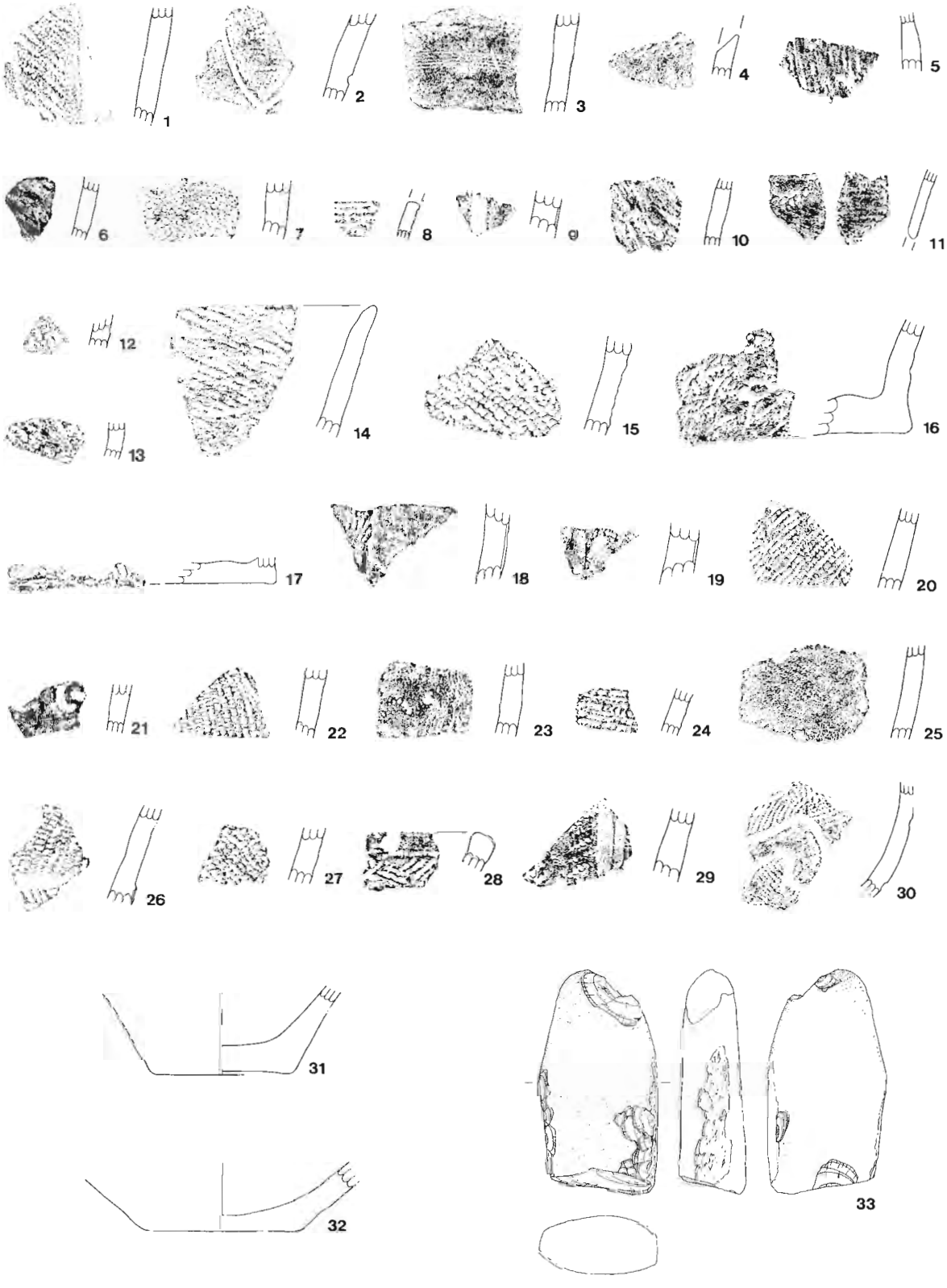
［構造］28号土坑として扱ったが、２基が重複しているものと考えられる。西側からＡ・Ｂとする。

〈28号土坑Ａ〉（平面形）不整形。（規模）不明×2.60ｍ。（長軸方位）Ｎ－35°－Ｅ。（深さ）15㎝前後を測る。（覆土）ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〈28号土坑Ｂ〉（平面形）楕円形。（規模）1.30×1.28ｍ。（長軸方位）Ｎ－22°－Ｅ。（深さ）15～25㎝



第９図　４号土坑出土遺物（1／4）



1　22号土坑出土遺物　　14~17　26号土坑出土遺物
2~4　23号土坑出土遺物　　18~21　27号土坑出土遺物
5~9　24号土坑出土遺物　　22　28号土坑出土遺物
10~13　25号土坑出土遺物　　23~23　29号土坑出土遺物

第10図　土坑出土遺物（1/3）

を測る。中央付近が少し窪んでいる。（覆土）ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］縄文時代の土器小破片が出土した。

［時期］縄文時代中期後葉（加曽利Ｅ式期）。

28号土坑出土遺物（第10図22）

22はＬＲの単節斜縄文の施文のみの破片である。色調は暗橙色を基調とする。

29号土坑（第８図）

［位置］（Ａ－６・７）Ｇ

［構造］16号住居跡に切られる。（平面形）楕円形。（規模）1.86×1.55ｍ。（長軸方位）Ｎ－60°－Ｗ。（深さ）西側が１段深くなっており、20～36㎝を測る。（覆土）上層は炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］前期後葉の諸磯式土器から後期前葉の称名寺１式土器が出土した。

［時期］縄文時代。

29号土坑出土遺物（第10図23～33、第４表）

23は半截竹管による平行沈線文が施文され、部分的には竹管の先端が刺突文風に残る。24は幅の狭い結節沈線文が重層する。前期後葉の諸磯式土器である。

25はＲＬの単節斜縄文を地文にＳ字状結節文が横位に施文される。中期前葉の五領ヶ台式土器である。

26はＲＬの単節斜縄文を地文に刻みをもつ隆帯が施文される。27は地文にＬＲの単節斜縄文が施されるが、時期の詳細は不明である。26は中期中葉の勝坂式土器であろう。

28は口縁部に斜縄文が施され、29は懸垂文が施文される胴部小破片である。中期後葉の加曽利Ｅ式土器であろう。

30は曲線的な区画文内にはＬＲの単節斜縄文が充填される。後期前葉の称名寺１式土器である。

31・32は中期後葉から後期前葉にかけての底部破片で、いずれも外面はていねいに磨かれている。

33は敲石である（第４表）。

（３）炉穴

１号炉穴（第11図）

［位置］（Ｂ－２）Ｇ

［構造］（平面形）円形。（規模）0.66×0.60ｍ。（深さ）14㎝を測る。炉床は厚さ６㎝程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く含む茶褐色土を基調とする。

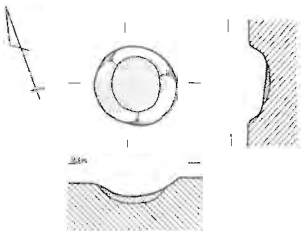
［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代早期後葉。

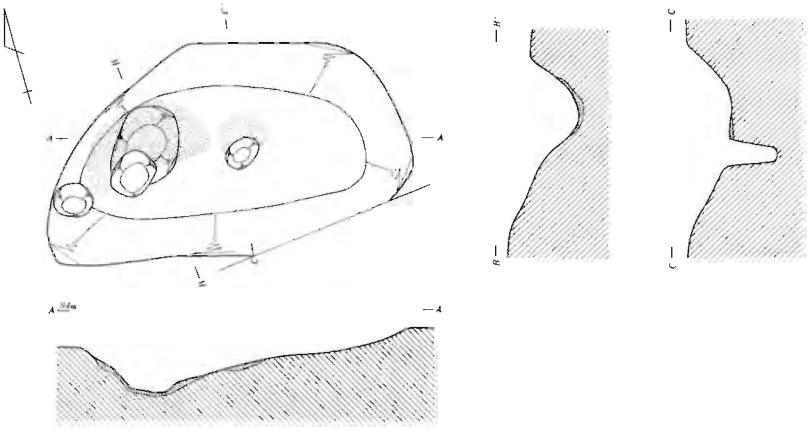
２号炉穴（第11図）

［位置］（Ｅ－３）Ｇ

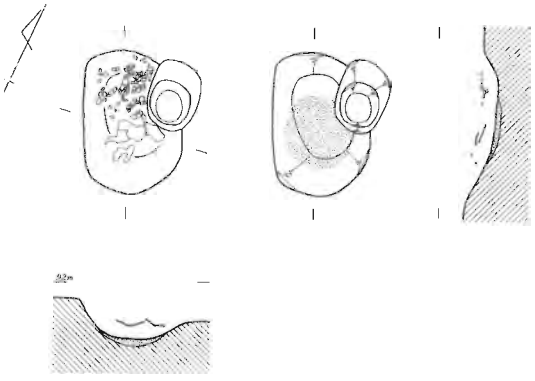
［構造］１号住居跡に切られ、南側の一部は調査区域外である。ピットは後世のものと思われる。（平面形）楕円形。（規模）2.96×1.72㎝。（長軸方位）Ｎ－80°－Ｗ。（深さ）36～52㎝を測る。炉床は厚さ４㎝程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。



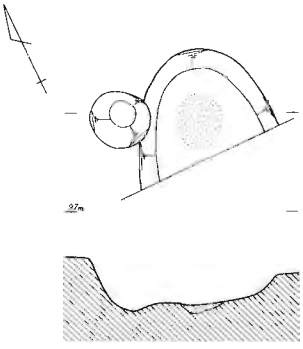
1号炉穴



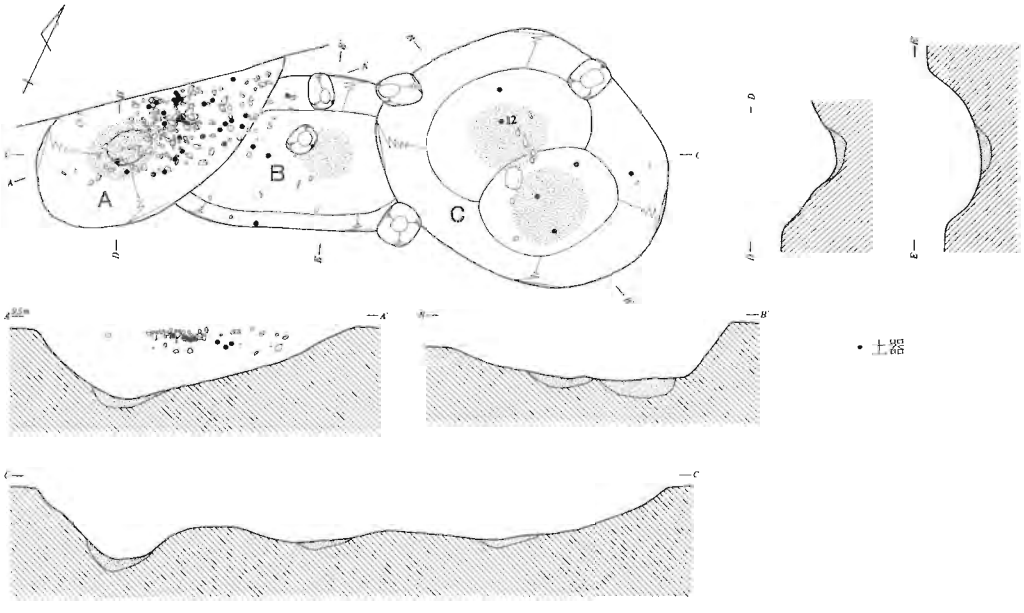
2号炉穴



3号炉穴



5号炉穴



4号炉穴

0 2m

第11図　炉穴（1／60）

［遺物］条痕文系土器・黒浜式土器の土器片と黒曜石の剥片が出土した。

［時期］縄文時代早期後葉。

2号炉穴出土遺物（第12図、第4表）

1～3は条痕文系土器で、すべて胎土に繊維を含んでいる。

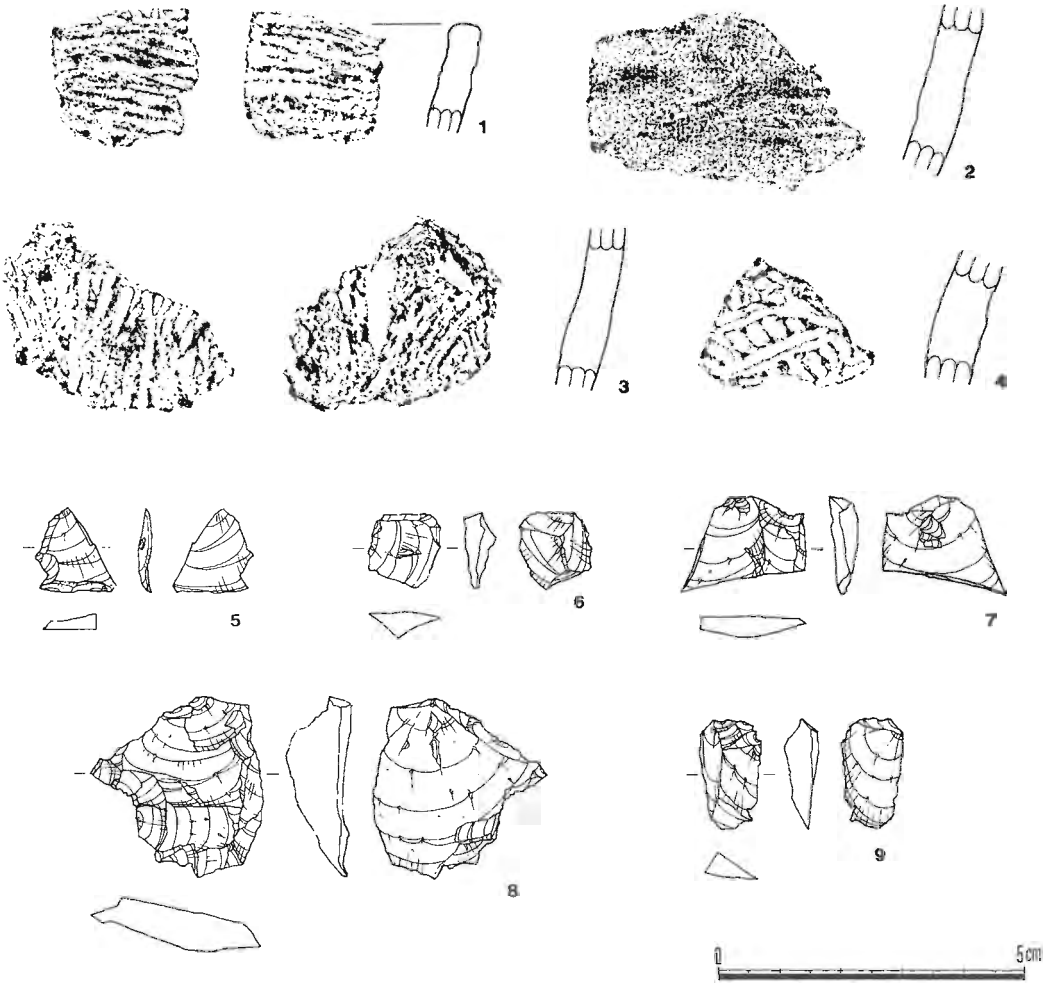
4は前期後葉の黒浜式土器で、縄文はＲＬにＳ巻ＲＬを2本附加した附加条である。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には繊維を含む。

5～9は黒曜石の剥片である（第4表）。

3号炉穴（第11図）

［位置］（Ｅ－2）Ｇ

［構造］1号住居跡に切られる。北側から集石が、南側からは大きい土器片が出土した。（平面形）楕円形。（規模）1.17×0.78ｍ。（長軸方位）Ｎ－25°－Ｗ。（深さ）32cmを測る。炉床は厚さ6㎝程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。集石の部分には焼土粒子が少ない。



第12図　2号炉穴出土遺物（4／5）

［遺物］条痕文系土器の大型破片が出土した。

［時期］縄文時代早期後葉。

3号炉穴出土遺物（第13図1～4）

すべて同一個体である。表裏条痕の土器で、色調は黒褐色を基調とし、胎土には繊維を含む。非常に遺存状態が悪かったため、調査時にパラロイドB72を溶かしたキシレン溶液を含浸させ取り上げたものである。

4号炉穴（第11図）

［位置］（D－5・6）G

［構造］13・19号住居跡に切られる。3基の炉穴が重複しているため、東側からA・B・Cとするピットは後世のものと思われる。

〈4号炉穴A〉（平面形）楕円形。（規模）不明×1.10m。（長軸方位）N－26°－E。（深さ）56cmを測る。炉床は厚いところで10cm程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〈4号炉穴B〉（平面形）楕円形か。（規模）不明×1.25m。（長軸方位）N－67°－E。（深さ）42cmを測る。炉床は8cm程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〈4号炉穴C〉礫と条痕文系土器の破片が出土した。（平面形）楕円形に近い。（規模）2.26×1.90m。（長軸方位）N－62°－W。（深さ）40cm前後を測る。炉床は2ヶ所確認され、西側は10cm、東側は14cm程が焼けて赤化している。（覆土）焼土粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］炉穴Cから条痕文系土器の破片が出土した。

［時期］縄文時代早期後葉。

4号炉穴出土遺物（第13図5～12）

すべて胎土に繊維を含む条痕文系土器である。

5・6は口縁部破片、7～12は胴部破片であろう。6は口縁部直下に補修孔が穿たれている。7・12は内面にも条痕文が観察される。

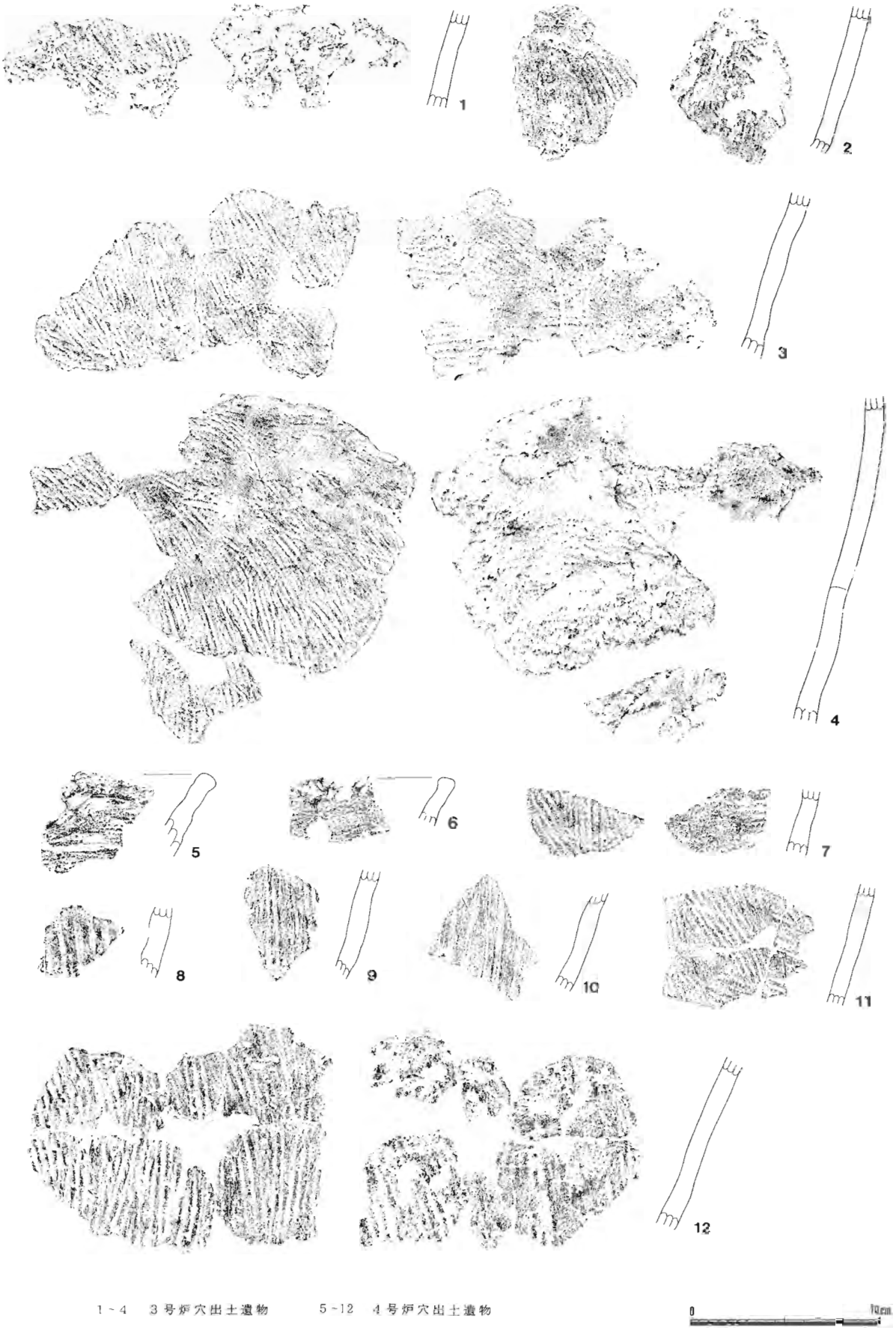
5号炉穴（第11図）

［位置］（E－4）G

［構造］南側は調査区域外にあると思われる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×1.10m。（長軸方位）N－10°－E。（深さ）36cmを測る。炉床は厚さ6cm程が焼けて赤化している。（覆土）上層がローム粒子含む黒褐色土、下層は焼土粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代早期後葉。



第13図　3・4号炉穴出土遺物（1／3）

第2節　弥生時代

4号住居跡（第14図）

〔住居構造〕19号住居跡に切られる。（平面形）隅丸方形。（規模）不明×3.36ｍ。（壁高）24～30㎝を測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。（炉）後世の掘り込みにより壊されているため詳細は不明であるが、中央よりやや北に偏って位置すると思われる。（柱穴）主柱穴は検出されなかったが、南壁中央付近の深さ10㎝のピットは入口部の梯子穴と思われる。（貯蔵穴）東コーナーに位置し、平面形は楕円形を呈し、規模は40×33㎝、深さ15㎝を測る。覆土はローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。周囲には高さ４～６㎝の凸堤が巡っている。（覆土）上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土、下層はローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。

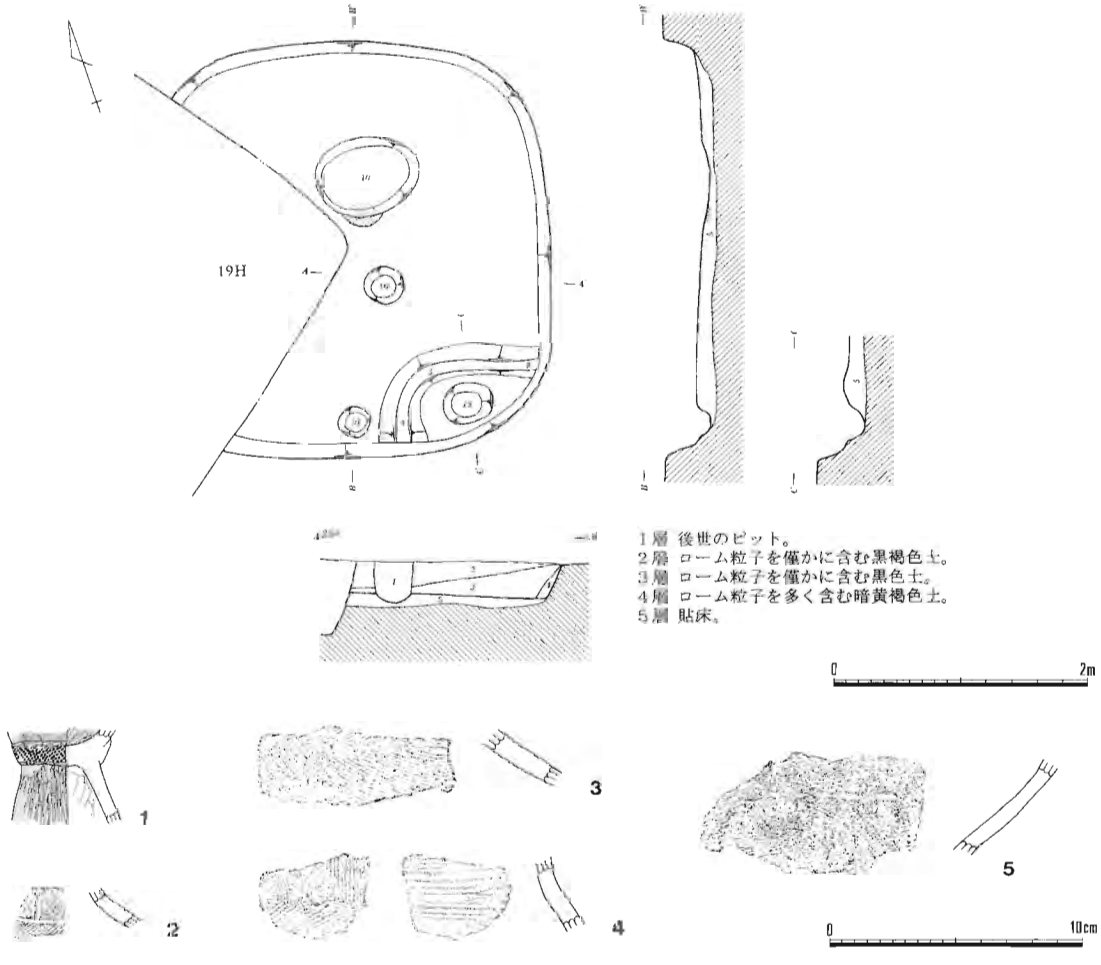
［遺物］覆土中から高坏・壷・甕の小破片が出土した。。

［時期］弥生時代後期。

4号住居跡出土遺物（第14図）

高坏形土器（１）

高坏の坏部下半から脚台部にかけての破片である。境界部にはＲＬの単節斜縄文をもつ幅１㎝程の補



第14図　４号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）

強帯が貼り付けられており、補強帯を除く外面及び坏部内面は赤彩が施されている。胎土には白色粒子・黄褐色粒子を含む。外面は補強帯部を除きハケ目調整後ヘラ磨き調整が施され、坏部内面はヘラ磨き調整、脚台部内面はヘラナデが施される。覆土中からの出土である。

壷形土器（２・３）

２は横位文様帯として沈線に区画されたＬＲの単節斜縄文、縦位文様帯として沈線に区画された網目状撚糸文が施される。無文部は赤彩が施される。色調は黄褐色を基調とし、胎土には暗黄褐色粒子を僅かに含む。

３は肩部で、上下２段の無節斜縄文により羽状構成の文様が描かれる。また、上下２段の縄文帯の境には円形赤彩文が1.5cmの間隔で３つ観察される。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には暗黄褐色粒子・橙色粒子を含む。内面には横ナデが施される。

甕形土器（４・５）

４・５はハケ甕の小破片である。４は頸部で、色調は黒茶褐色を基調とし、胎土には暗黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。内外面ハケ目調整が施される。

５は胴部下半で、色調は内面が黒色、外面が淡茶褐色を呈する。胎土は暗黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。内面はハケ目調整、外面はヘラナデが施される。

第３節　古墳時代

10号住居跡（第15・16図）

〔住居構造〕住居の南側は調査区域外である。11号住居跡、５・６・９・10・11号土坑に切られる。（平面形）正方形か。（規模）不明×7.40ｍ。（壁高）35cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では、カマド部分を除いて全周する。上幅17～28cm・下幅５～10cm・深さ６～21cmを測る。（床面）壁際と住居中央の一部を除いてよく硬化している。（カマド）北壁の中央よりやや東に偏って位置する。主軸方位はＮ－12°－Ｗ、長さ120cm・幅112cm・壁への掘り込み15cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に灰褐色粘土を被覆して構築している。天井部も粘土で構築されていたものと考えられる。北側は後世のピットにより壊されている。（柱穴）主柱穴と思われるものは４本確認され、深さは101～108cmを測る。西南のピットの中から甕が１点出土している。（貯蔵穴）カマド右側の北東コーナーに位置し、平面形は長方形を呈する。規模は160×98cm・深さ86cmを測る。周囲には幅12～20cm・深さ６～８cm程の段が設けられている。これは蓋を受けるためのものと考えられる。（覆土）７層に分層される。

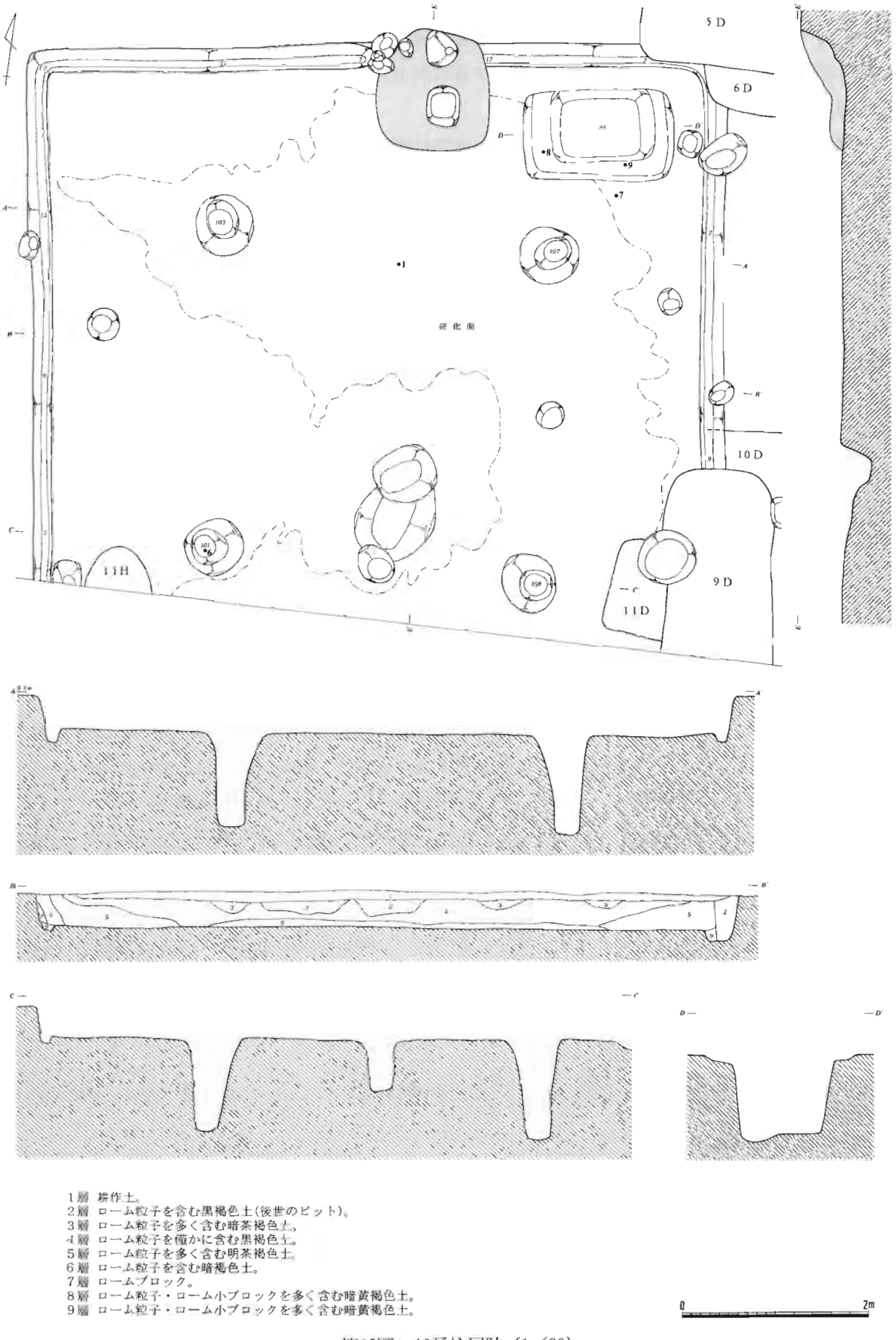
［遺物］貯蔵穴内やその付近から土師器坏・高坏・甕・甑が出土した。その他、覆土中から骨製品・鉄滓（スラッグ）が出土した。

［時期］古墳時代後期（６世紀中葉）。

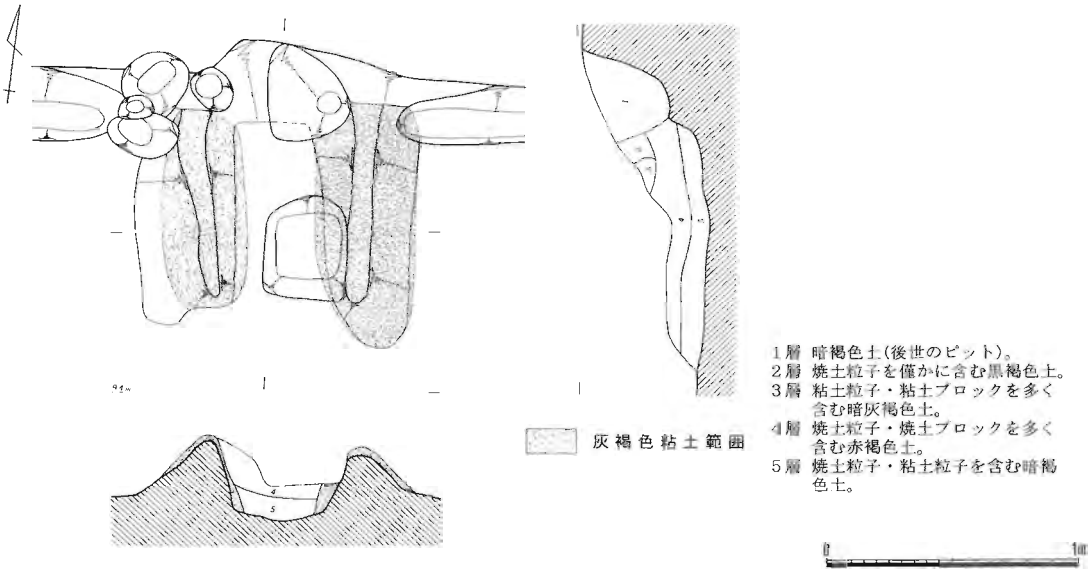
10号住居跡出土遺物（第17図、図版11－１・４）

土師器坏形土器（第17図１～３）

１は器高4.5cm、推定口径17.1cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋模倣の土器である。口縁部は大きく開き、口唇上には幅１㎜程の沈線がまわる。内面には放射状の暗文が施文されている。色調は特に内面が黒斑状に黒色を呈していることから、黒色土器の可能性がある。胎土には砂粒を含む。



第15図　10号住居跡（1／60）



第16図　10号住居跡カマド（1／30）

内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。住居中央付近の床面上からの出土で、遺存度1／3程である。

2は器高5.0cm、口径17.4cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋模倣の土器である。1に比べ、やや深身で、口唇部は丸い。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。住居中央付近の床面上からの出土で、遺存度1／2程である

3は現器高2.0cm。須恵器坏蓋の模倣坏である。全面黒色処理が施され、胎土には白色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。床面上からの出土で、底部から口縁部にかけて、1／4程遺存する。

土師器坩形土器（第17図4）

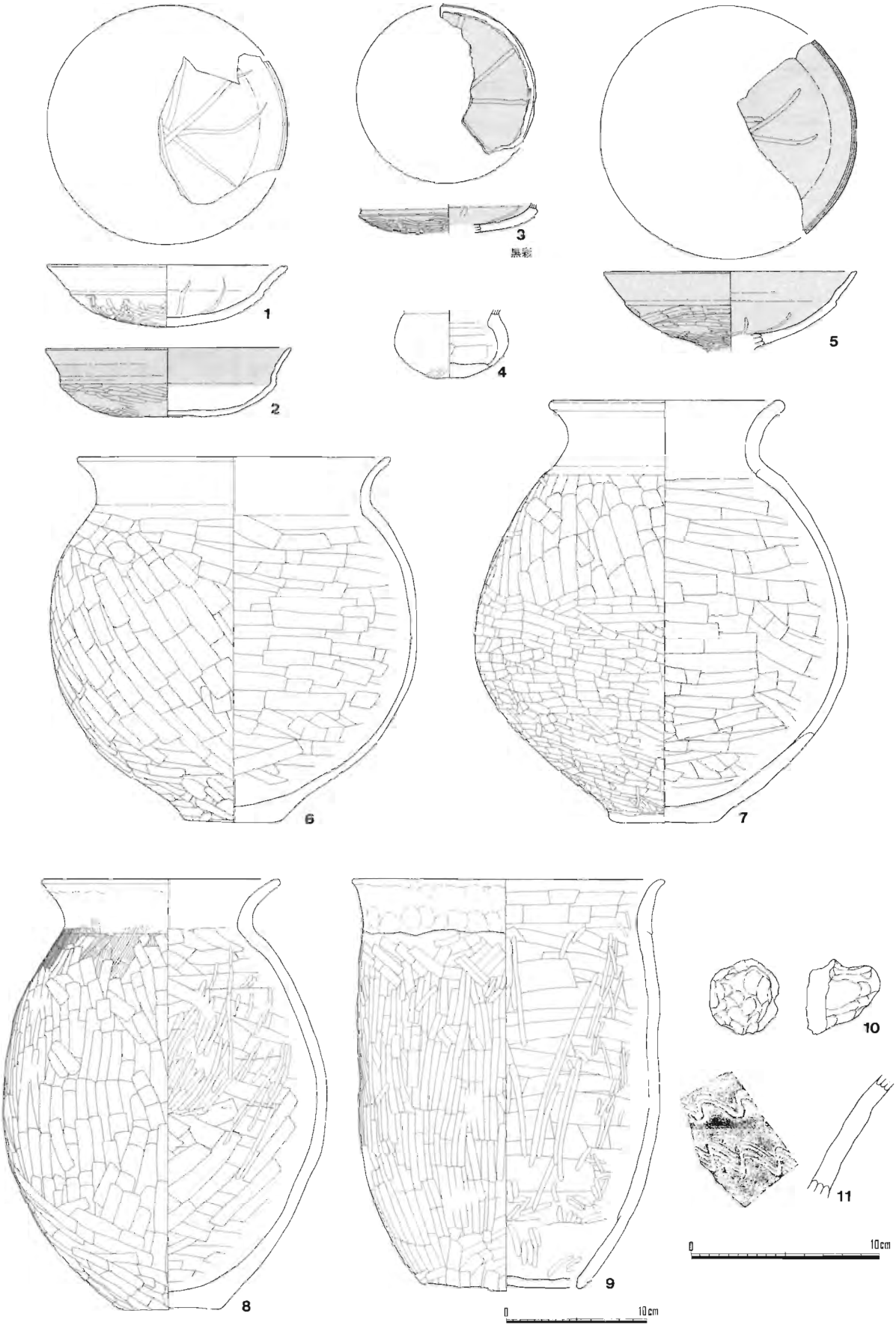
現器高4.9cm。小型のもので、ややつぶれた体部と碁笥底状の底部もつ。全面赤彩が施されるものと思われるが、遺存状態が悪く詳細不明である。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。体部内面はヘラナデ、外面には僅かにハケ目痕が残る。覆土中からの出土で、口縁部から体部過半にかけて、4／5程遺存する。

土師器高坏形土器（第17図5）

現器高5.7cm、推定口径17.9cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器無蓋高坏模倣の土器である。口縁部は大きく開き、口唇上に幅1㎜程の沈線がまわる。内面には放射状の暗文が施文されている。全面赤彩が施され、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はハケ目調整後、ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、坏部を1／3程遺存する。

土師器甕形土器（6～8）

6は器高26.4cm、口径22.2cm、底径6.8cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部が外反する球胴甕である。色調は明橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。南西コーナーの柱穴内からの出土で、遺存度は4／5強である。



第17図　10号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

7は器高30.4cm、口径16.6cm、底径7.8cm。6に比べ、細頸で全体に厚ぼったい土器である。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黒色粒子・金雲母・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ削りが施されるが、胴部中位以下にはその後、横方向にヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴付近の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

8は器高31.1cm、口径16.8cm、底径7.2cm。6・7の土器に比べ、長胴傾向がみられる土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後、縦方向に粗いヘラ磨き調整、外面はヘラ削りが施されるが、胴部上半にはハケ目痕が残る。貯蔵穴内からの出土で、ほぼ完形品である。

土師器甑形土器（第17図9・10）

9は器高30.5cm、口径22.2cm、底径11.2cm。底部は筒抜け式。口縁部は幅の広い複合口縁を呈し、胴部下半に膨らみをもつ。口縁複合部は指頭押捺の成形痕が残る。色調は淡橙色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・金雲母・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後、粗いヘラ磨き調整、外面は縦方向に粗いヘラナデが施される。貯蔵穴内からの出土で、ほぼ完形品である。

10は親指状を呈する把手部分の小破片である。色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。表面にはナデによる成形痕が観察される。

須恵器甕形土器（第17図11）

頸部小破片である。文様として上下2段に櫛状工具による波状文が描かれている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。

骨製品（図版11－1）

1は両端に、2は片端に鋭い切断面が観察されることから、一応ここでは骨製品として取り扱った。

鉄滓（図版11－4）

覆土中からの出土であるが、混入物である可能性がある。総量は196ｇ。

13号住居跡（第18図）

〔住居構造〕南コーナーは調査区域外である。（平面形）正方形。（規模）4.78×4.54ｍ。（壁高）15cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除いてよく硬化している。（柱穴）検出されなかった。（凸堤）南壁の近くに高さ8cm程の馬蹄形状になると思われる凸堤が確認された。（覆土）焼土粒子・ローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。南西壁の中央付近で粘土と焼土が多く検出された。

［遺物］床面上から土師器坏・椀・高坏・甑・甕が出土している。

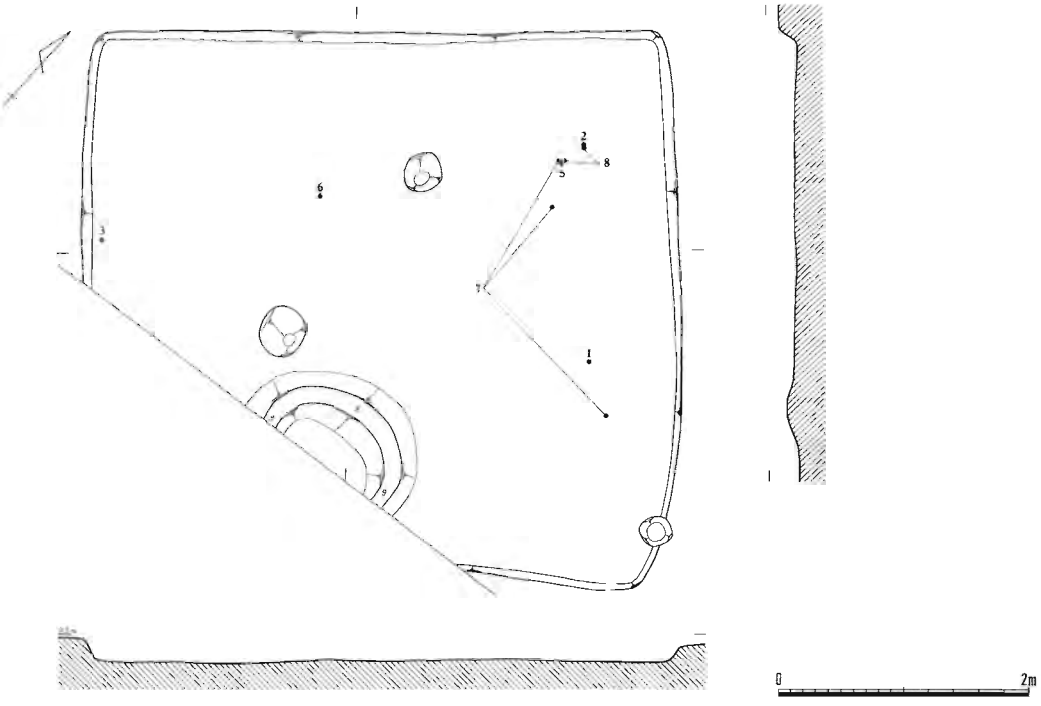
［時期］古墳時代後期（5世紀後葉）。

［所見］南壁近くから確認された凸堤は、入口部に関連する施設である可能性がある。

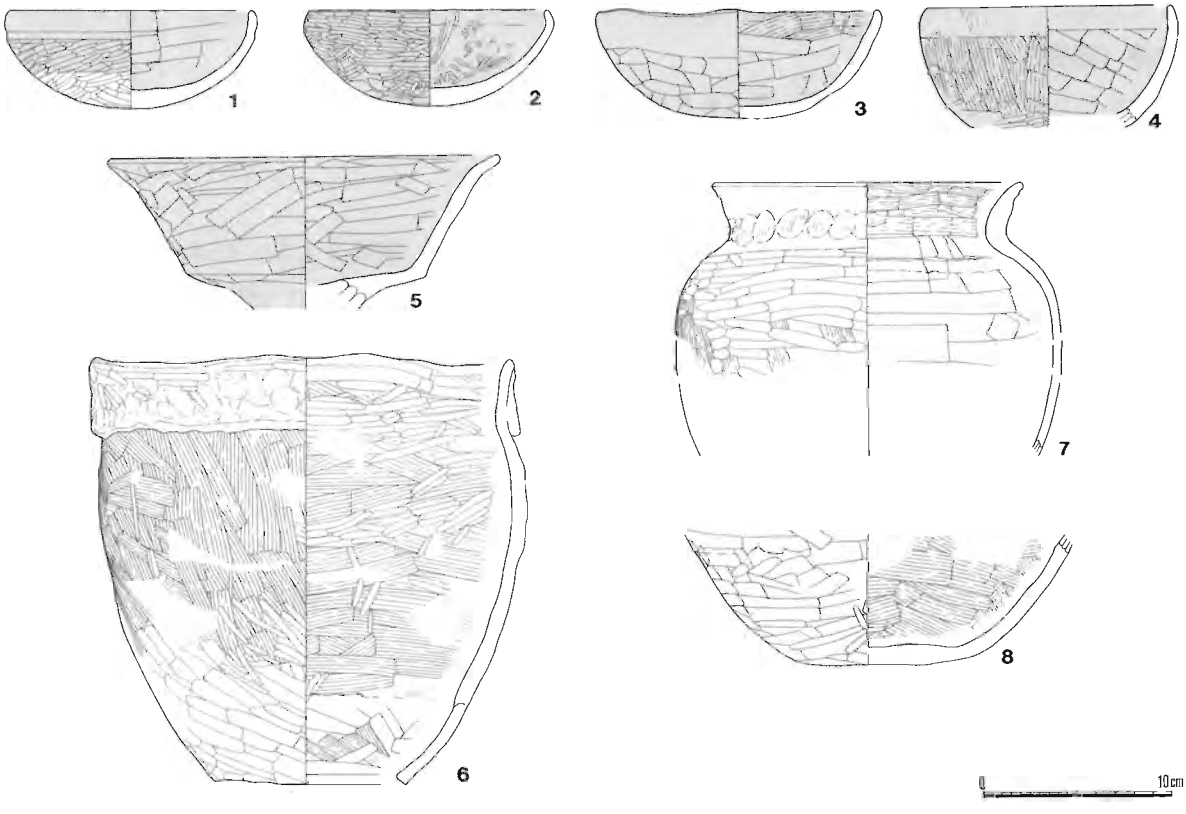
13号住居跡出土遺物（第19図）

土師器坏・椀形土器（1～4）

1は器高5.3cm、推定口径13.0cm。全体の器形は半球状を呈し、口縁部に有段をもつ。有段は直上に幅3㎜程の沈線を施すことにより、有段状に作出されているものである。外面底部を除き赤彩が施され、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。底部付近はヘラ磨きが粗く、ヘラ削り痕が残る。北東壁近くの床面上



第18図　13号住居跡（1／60）



第19図　13号住居跡出土遺物（1／4）

からの出土で、遺存度は1／2程である。

2は器高5.2cm、口径12.6cm。全体の器形は半球状を呈するが、口縁部は内屈する。全面赤彩が施され、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下全面ヘラ磨き調整が施されるが、外面体部以下にはヘラ削り痕が残る。南コーナー近くの床面上からの出土で、遺存度は4／5強である。

3は器高6.0cm、口径15.1cm。半球状を呈する大型の椀である。全面赤彩が施され、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面はハケ目調整後、ヘラナデ、外面は口縁部が横ナデ、以下ヘラ削り調整が施される。南西壁近くの床面上からの出土で、遺存度は4／5強である。

4は現器高6.5cm、推定口径13.0cm。3に比べ深身の椀である。全面赤彩が施され、胎土には茶褐色粒子・黒色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後、底部を中心に粗いヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて、1／4弱遺存する。

土師器高坏形土器（5）

現器高8.2cm、口径20.9cm。口縁部が大きく外反する大型のものである。全面赤彩が施され、胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデが施され、外面は全体に粗いヘラナデが施されることにより、縦方向のヘラ磨き調整が消去されている。南コーナー近くの床面上からの出土で、坏部を2／3程遺存する。

土師器甑形土器（6）

器高23.3cm、口径22.2cm、底径10.1cm。底部は筒抜け式。口縁部は幅の広い複合口縁を呈し、胴部上半に膨らみをもつ全体に器厚が厚くずんぐりした土器である。口縁複合部は指頭押捺の成形による指紋がよく観察できる。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面ハケ目調整後、胴部下半を中心にヘラ削りが施され、その後粗いヘラ磨き調整が施される。住居中央近くの床面上からの出土で、遺存度は1／2程である。

土師器甕形土器（7・8）

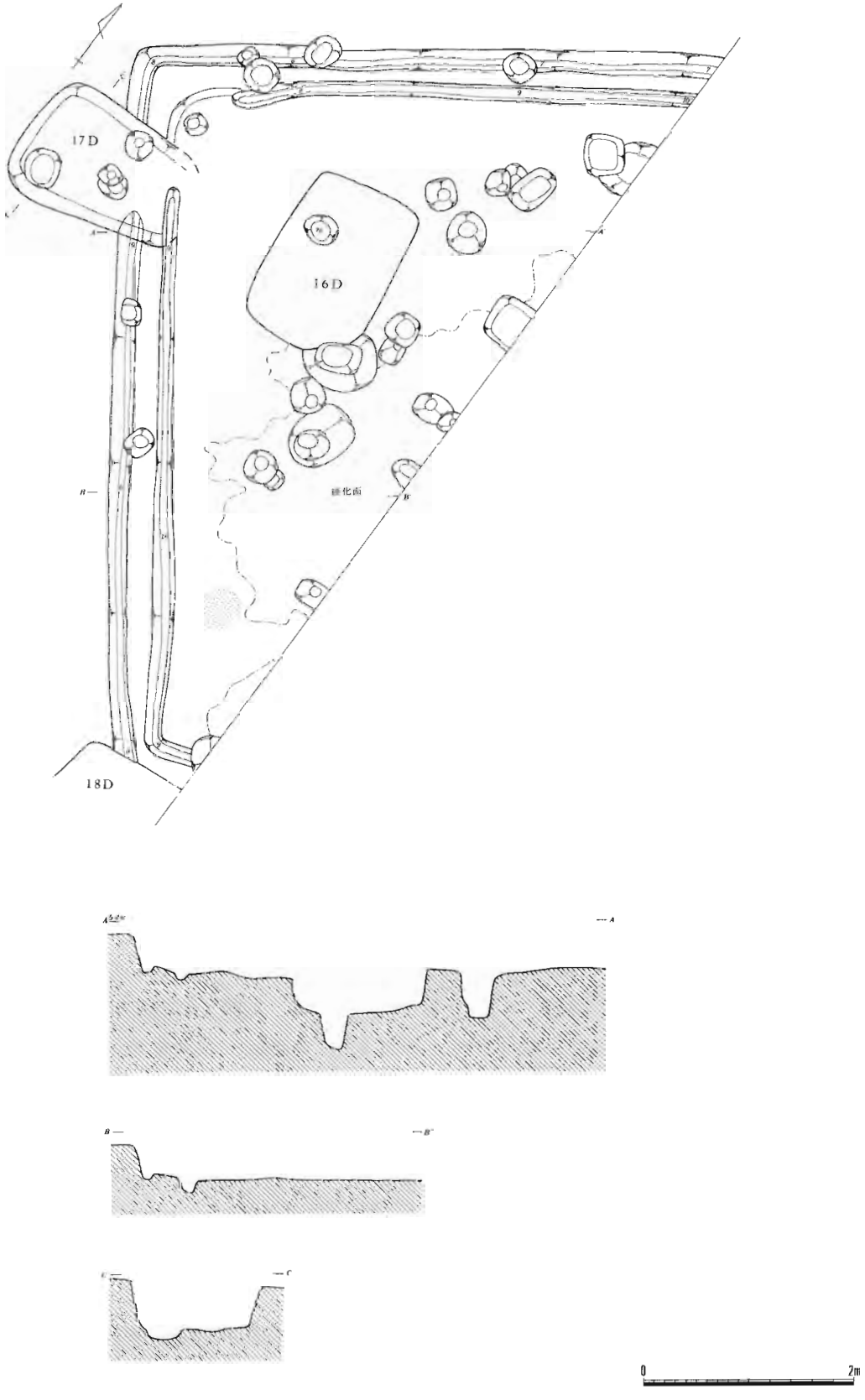
7は現器高14.8cm、推定口径16.5cm。胴部上半に最大径をもち、口頸部は「く」字状を呈する。口縁部直下には指頭押捺による成形痕が観察される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面は口縁部がハケ目調整、以下ヘラナデが施され、外面は口縁部が横ナデ、以下ハケ目調整後、粗いヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて、1／3程遺存する。

8は現器高7.7cm、底径6.7cm。色調は内面が暗茶褐色、外面は黒色を呈し、胎土には茶褐色粒子・黒色粒子・砂粒を含む。内面は目の粗いハケ目調整、外面はヘラ削り後、粗いヘラ磨き調整が施される。南コーナー近くの床面上からの出土で、胴部下半を4／5程遺存する。

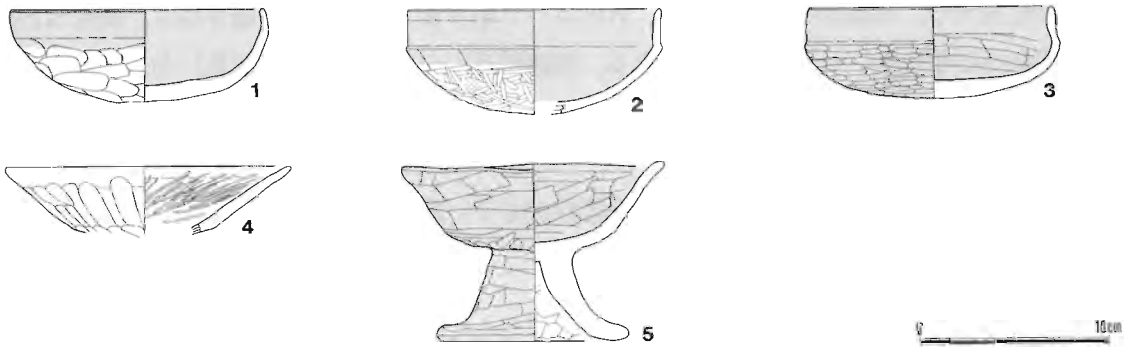
14号住居跡（第20図）

〔住居構造〕16・17・18号土坑に切られ、22号土坑を切る。住居の東半分は調査区域外であるため、詳細は不明である。壁溝が二重に巡っていることから、拡張住居である可能性がある。ここでは、内側を住居跡A、外側を住居跡Bとして取り扱うことにする。

〈住居跡A〉（平面形）方形。（規模）不明×6.50m。（壁溝）西コーナーで一旦途切れている。上幅13～22cm・下幅4～9cm・深さ6～10cmを測る。（床面）住居中央がよく硬化しており、南西壁の南コー



第20図　14号住居跡・17号土坑（1／60）



第21図　14号住居跡出土遺物（1／4）

ナー寄りの床面が一部焼けて赤化していた。（柱穴）多数検出されたが、ほとんどは本住居跡に伴うものではなく、16号土坑に切られている深さ76cmのものが主柱穴の１本と思われる。（覆土）ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〈住居跡Ｂ〉（平面形）方形か。（規模）不明。（壁高）26～36cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では全周する。上幅16～23cm・下幅４～８cm・深さ６～９cmを測る。（床面）住居跡Ａより若干高めである。

［遺物］住居跡Ａから土師器高坏、住居跡Ｂから土師器坏・高坏が出土した。その他、覆土中から鉄滓（スラッグ）が出土した。

［時期］古墳時代後期（５世紀後葉）。

14号住居跡出土遺物（第21図、図版11－４）

土師器坏・埦形土器（１～３）

１は器高5.0cm、口径13.4cm。全体の器形は半球状を呈する。口縁部外面及び底部は赤彩が施され、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子を含む。口縁部外面及び内面は横ナデ、外面は以下ヘラ削りが施される。南西壁近くの床面上（住居跡Ｂ）からの出土で、遺存度は４／５程である。

２は器高5.6cm、推定口径13.4cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋模倣の土器である。口縁部は直立し、口唇部は僅かに外反する。口縁部外面及び内面は赤彩が施され、胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。南西壁近くの床面上（住居跡Ｂ）からの出土で、遺存度は１／２程である。

３は器高4.9cm、口径13.0cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋模倣の土器で、２に比べ、やや底部に丸みをもつ。全面赤彩が施され、胎土には暗橙色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削り調整が施される。南西壁近くの床面上（住居跡Ｂ）からの出土で、遺存度は４／５強である。

土師器高坏形土器（４・５）

４は現器高3.7cm、推定口径15.1cm。口縁部が大きく外傾する大型のものである。色調は暗橙色を呈し、胎土には黄褐色微粒子・黒色微粒子・砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後、放射状の暗文が施され、外面は縦方向のヘラ削りが施される。南西壁近くの床面上（住居跡Ａ）からの出土で、坏部を４／５強遺存する。

５は器高9.7cm、口径14.0cm、底径10.2cm。坏部は口縁部が僅かに外反し、底部はやや丸味をもつ。脚

部は短く、裾部に向かって外反する。全体に厚手で粗雑品である。脚部内面を除き全面赤彩が施され、胎土には砂粒を含む。坏部は内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラナデが施される。脚部は内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラナデが施される。南西壁近くの床面上（住居跡B）からの出土で、完形品である。

鉄滓（図版11－4）

覆土中からの出土であるが、混入物である可能性がある。総量は10.2ｇ。

15号住居跡（第22図）

〔住居構造〕16号住居跡に切られる。（平面形）正方形。（規模）4.20×4.12ｍ。（壁高）30～43㎝を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅16～26㎝・下幅６～12㎝・深さ10～20㎝を測る。（床面）南壁からカマド前面にかけてよく硬化している。（カマド）北壁の中央よりやや東に偏って位置する。主軸方位はＮ－11°－Ｅ、長さ143㎝・幅95㎝・壁への掘り込み43㎝を測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に灰褐色粘土を被覆して構築している。天井部も粘土で構築されていたものと考えられる。壁から20㎝程離れたところから支脚が立った状態で出土した。煙道は60°程の勾配で立ち上がったのち緩やかに伸びていく。（柱穴）主柱穴と思われるものは検出されなかった。（貯蔵穴）カマド右側の東コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は57×66㎝・深さ64㎝を測る。南側には４㎝程の高さの凸堤があり、西側は、カマド前面の床面より７㎝程低く段になっている。上部より甕が出土した。（覆土）上層はローム粒子・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土、中層はローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子・炭化材を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］床面上から土師器坏・甕・甑などが多数出土している。

［時期］古墳時代後期（６世紀後葉）。

［所見］覆土中より炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と思われる。

15号住居跡出土遺物（第23図）

土師器坏・椀形土器（１～６）

１は器高3.2㎝、口径15.0㎝。口縁部が大きく開く偏平な土器である。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。カマド左横の床面上からの出土で、遺存度は１／２程である。

２は現器高3.5㎝、口径14.7㎝。１の土器と胎土・調整ともに類似する土器である。口唇上に幅１㎜程の沈線がまわる。南壁近くの床面上からの出土で、遺存度は１／２程である。

３は器高4.8㎝、推定口径16.0㎝。１・２に比べ、大型で深身である。内面及び口縁部は赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラ磨き調整が施される。住居中央付近の床面上からの出土で、遺存度は１／２程である。

４は現器高4.9㎝、推定口径15.7㎝。１～３の土器に比べ、底部と口縁部との境にやや明瞭な稜を有する。外面底部を除き赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含み、１・２の土器に類似する。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデが施される。南壁近くの床面上か

らの出土で、遺存度は1／3程である。

5は器高4.2cm、口径15.1cm。底部と口縁部との境にやや不明瞭であるが段を有する須恵器坏蓋の模倣坏である。全面黒色処理が施され、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。南壁近くの床面上からの出土で、遺存度は4／5程である。

6は器高3.7cm、口径13.4cm。底部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が内湾する偏平な土器である。胎土には黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。住居中央からやや東壁に寄った床面上からの出土で、完形品である。

土師器壷形土器（7）

小型の短頸壷であろうか。器高12.3cm、口径11.8cm。体部中位に最大径をもち、口縁部は直立する。口縁部から体部中位にかけての内外面は赤彩が施される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。南壁近くの床面上からの出土で、遺存度は4／5強である。

土師器甕形土器（8～11）

8は器高14.0cm、口径17.0cm、底径8.4cm。口縁部が大きく外反する小型の球胴甕である。色調は黒橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／3程である。

9は器高24.3cm、口径19.3cm、底径7.9cm。胴部中位に膨らみをもち、口頸部は「コ」字状を呈する。色調は黒褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面は胴部上半から下半にかけてが縦方向のヘラナデ、底部付近は横方向にヘラ削りが施されるが、その後、全体に粗いヘラ磨き調整が施される。住居中央からやや西壁に寄った床面上からの出土で、遺存度は2／3強である。

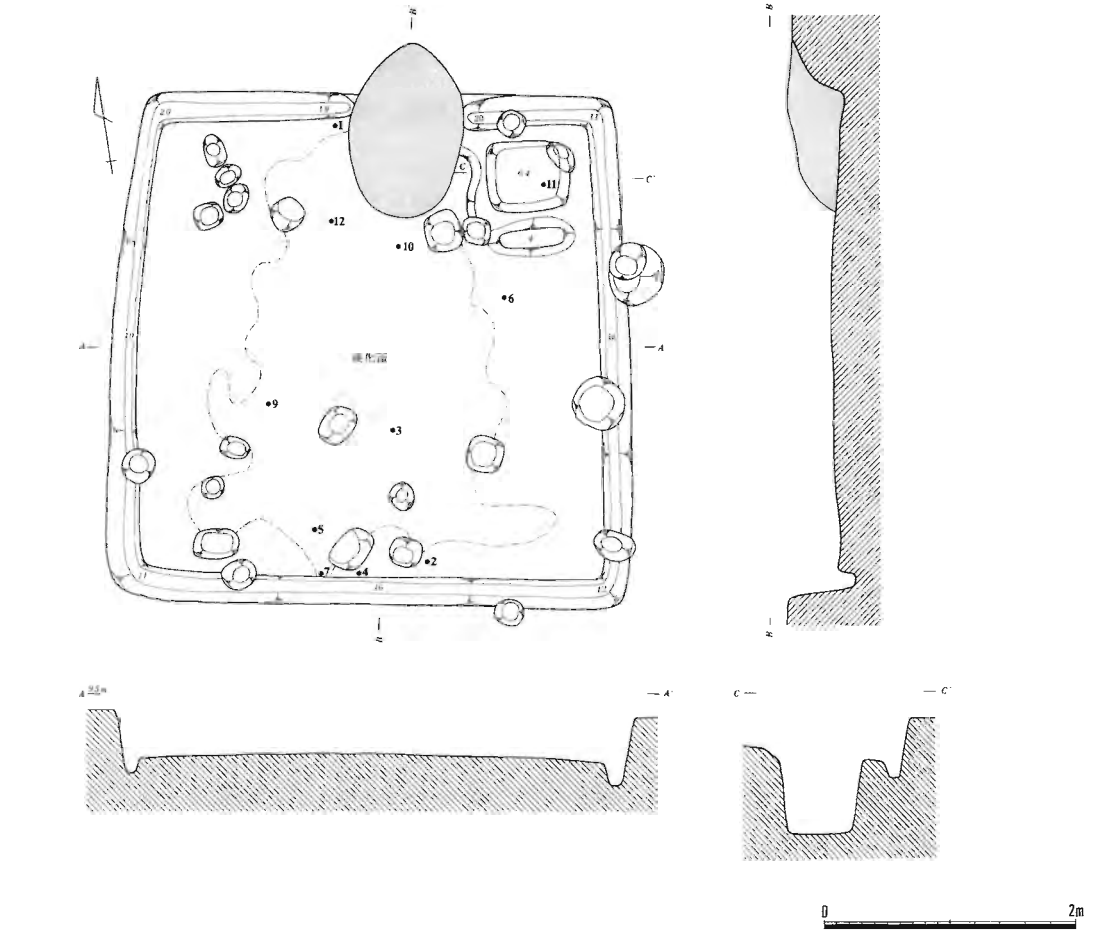
10は器高32.1cm、口径20.2cm、底径7.0cm。口縁部は外反し、胴部には長胴傾向がみられる。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施されるが、胴部上半にはその後ハケ目調整が施される。カマド前面の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

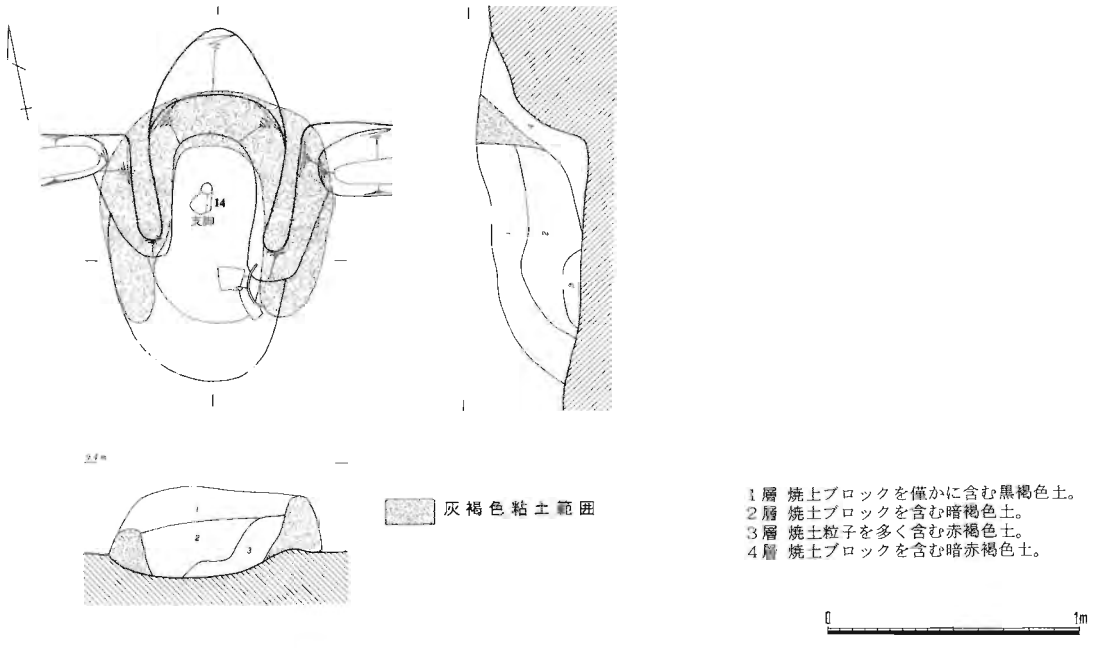
11は器高31.9cm、推定口径17.6cm、底径6.6cm。10の土器に比べ、胴部は卵形状に膨らみをもつ。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデが施されるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕が残る。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は1／2強である。

土師器甑形土器（12・13）

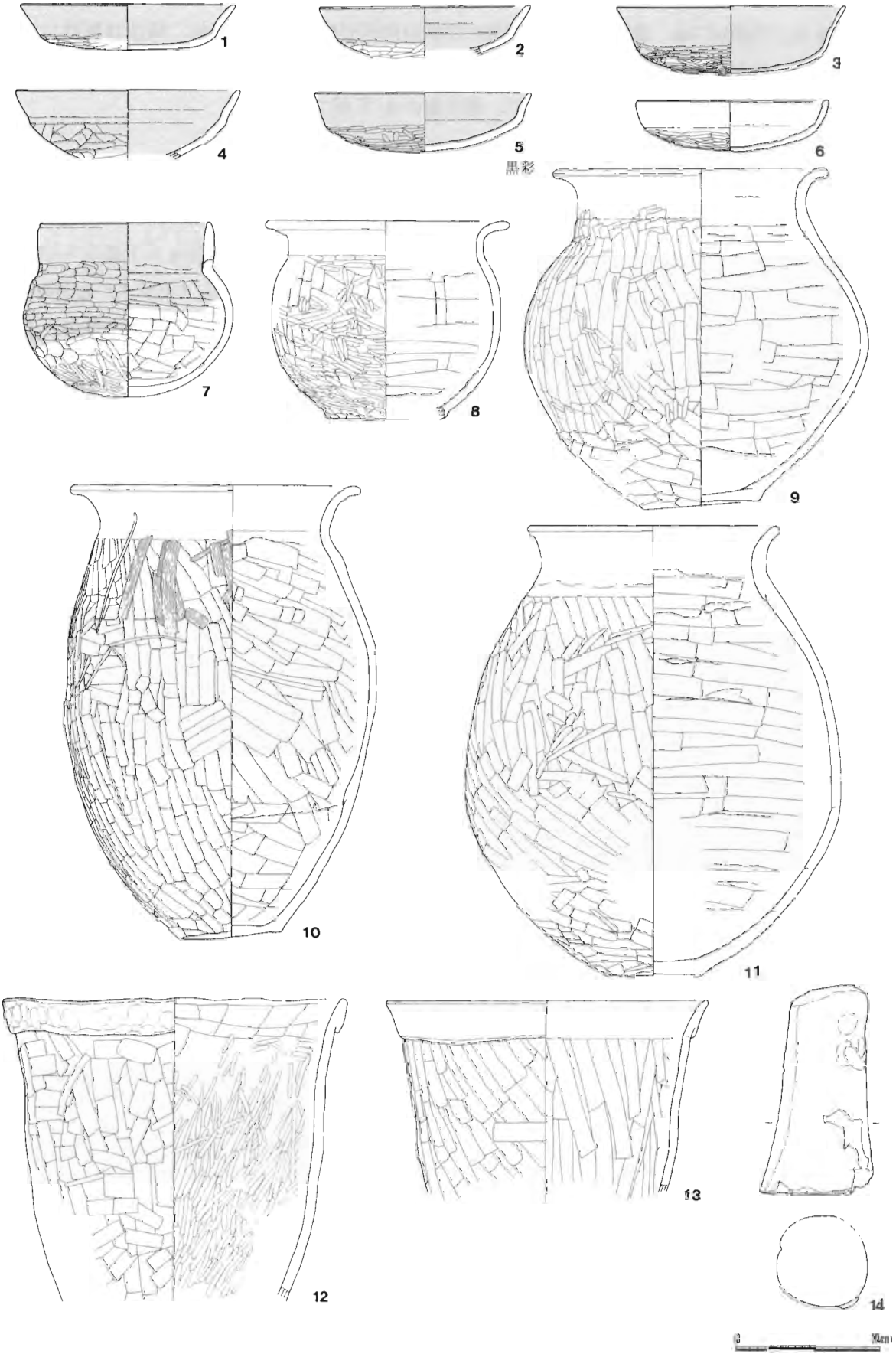
12は現器高21.5cm、口径24.1cm。口縁部は複合口縁を呈し、器形は全体に口縁部から底部にかけて直線的にすぼまる。口縁複合部は指頭押捺の成形痕が残る。色調は暗橙色を基調とし、胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、外面は口縁部が横ナデ、以下ヘラナデが施される。貯蔵穴内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて、1／2程遺存する。

13は現器高14.2cm、推定口径22.5cm。1の土器に比べ、口縁部は外反し、口縁複合部の指頭押捺痕は不明瞭である。色調は暗橙色を基調とし、胎土には白色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面ヘラナデが施される。覆土内からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて、1／2程遺存する。





第22図　15号住居跡・カマド（1／60・1／30）



第23図　15号住居跡出土遺物（1／4）

土製品（14）

支脚である。全長14.7㎝、最大幅7.6㎝。全体に柱状の円筒形を呈しているが、基部は裾状に広がっている。遺存状態が悪く、表面には亀裂や剥離が著しいが、指頭押捺痕が部分的に観察できる。カマド燃焼部から設置された状態で出土したもので、遺存度は4／5程である。

16号住居跡（第24・25図）

〔住居構造〕15号住居跡を切る。（平面形）長方形。（規模）6.40×5.88ｍ。（壁高）40～51㎝を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅18～28㎝・下幅５～10㎝・深さ８～24㎝を測る。（床面）南東壁からカマド前面にかけてよく硬化している。（カマド）北西壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はＮ－37°－Ｗ、長さ122㎝・幅110㎝・壁への掘り込み７㎝を測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に灰褐色粘土を被覆して構築している。天井部も粘土で構築されていたものと考えられる。煙道は70°程の勾配で立ち上がっている。（柱穴）主柱穴と思われるものは４本で、南と東コーナーのものは重複している。また南東壁中央付近の深さ21㎝のものは、入口ピットと考えられる。（貯蔵穴）カマド右側の北コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は57×82㎝・深さ56㎝を測る。（覆土）上層はロームブロックを多く含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。壁際から焼土が多く検出された。

［遺物］カマド周辺及び南東壁近くの床面上から土師器坏・鉢が出土した。その他、覆土中から鉄滓（スラッグ）が出土した。

［時期］古墳時代後期（７世紀前葉）。

［所見］床面上より焼土粒子と炭化材が検出され、上層にローム粒子とロームブロックが多いことから、焼失後に埋め戻された可能性がある。

16号住居跡出土遺物（第26図、図版11－４）

土師器坏・椀形土器（１～６）

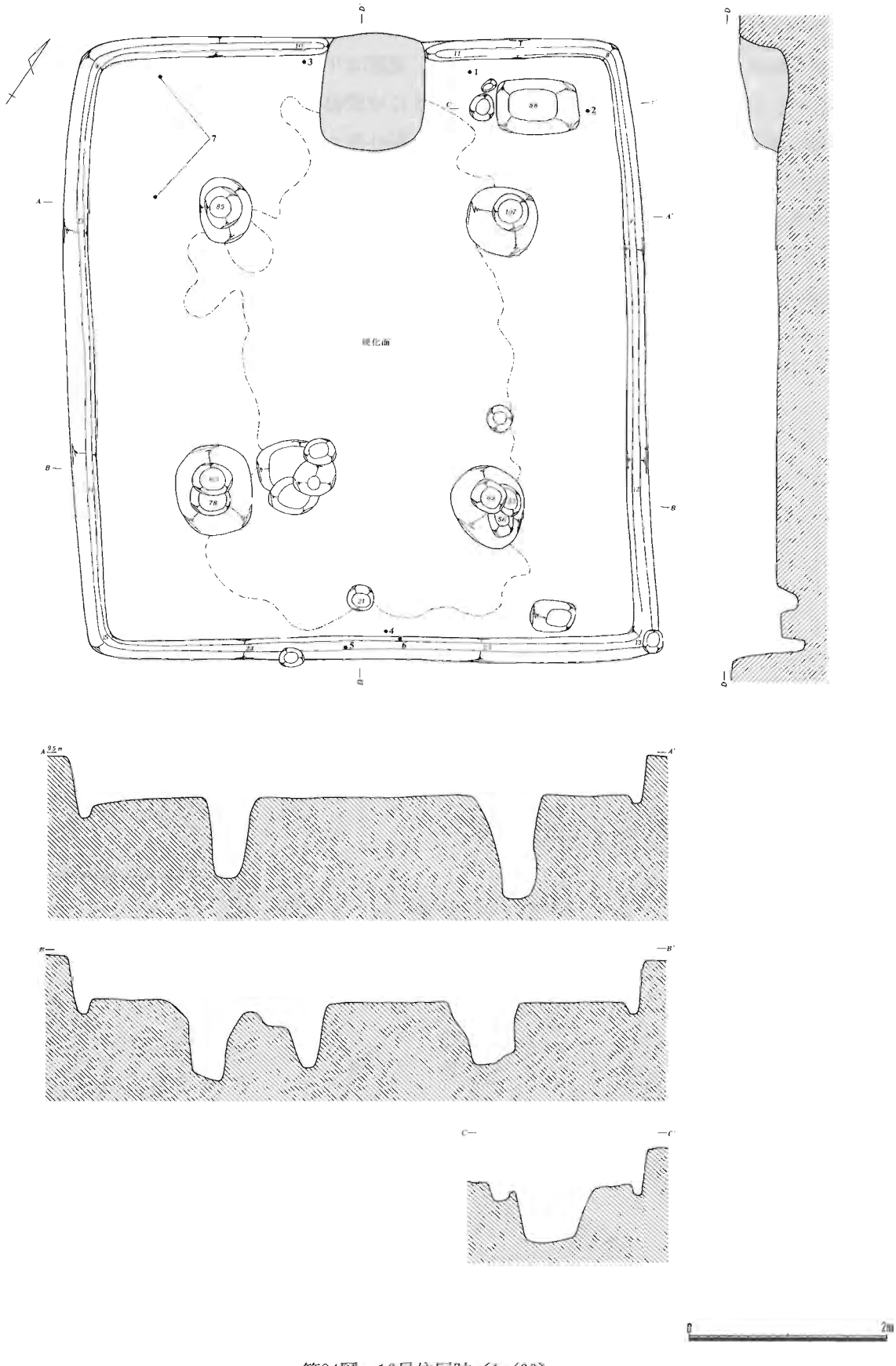
１は器高4.1㎝、推定口径15.8㎝。底部と口縁部との境に段を有する大型の有段坏である。全面黒色処理が施され、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。内面には放射状の暗文が施文される。カマド右横の床面上からの出土で、遺存度は２／３程である。

２は器高4.5㎝、推定口径15.5㎝。１の土器よりやや深身である。口唇部内面には幅１㎜程の沈線がまわる。色調は暗橙色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラナデが施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、遺存度は２／３程である。

３は器高3.6㎝、推定口径13.3㎝。体部は丸味をもち、口縁部は「Ｓ」字状を呈する。底部を除く内面及び口縁部外面には赤彩が施される。胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面ヘラナデが施されるが、外面底部は最終的にヘラ削りが施される。カマド右横の床面上からの出土で、遺存度は１／２強である。

４は器高4.3㎝、推定口径14.6㎝。３の土器よりやや大型のもので、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。南東壁近くの床面上からの出土で、遺存度は４／５程である。

５は器高3.9㎝、口径13.7㎝。底部と口縁部との境に稜を有する偏平な土器である。色調は暗茶褐色



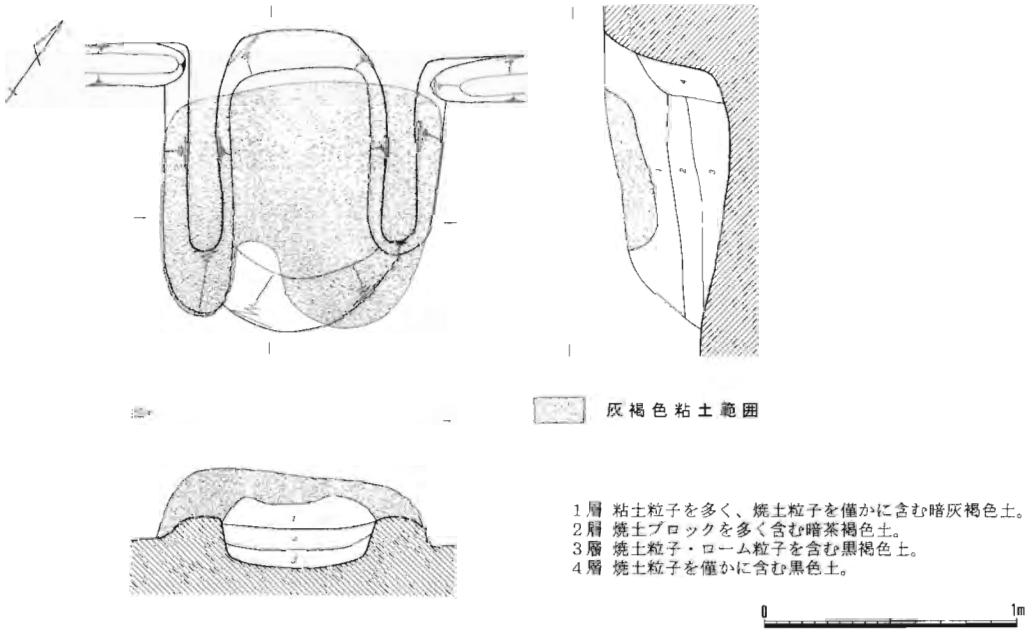
第24図　16号住居跡（1／60）

を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。南東壁の壁溝上層からの出土で、遺存度は4／5強である。

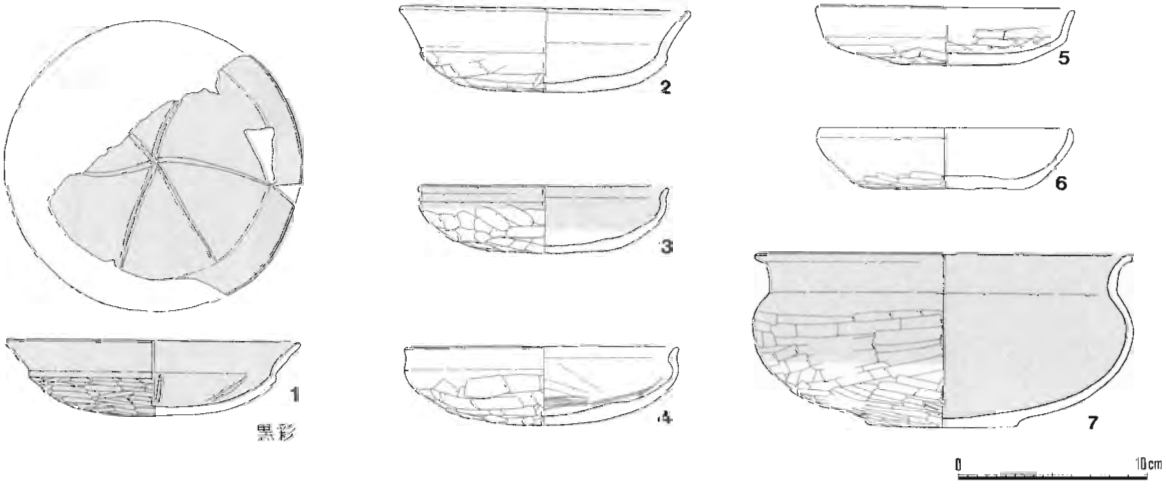
6は器高3.3cm、推定口径13.4cm。口縁部は内湾し、底部は平底気味を呈する。色調は暗茶褐色～黒色を呈することから、黒色土器の可能性がある。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は底部を中心にヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。南東壁の壁溝上層からの出土で、遺存度は2／3程である。

土師器鉢形土器（7）

器高9.4cm、推定口径20.0cm、底径8.0cm。体部上半に膨らみをもち、口頸部は「コ」字状を呈し、口唇上には幅1㎜程の沈線がまわる。概して比企型坏の胎土・調整に共通する土器である。内面及び口縁



第25図　16号住居跡カマド（1／30）



第26図　16号住居跡出土遺物（1／4）

部から体部中位にかけては赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ磨き調整が施される。住居西コーナーの床面上からの出土で、遺存度は1／2程である。

鉄滓（図版11－4）

覆土中からの出土であるが、混入物である可能性がある。総量は14.2ｇ。

17号住居跡（第27・28図）

〔住居構造〕16・19号住居跡に切られる。北コーナー付近と西コーナーの一部しか確認できなかった。（平面形）長方形か。（規模）不明×7.84ｍ。（壁高）50cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲ではカマド部分を除いて全周する。上幅16～21cm・下幅６～８cm・深さ６～10cmを測る。（床面）全体的に硬化している。（カマド）東壁に位置する。主軸方位はＮ－82°－Ｅ、長さ不明・幅120cm・壁への掘り込み18cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残して構築している。煙道は70°程の勾配で途中段をもち、その後はほぼ垂直に立ち上がっている。掛け口には甕（９）が設置された状態で出土し、その下部から支脚が検出された。（柱穴）主柱穴は４本確認された。３本は19号住居跡の貼床下より検出され、深さは本住居の床面から90～108cmを測る。（貯蔵穴）カマドの右側に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は80×92cm・深さ91cmを測る。（覆土）ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。覆土中にローム粒子を多く含むことから埋め戻された可能性がある。

［遺物］土師器坏・高坏・甕・甑が出土した。

［時期］古墳時代後期（６世紀前葉）。

17号住居跡出土遺物（第29図）

土師器坏・埦形土器（１～５）

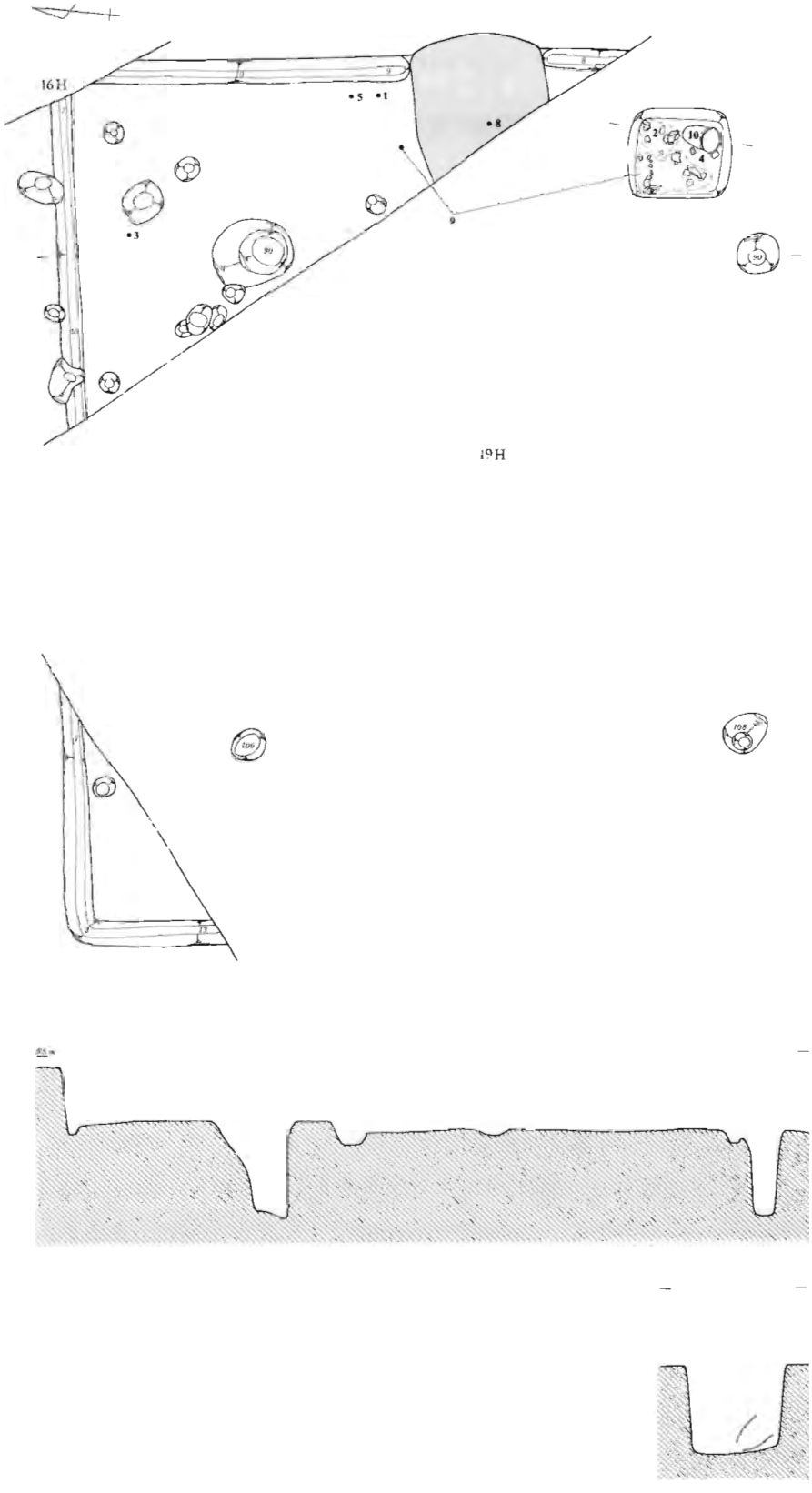
１は器高4.7cm、口径12.9cm。体部は丸く、口縁部が短く外反するいわゆる初現段階の比企型坏である。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。カマド左横の床面上からの出土で、遺存度は４／５程である。

２は器高6.7cm、推定口径13.4cm。１に比べ、やや大型で深身のものである。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。カマド左横の床面上からの出土で、遺存度は２／３程である。

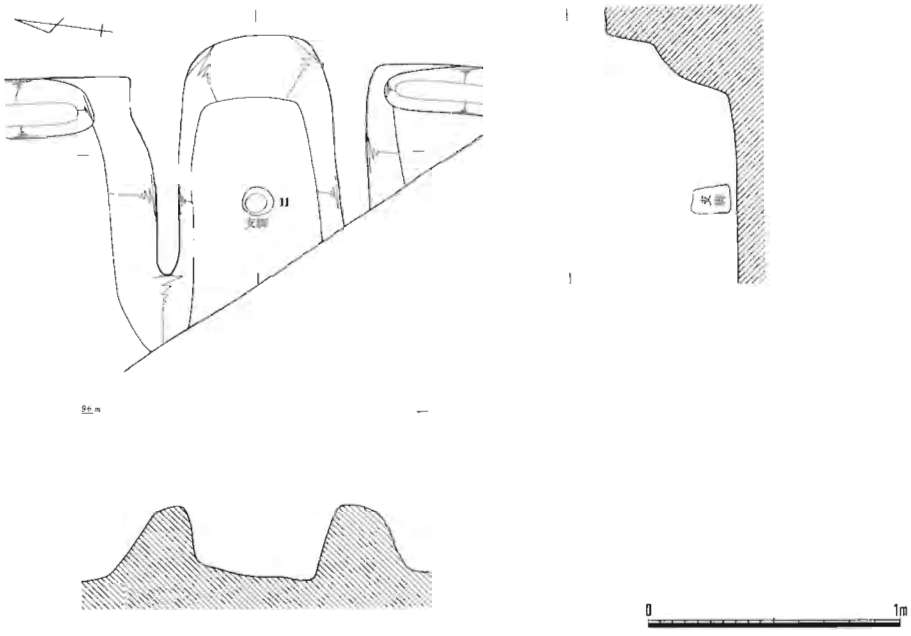
３は器高4.8cm、口径11.9cm。底部から口縁部にかけて内湾する。底部外面を除き赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居北東コーナーの床面上からの出土で、遺存度は４／５程である。

４は器高4.6cm、口径12.7cm。底部と口縁部との境に段を有する須恵器坏蓋模倣の土器である。口縁部は直立気味に開く。口縁部外面及び内面は底部を除き赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は２／３程である。

５は現器高4.7cm、口径17.4cm。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部が大きく外傾する大型の須恵器坏蓋模倣の土器である。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・黒色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ磨き調整が施される。カマド左



第27図　17号住居跡（1／60）



第28図　17号住居跡カマド（1／30）

横の床面上からの出土で、遺存度は1／3程である。

土師器高坏形土器（6）

現器高4.4cm、推定底径9.4cm。脚台部のみの破片で、裾部は大きく開く。外面は赤彩が施され、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面はヘラナデが施される。覆土中からの出土で、脚台部を1／4程遺存する。

土師器甕形土器（7～9）

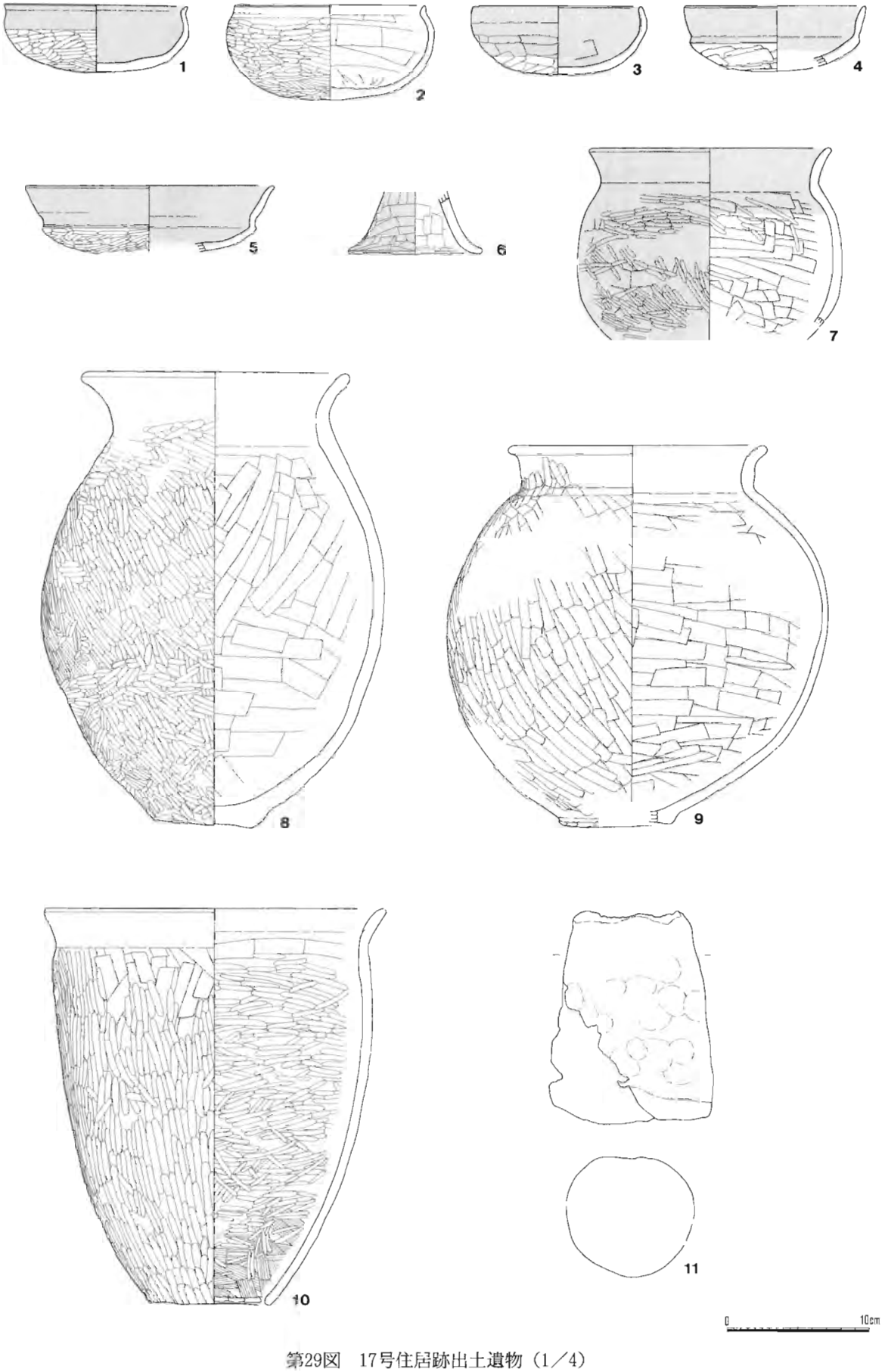
7は現器高13.8cm、口径17.0cm、底径8.4cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部が外反する小型の球胴甕と思われるが、外面及び口頸部内面に赤彩が施される特異な土器である。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1／3程遺存する。

8は器高32.4cm、口径18.9cm、底径7.0cm。胴部中位に膨らみをもち、口縁部は外反する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後全体に幅3㎜程の粗いヘラ磨き調整が施される。カマドの掛け口から設置された状態で出土し、遺存度は4／5強である。

9は器高27.2cm、口径18.2cm、底径7.9cm。コの字口縁を呈する球胴甕である。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデが施される。貯蔵穴内とカマド右横の床面上から出土したものが接合し、遺存度は1／2程である。

土師器甑形土器（10）

器高28.2cm、口径24.0cm、底径8.3cm。底部は筒抜け式。口縁部は外傾し、胴部から底部にかけてはやや膨らみをもつが、全体的にすぼまる器形である。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラ削り後横方向にヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、完形品である。



第29図　17号住居跡出土遺物（1／4）

土製品（11）

支脚である。全長15.3cm、最大幅11.2cm。遺存状態が悪く、表面には剥離が著しいが、指頭押捺痕が全面に観察できる。カマド燃焼部から設置された状態で出土したもので、ほぼ完形品である。

18号住居跡（第30図）

〔住居構造〕1号住居跡を切る。（平面形）正方形。（規模）4.20×4.10m。（壁高）27～44cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅14～24cm・下幅5～9cm・深さ10～21cmを測る。（床面）入口ピット付近からカマド前面にかけてよく硬化している。（カマド）北西壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN－27°－W、長さ100cm・幅90cmを測り、壁への掘り込みはほとんどない。北側は後世のピットにより壊されているため、煙道については不明である。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して構築している。燃焼部は良く焼けていたが、掘り込みは確認されなかった。（柱穴）深さ57～96cmの主柱穴4本と、深さ51cmの入口ピットが確認された。（貯蔵穴）カマド右側の北コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は58×88cm・深さ41cmを測る。南側に高さ5cmの「く」字状の凸堤が巡っている。北コーナーとの間から、完形の甕や甑が出土した。（覆土）6層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

［遺物］土師器椀・甕・甑が出土した。

［時期］古墳時代後期（6世紀前葉）。

［所見］床面上から炭化材が多く出土したことから、焼失住居と考えられる。

18号住居跡出土遺物（第31図）

土師器坏・椀形土器（1・2）

1は器高7.8cm、口径16.4cm、底径7.0cm。大型の椀で、平底の底部から立ち上がり、体部は丸味をもち、口縁部は外反する。赤彩はやや不明瞭であるが、内外面に施されるものと思われる。胎土には砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後棒状工具のようなもので磨き的な調整が施される。カマド左横の床面上からの出土で、遺存度は2／3程である。

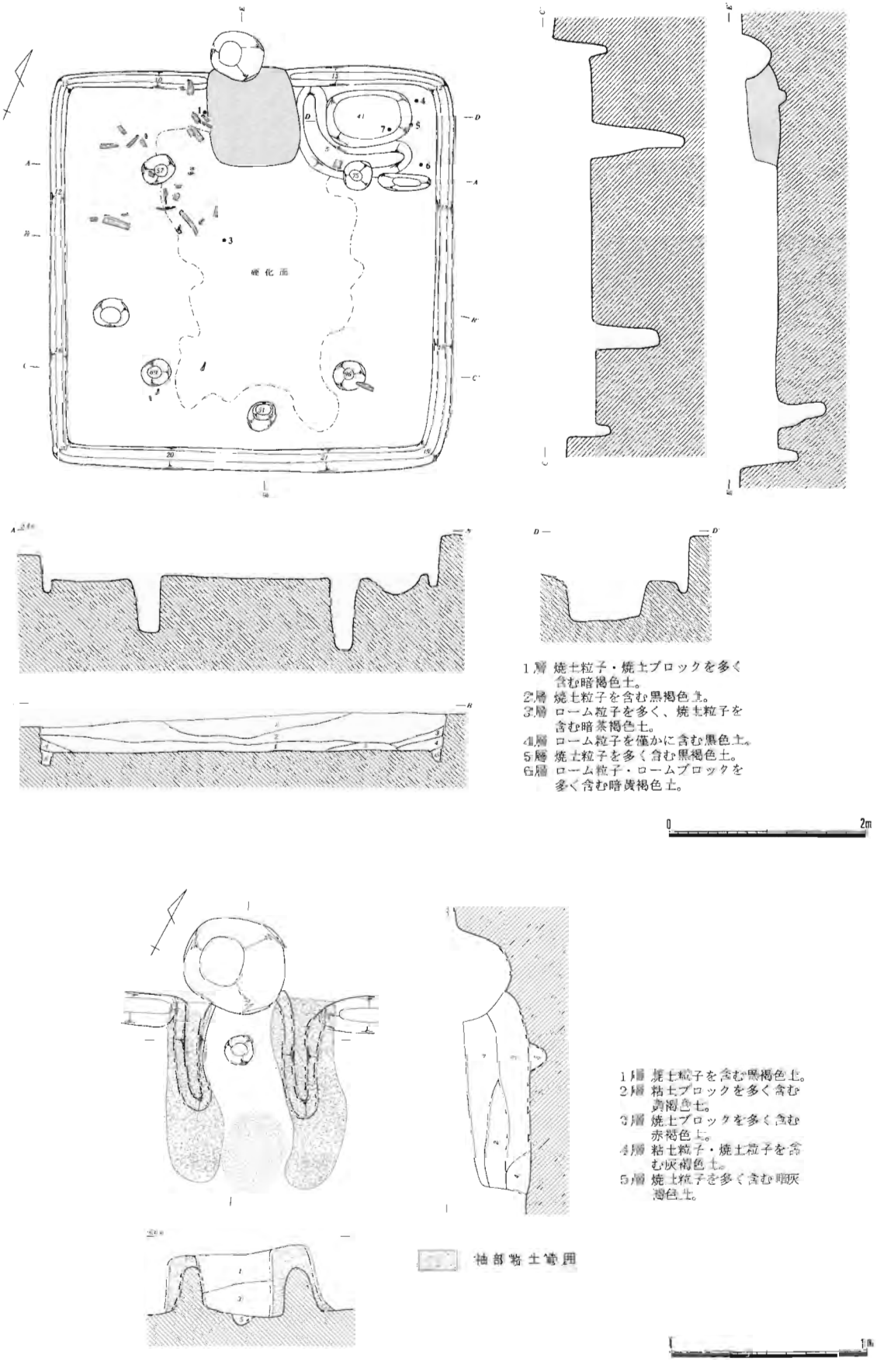
2は現器高4.2cm、推定口径13.8cm。器形は口縁部から底部にかけて半球状を呈する。赤彩は内外面に施される。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。床面上からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1／3程遺存する。

土師器甕形土器（3～6）

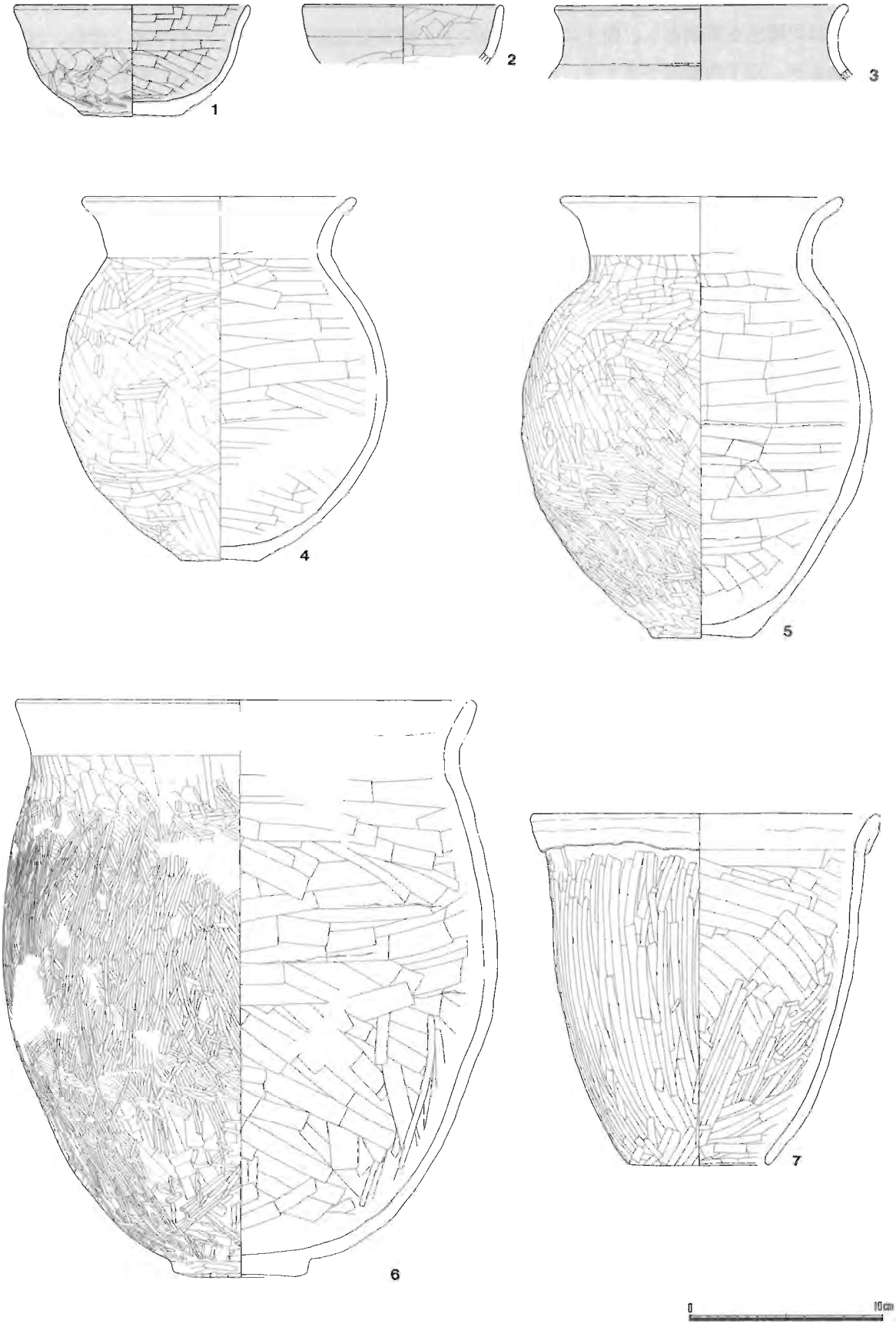
3は現器高5.3cm、推定口径20.4cm。外反する口縁部の破片である。色調は黒斑により全体に黒褐色を呈するが、内外面赤彩の可能性がある。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下はヘラ削りが施される。住居跡中央の床面上からの出土で、口縁部を1／3程遺存する。

4は器高25.6cm、口径18.9cm、底径5.5cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部はやや直立気味に外反する。色調は暗赤褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。貯蔵穴右の住居コーナーの床面上からの出土で、遺存度は4／5強である。

5は器高31.1cm、口径19.6cm、底径7.0cm。胴部上半に最大径をもち、口頸部は「コ」の字状を呈する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施され、その後胴部下半を中心に粗いヘラ磨き調整が



第30図　18号住居跡・カマド（1／60・1／30）



第31図　18号住居跡出土遺物（1／4）

施される。貯蔵穴右の床面上から倒置状態で出土した。完形品である。

6は器高40.2cm、口径31.3cm、底径9.0cm。超大型の甕で、胴部中位に最大径をもち、口縁部は外反する。色調は黒褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・暗茶褐色粒子・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴右の床面上からの出土で遺存度は4／5程である。

土師器甑形土器（7）

器高24.8cm、口径24.3cm、底径9.7cm。底部は筒抜け式。口縁部は複合口縁を呈し、胴部から底部にかけては全体的にゆるやかにすぼまる器形である。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラナデが施される。なお、この土器にみられるヘラナデは、痕跡として細かい筋が観察され、一見ハケ目調整であるが、工具としては、ヘラの先端が平坦なものではなく、ささくれ状を呈しているものであろう。貯蔵穴上層から倒置状態で出土でした。完形品である。

19号住居跡（第32図）

〔住居構造〕4・17号住居跡、4号炉穴、23号土坑を切る。（平面形）正方形。（規模）10.21×10.07m。（壁高）46～68cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅20～30cm・下幅6～12cm・深さ11～20cmを測る。（床面）全体に軟弱であるが、カマドと貯蔵穴の前面には硬化した部分が認められた。（カマド）北西壁のほぼ中央に位置し、長軸方位はN－40°－Wと思われるが、袖部と思われるロームが僅かに残るのみで、ほとんどは撹乱により壊されているため詳細は不明である。（柱穴）主柱穴は8本で、深さは70～118cmを測る。南壁の中央付近にある深さ20cmのものが入口ピットと思われる。（貯蔵穴）カマドの右側に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は140×128cm・深さ87cmを測る。周囲に10cm程の高さで段が作られている。覆土はローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。東側の上から中程にかけて、坏と甕が多数出土している。（覆土）11に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

［遺物］カマド及び貯蔵穴周辺から、土師器坏・高坏・甕・甑が出土した。その他、覆土中から鉄製品・鉄滓（スラッグ）が出土した。

［時期］古墳時代後期（7世紀前葉）。

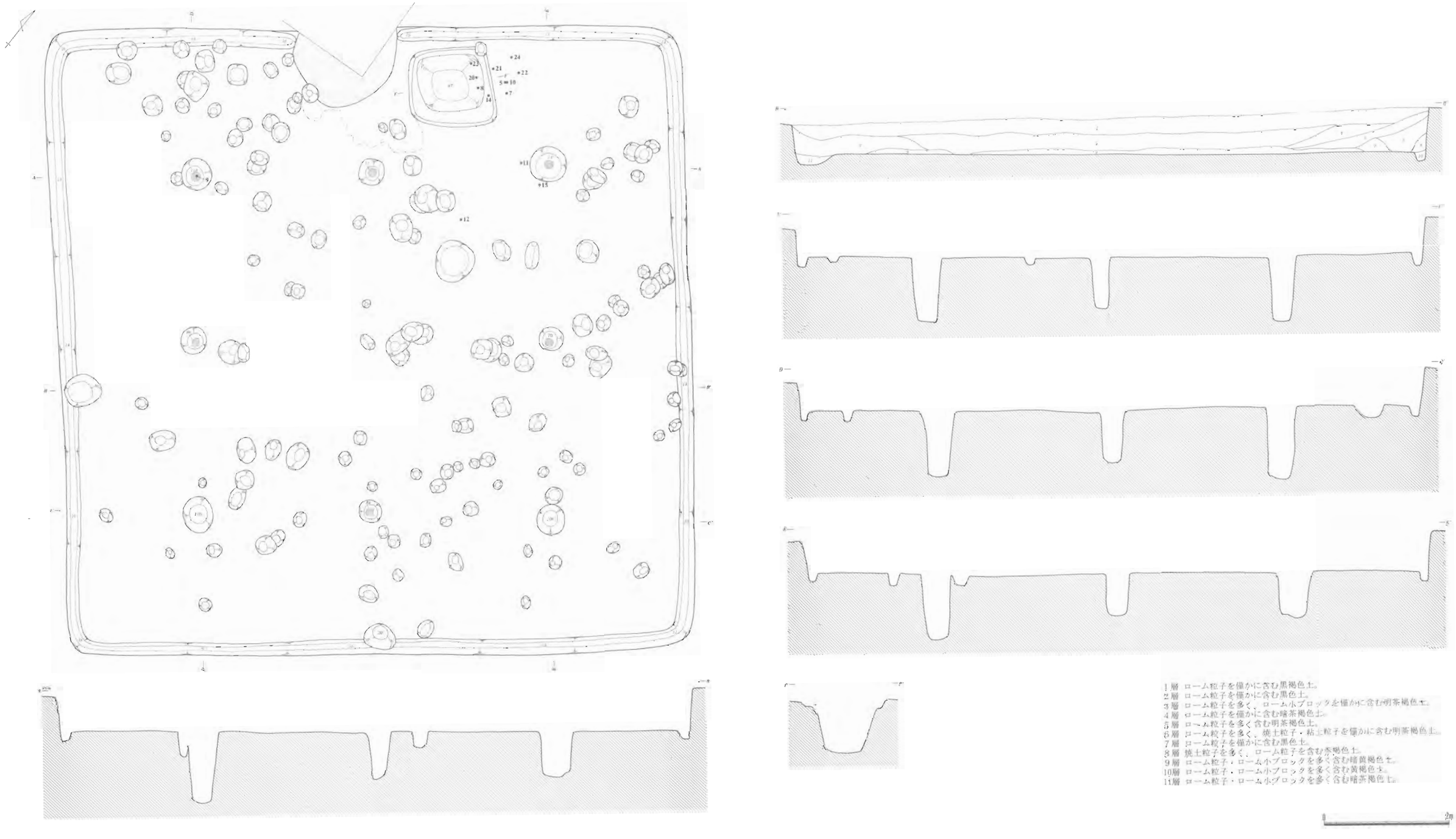
19号住居跡出土遺物（第33・34図、図版14－3）

土師器坏・埦形土器（1～14）

坏・埦形土器は、バラエティーが豊富で、赤色系土器（1～6）、黒色系土器（8～13）、無彩系土器（7・14）に大きく分類できる。その内、赤色系土器は1～5が比企型坏、6が有稜坏に、黒色系土器は8・9が有段坏、10・11が有稜坏、12・13が埦に、無彩系土器は7が有稜坏、14が埦にそれぞれ細分が可能である。

1は現器高3.5cm、推定口径11.5cm。口縁部と底部との境には稜をもち、口唇部内面には幅1.5mmの沈線がまわる。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／5程である。

2は現器高3.7cm、推定口径12.9cm。口縁部と底部との境には鋭い稜をもち、口唇部内面には幅1.5mmの沈線がまわる。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は



第32図　19号住居跡（1／80）

横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／5程である。

3は現器高3.5cm、推定口径13.5cm。口縁部と底部との境には稜をもち、口唇部は外反する。口唇部の沈線は幅2㎜とやや広く不明瞭である。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／4程である。

4は現器高3.0cm、推定口径14.5cm。偏平なもので、口縁部から底部にかけて大きくS字状を呈する。口唇部内面には沈線はない。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗赤褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／3程である。

5は器高3.8cm、口径13.8cm。器形としては、3に類似する。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

6は現器高3.8cm、推定口径12.4cm。口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は僅かに外反する。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土には砂粒を多く含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1／4程である。

7は器高4.3cm、口径12.7cm。口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は外傾する。色調は暗褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。特に、外面の底部と口縁部との間にはヘラ削りが施されない未調整部分が存在し、そこには成形時に付いたと考えられる指紋が観察できる。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、完形品である。

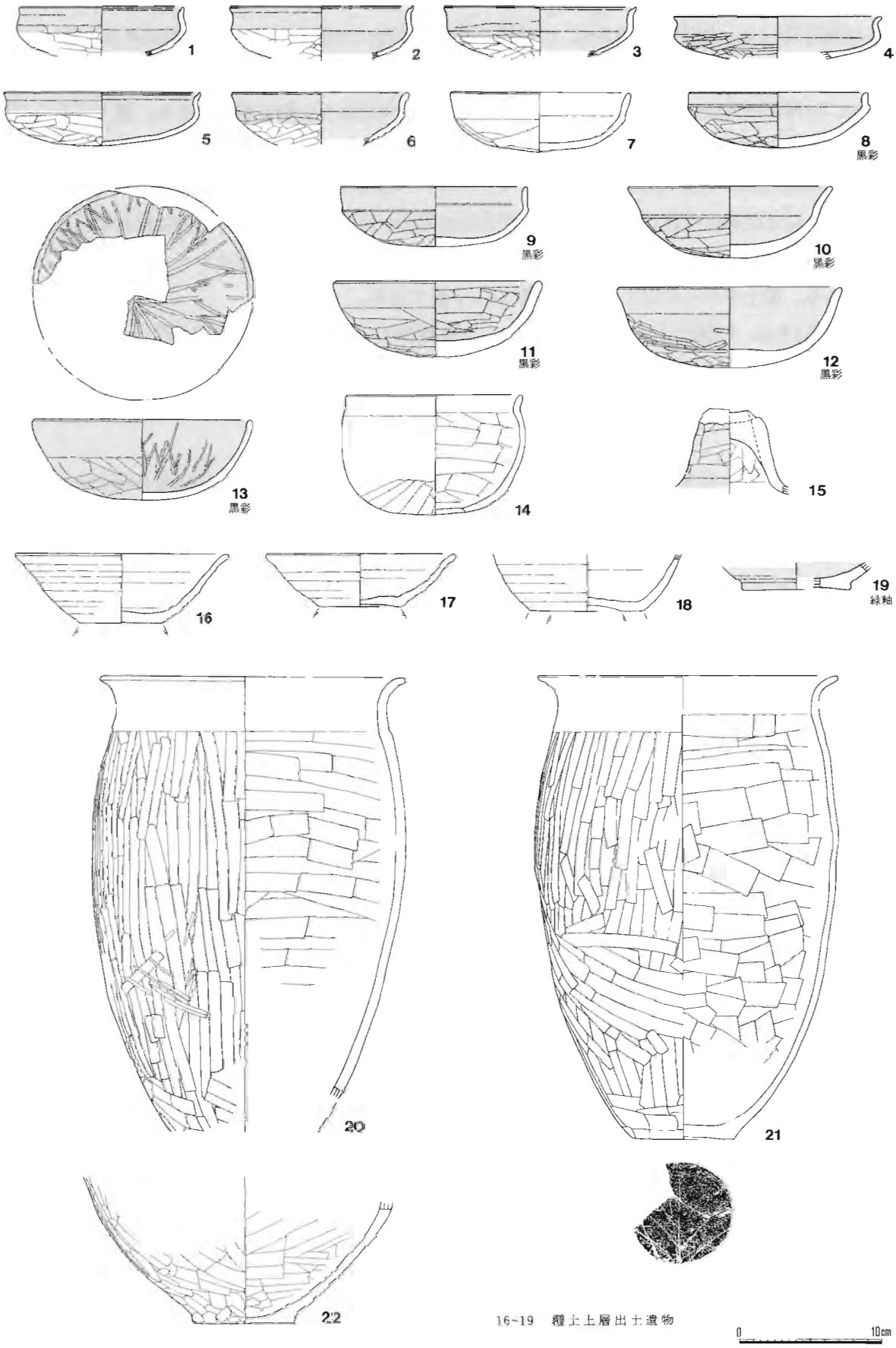
8は器高3.9cm、口径12.6cm。口縁部と底部との境には明瞭な段をもち、口縁部は短く直立する。全面黒彩が施される。胎土には白色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内からの出土で、ほぼ完形品である。

9は器高4.3cm、口径13.2cm。口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は直立する。全面黒彩が施される。胎土には白色粒子・砂粒を多く金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。住居西コーナー柱穴の覆土上層からの出土で、ほぼ完形品である。

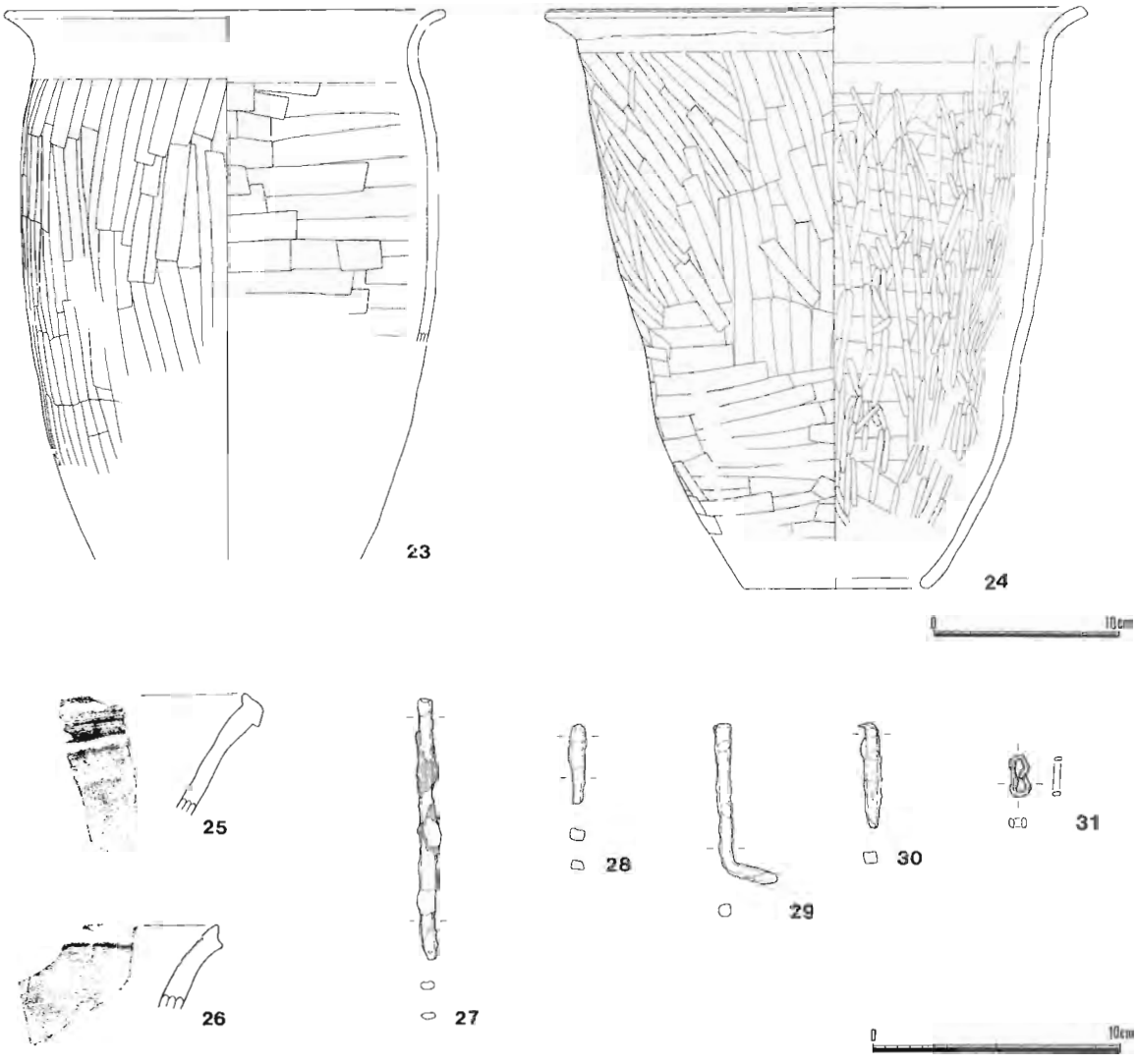
10は器高5.1cm、口径14.4cm。口縁部と底部との境には段をもち、口縁部は大きく外反する。全面黒彩が施される。胎土には白色粒子・砂粒を多く、金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、完形品である。

11は器高5.4cm、口径14.7cm。口縁部と底部との境には稜をもち、口縁部は大きく外反する。全体に器厚が分厚く重量感のある土器である。全面黒彩が施される。胎土には砂粒を多く、金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。7の土器同様、外面の底部と口縁部との間にはヘラ削りが施されない未調整部分が存在し、そこには成形時に付いたと考えられる指紋が観察できる。住居北コーナー柱穴近くの床面上からの出土で、完形品である。

12は器高5.7cm、口径15.8cm。11の土器よりも大型のもので、口縁部は僅かに外反するが、全体に椀状を呈する。全面黒彩が施される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、



第33図　19号住居跡出土遺物１（1／4）



第34図　19号住居跡出土遺物２（1／4・1／3）

以下、外面はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整が施される。住居中央からやや北側に寄った床面上からの出土で、遺存度は4／5程である。

13は器高5.7cm、口径15.5cm。12の土器同様に大型のもので、口縁部から底部にかけて半球状を呈する。全面黒彩が施され、内面には暗文が付される。暗文は放射状もの（底部を中心）を先に施し、その後で「W」字状に連続したもの（口縁部近く）を付加した構成をとる。胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ後暗文、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、遺存度は1／2程である。

14は器高8.6cm、口径12.4cm。口縁部が「く」字状を呈し、深身の土器である。内面底部には底部基盤である円盤が接合痕として観察できる。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、金雲母を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下、内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。7・11の土器同様、外面の底部と口縁部との間にはヘラ削りが施されない未調整部分が存在し、そこには成形時に付いたと考えられる指紋が観察できる。貯蔵穴内からの出土で、完形品である。

土師器高坏形土器（15）

現器高6.1cm。裾部を欠く脚台部のみ残存し、脚柱部は短めで、全体に「ハ」字状を呈する。脚台部外面及び坏部内面は赤彩が施される。胎土には白色粒子・金雲母・砂粒を含む。脚台部内面はヘラ削り、外面は縦方向のヘラ削り後ヘラナデが施される。住居北コーナー柱穴近くの床面上からの出土である。

須恵器坏形土器（16～18）

すべて覆土上層からの出土である。

16は器高5.0cm、推定口径15.0cm、底径6.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗茶褐色～淡灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。遺存度は1／2程である。東金子窯製品。

17は器高3.8cm、推定口径13.3cm、底径5.7cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。遺存度は1／3程である。東金子窯製品。

18は現器高4.1cm、底径8.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部は回転糸切り後周辺ヘラ削り調整が施される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。体部中位から底部にかけて1／2弱遺存する。東金子窯製品。

緑釉陶器（19）

覆土上層からの出土である。現器高2.0cm、推定底径7.5cm。胎土の色調は白色を呈し、胎土には黒色微粒子・砂粒を僅かに含む。内外面には薄緑色の緑釉が施され、器面には幅3㎜程の磨き調整痕が観察される。器種は底部に高台がないことから、小瓶である可能性がある。猿投産。

土師器甕形土器（20～23）

20は現器高32.4cm、口径21.5cm。胴部上半に最大径をもち、口縁部が外反する長胴甕である。胴部から口縁部への移行は明瞭な段差をもつ。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、白色粒子・黒色粒子・金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。また、部分的であるが、外面には光沢をもつ細長く磨き的な調整が施されている。貯蔵穴内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4／5程遺存する。

21は器高33.0cm、口径21.2cm、底径7.2cm。胴部上半に最大径をもち、口縁部が外反する長胴甕で、胴部から口縁部への移行はスムーズである。底部には木葉痕が観察される。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、白色粒子・金雲母・小石を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、遺存度は4／5強である。

22は現器高10.5cm、底径7.1cm。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、金雲母を僅かに含む。胴部内面はヘラデ、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、胴部下半から底部にかけて2／3程遺存する。

23は現器高30.3cm、口径24.0cm。胴部上半に最大径をもち、口縁部が外反する長胴甕である。胴部から口縁部への移行は明瞭な段差をもつ。色調は口縁部から胴部上半にかけて暗橙色、以下黒色を呈し、胎土には砂粒を多く、金雲母を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいにヘラナデ（スリップか）が施され、ヘラ削り痕が消されている。貯蔵穴内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4／5程遺存する。

土師器甑形土器（24）

器高31.6cm、口径29.2cm、推定底径10.0cm。底部は筒抜け式。大きく外反する口縁部に最大径をもち、

胴部から底部にかけては、途中胴部下半で僅かに膨らみをもつが、ゆるやかにすぼまる。口縁部直下には粘土輪積み痕が観察される。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、白色粒子・金雲母・小石を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後縦方向の細長い磨き調整、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴右横の床面上からの出土で、遺存度は 3／4 程である。

須恵器甕形土器（25・26）

いずれも覆土中からの出土で、口縁部小破片である。25は色調が濃灰褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を僅かに含む。26は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には白色粒子を含む。

鉄製品（27～31）

27・28は鉄鏃の茎部破片と思われる。27は現全長10.8cm、最大幅0.9cm、重さ5.6ｇ。28は現全長3.3cm、最大幅0.7cm、重さ1.9ｇ。

29・30は鉄釘である。29は全長6.6cm、最大幅0.7cm、重さ5.6ｇ。断面形は長方形。30は現全長4.3cm、最大幅0.8cm、重さ3.8ｇ。断面形は正方形。

31は不明品である。全長1.7cm、最大幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ5.6ｇ。

鉄滓（図版14－３）

覆土中からの出土であるが、混入物である可能性がある。総量1,164ｇ

20号住居跡（第35図）

〔住居構造〕撹乱によりかなりの部分が壊されていることと、北側が調査区域外であるため詳細は不明である。（壁高）確認できたところで、25～30cmを測る。（壁溝）検出されなかった。（床面）残存している床面に硬化した部分が認められた。（柱穴）３本の柱穴が検出されたが、本住居に伴うかは不明である。

［遺物］土師器坏・甕・甑が出土した。

［時期］古墳時代後期（６世紀前葉）。

20号住居跡出土遺物（第35図）

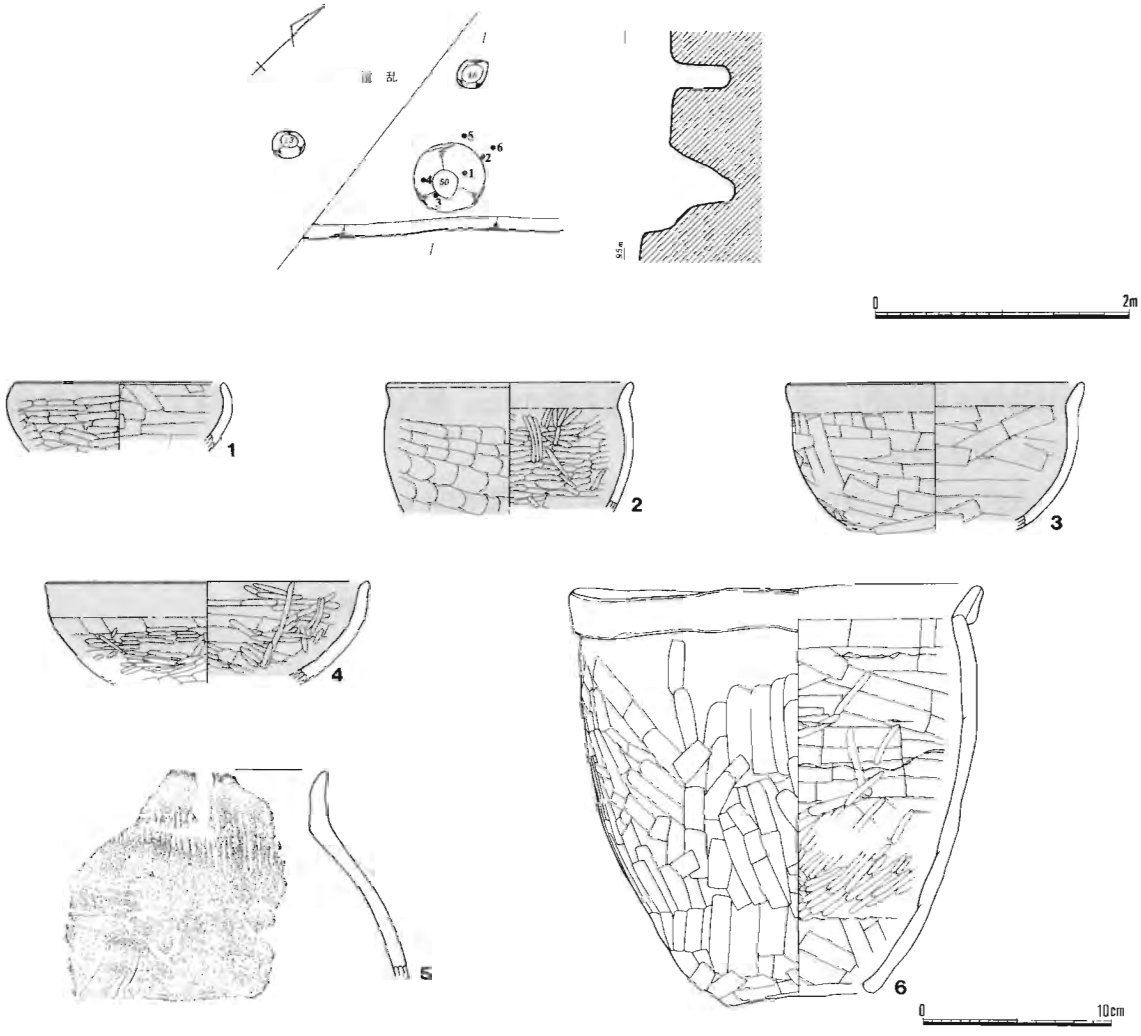
土師器坏・埦形土器（１～４）

１は現器高3.7cm、推定口径11.0cm。全体的には半球状を呈する器形であるが、口縁部は内湾する。赤彩は内外面に施される。胎土には黄褐色粒子・明橙色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面は粗いヘラ磨き調整が施される。柱穴内からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1／4程遺存する。

２は現器高7.0cm、推定口径13.0cm。体部は丸味をもち、口縁部は外傾する。赤彩は内外面に施される。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部外面は横ナデ、以下内面はヘラ磨き調整、外面はヘラ削りが施される。柱穴近くの床面上からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1／4程遺存する。

３は現器高7.9cm、推定口径15.8cm。２の土器の器形に類似するが、やや大型である。赤彩は内外面に施される。胎土には砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面ヘラナデが施される。柱穴内からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1／3程遺存する。

４は現器高5.5cm、推定口径17.1cm。大型の有稜坏である。赤彩は外面底部を除く全面にが施される。胎土には砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整が施さ



第35図　20号住居跡・出土遺物（1／60・1／4）

れる。柱穴内からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1／5程遺存する。

土師器甕形土器（5）

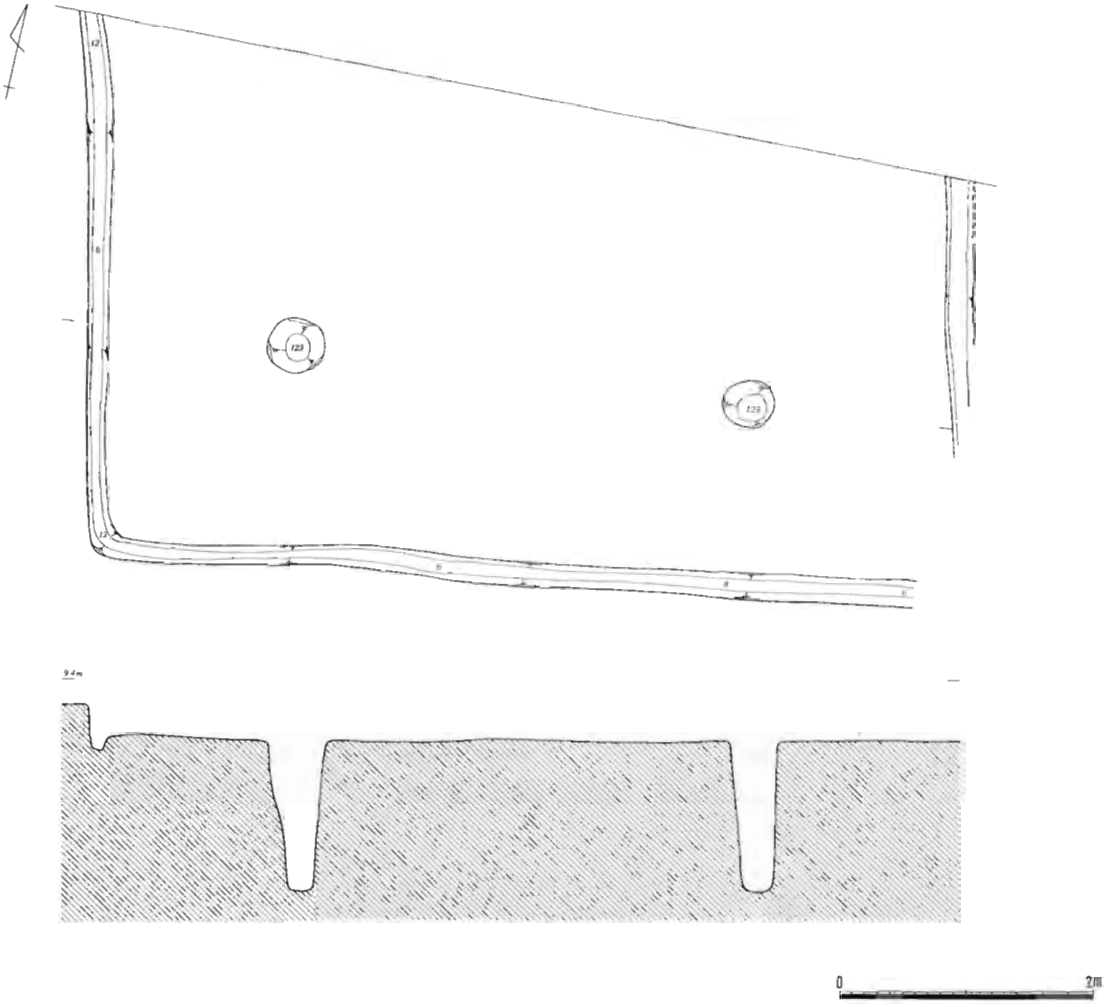
口縁部から胴部中位にかけての破片である。現器高10.8cm。最大径を胴部中位にもち、口縁部は「く」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はハケ目調整、外面は頸部がハケ目調整、胴部は横方向にヘラ削りが施される。柱穴近くの床面上からの出土である。

土師器甑形土器（6）

器高22.5cm、口径（短径21.0cm、長径22.7cm）、底径（短径7.0cm、長径8.0cm）。底部は筒抜け式。口縁部は複合口縁を呈し、胴部から底部にかけてはやや膨らみをもつ。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、外面は縦方向にヘラナデが施される。柱穴近くの床面上からの出土で、完形品である。

21号住居跡（第36図）

〔住居構造〕北側は調査区域外であり、さらに撹乱により床面などが大きく壊されているため詳細は不



第36図　21号住居跡（1／60）

明である。（平面形）方形か。（規模）不明×7.08cm。（壁高）残りの良いところで27～47cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた部分では全周する。上幅14～20cm・下幅４～10cm・深さ６～13cmを測る。（床面）残存していた所によく硬化した面が確認された。（柱穴）主柱穴２本が検出され、深さは123cmと125cmを測る。（覆土）上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土、下層ロームブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器小破片が出土したが、実測できるものはなかった。

［時期］古墳時代後期。

第４節　平安時代

11号住居跡（第３図）

〔住居構造〕10号住居跡を切る。カマドと思われる燃焼部が確認されたため、一応住居跡として取り扱ったが、詳細は不明である。

［遺物］出土しなかった。

［時期］平安時代の可能性がある。

12号住居跡（第３図）

〔住居構造〕14・15号土坑に切られ、大部分が調査区域外にあると思われるため、詳細は不明である。（壁高）確認出来た部分で32cmを測る。（覆土）上層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

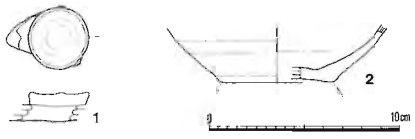
［遺物］覆土中から坏蓋の鈕部分と坏の底部が出土した。

［時期］平安時代（９世紀後半）。

12号住居跡出土遺物（第37図）

１は須恵器蓋形土器の鈕部分のみの小破片である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色針状物質を含む。南比企窯製品。

２は須恵器坏形土器である。現器高3.1cm、推定底径5.8cm。色調は暗茶褐色を基調とするが、内面は黒く煤けている。胎土は精錬されており、砂粒を僅かに含む。底部から体部にかけて１／４程遺存する。



第37図　12号住居跡出土遺物（1／4）

第５節　土　坑

ここで取り扱う土坑は、明らかに縄文時代に比定されるもの以外を対象とする。これらの時期については、良好な状況で遺物が出土していないため、正確な位置付けは極めて困難であるが、５・６・７・17・18・19号土坑から近世の陶器や瓦器が出土していることや調査区南東隅にまとまりのある分布状況を示すことから、これらは近世に関連する遺構の可能性がある。しかし、８号土坑から弥生時代の台付甕が出土したり、９号土坑から平安時代の須恵器坏が出土するなど必ずしも該期の遺構ではないものも含まれる可能性があることも十分考慮する必要がある。今後、特に調査区南東隅の土坑の集中する区域を念頭に置きつつ、面的な広がりの中で総合的な解明が要求されよう。

５号土坑（第38図）

［位置］（Ｃ－８、Ｄ－８）Ｇ

［構造］10号住居跡を切り、６・７号土坑と重複する。（平面形）長方形。（規模）2.23×1.12cm。（長軸方位）Ｅ－Ｗ。（深さ）100cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］瓦器の小破片が１点出土した。

［時期］近世。

5号土坑出土遺物（図版15－2－1）

瓦器。鍋の破片であろう。色調は内外面黒色、胎土は灰白色を呈する。

6号土坑（第38図）

［位置］（D－8）G

［構造］10号住居跡を切り、5号土坑と重複する。（平面形）方形か。（規模）不明×1.06m。（深さ）70cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］瓦器の小破片が1点出土した。

［時期］近世。

6号土坑出土遺物（図版15－2－2）

常滑の大甕の底部破片である。色調は灰褐色を基調とし、胎土には白色粒子・小石を含む。

7号土坑（第38図）

［位置］（C－8、D－8）G

［構造］10号住居跡を切り、5号土坑と重複する。（平面形）円形。（規模）不明×1.26m。（深さ）38cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］磁器の小破片が出土した。

［時期］近世。

7号土坑出土遺物（図版15－2－3）

肥前系の染付碗で、草花文あるいは唐草文が描かれている。時期は18世紀中頃である。

8号土坑（第38図）

［位置］（A－7）G

［構造］一部撹乱により壊されている。（平面形）長方形。（規模）2.00×1.30m。（長軸方位）N－44°－E。（深さ）東側が1段低くなっており40cm前後、西側は36cmを測る。（覆土）上層はローム粒子を僅かに含む黒色土、下層はローム粒子を多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］台付甕の脚台部が1点出土した。

［時期］弥生時代後期か。

8号土坑出土遺物（第40図1）

台付甕の脚台部である。現器高7.4cm、底径9.8cm。色調は内面は赤橙色、外面は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面ヘラナデが施される。

9号土坑（第38図）

［位置］（E－8）G

［構造］10号住居跡を切り、10・11号土坑と重複する。南側は調査区域外である。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×1.20m。（長軸方位）N－4°－W。（深さ）50cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほ

ぼ垂直に立ち上がる。

［遺物］須恵器小破片が２点出土した。

［時期］出土遺物は平安時代（９世紀後半から10世紀前半）の所産であるが、遺構の時期は近世に比定される可能性がある。

９号土坑出土遺物（第40図２・３）

２は須恵器坏形土器である。現器高1.4㎝、推定底径6.8㎝。色調は青灰色を呈し、胎土には白色針状物質・砂粒を含む。底部には回転糸切り痕が残る。南比企窯製品。

３は高台付きの須恵器椀形土器である。現器高1.7㎝、推定底径6.7㎝。色調は明茶褐色を呈し、胎土には黒色粒子・砂粒を僅かに含む。

10号土坑（第38図）

［位置］（Ｄ－８、Ｅ－８）Ｇ

［構造］10号住居跡を切り、９号土坑と重複する。（平面形）長方形。（規模）不明×1.06ｍ。（長軸方位）Ｅ－Ｗ。（深さ）20～24㎝を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

［遺物］検出されなかった。

［時期］近世か。

11号土坑（第38図）

［位置］（Ｅ－８）Ｇ

［構造］10号住居跡を切り、９号土坑と重複する。（平面形）方形か。（規模）不明×1.06ｍ。（深さ）確認面から45㎝前後を測る。坑底は平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。［遺物］検出されなかった。

［時期］近世か。

12号土坑（第38図）

［位置］（Ｄ－９）Ｇ

［構造］13号土坑に切られる。東側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×1.05ｍ。（長軸方位）Ｅ－Ｗ。（深さ）68㎝を測る。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。（覆土）上層はローム粒子・ロームブロックを含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］検出されなかった。

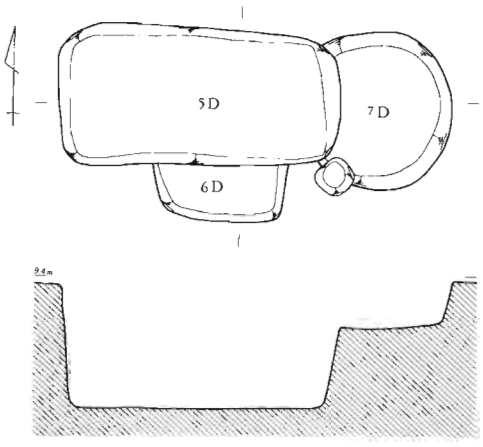
［時期］近世か。

13号土坑（第38図）

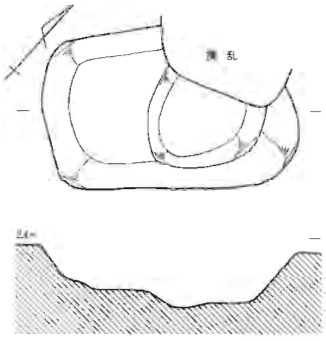
［位置］（Ｄ－９、Ｅ－９）Ｇ

［構造］12・14号土坑を切る。東側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×1.12ｍ。（長軸方位）Ｅ－Ｗ。（深さ）75㎝を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

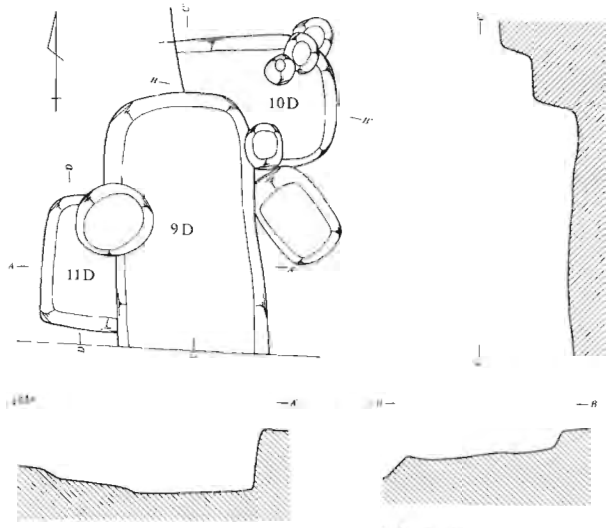
［遺物］検出されなかった。



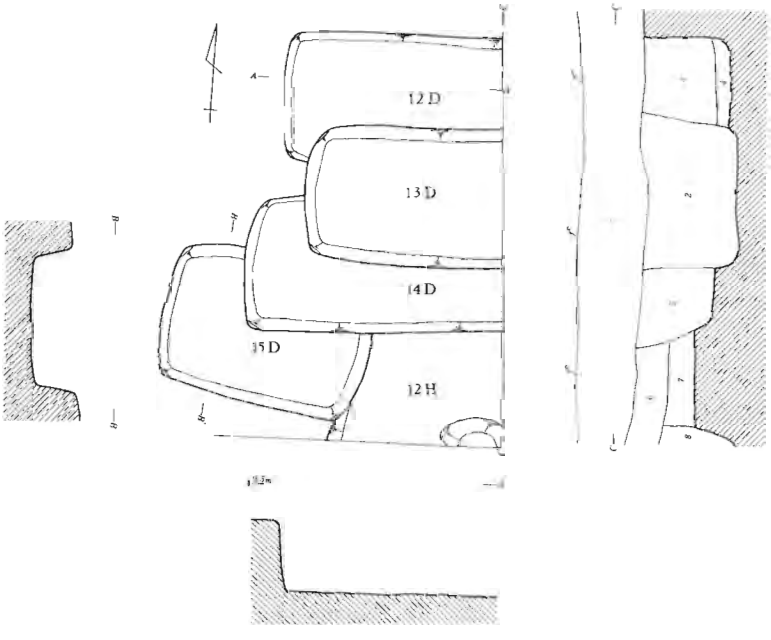
5～7号土坑



8号土坑



9～11号土坑



1層 耕作土。
2層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土。 13D
3層 ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土。
4層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。 12D
5層 ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土。 14D
6層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
7層 ローム粒子を含む黒褐色土。 12H
8層 ローム粒子を多く含む黄褐色土。

12号住居跡・12～15号土坑

0 2m

第38図 土坑1 (1/60)

［時期］近世か。

14号土坑（第38図）

［位置］（E－9）G

［構造］12号住居跡を切り、13号土坑に切られ、15号土坑と重複する。東側は調査区域外である。（平面形）長方形。（規模）不明×1.08m。（長軸方位）E－W。（深さ）58cmを測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］近世か。

15号土坑（第38図）

［位置］（E－8・9）G

［構造］12号住居跡を切り、14号土坑と重複する。（平面形）長方形。（規模）1.68×119cm。（長軸方位）N－80°－W。（深さ）40cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］近世か。

16号土坑（第39図）

［位置］（C－8・9）G

［構造］14号住居跡を切る。（平面形）長方形。（規模）1.70×1.15m。（長軸方位）N－10°－W。（深さ）42cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］近世か。

17号土坑（第38図）

［位置］（C－8）G

［構造］14号住居跡を切る。（平面形）長方形。（規模）不明×1.20m。（長軸方位）N－71°－E。（深さ）45cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］素焼土器の小破片が1点出土した。

［時期］近世。

17号土坑出土遺物（図版15－4－1）

素焼土器の体部小破片である。色調は黄橙色を呈し、胎土には金雲母・黒色微粒子を僅かに含む。

18号土坑（第39図）

［位置］（D－9）G

［構造］14号住居跡を切る。20号土坑に切られ、19号土坑と重複する。さらに東側は調査区域外にあるため詳細は不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。（深さ）44cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］陶器の小破片が2点出土した。

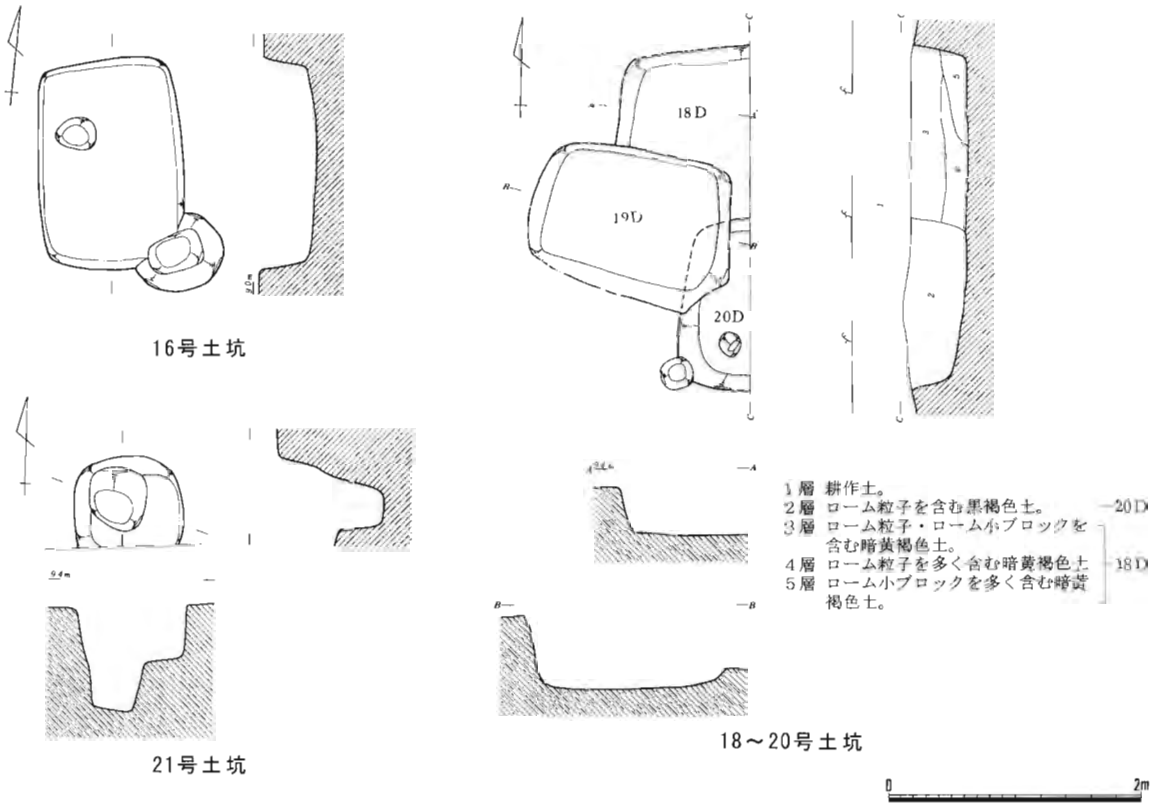
［時期］近世。

18号土坑出土遺物（図版15－4－2・3）

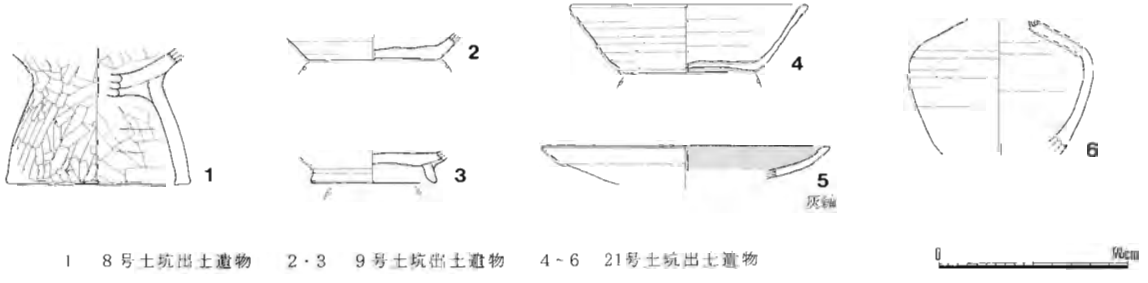
2・3は鉄釉天目茶碗の小破片で同一個体であろう。胎土の色調は灰褐色を呈する。

19号土坑（第39図）

［位置］（D－9）G



第39図　土坑2（1／60）



1　8号土坑出土遺物　2・3　9号土坑出土遺物　4～6　21号土坑出土遺物

第40図　土坑出土遺物（1／4）

[構造] 18・20号土坑と重複する。(平面形) 長方形。(規模) 1.65×1.20m。(長軸方位) N－80°－W。(深さ) 60cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[遺物] 陶器・瓦器の小破片が出土した。

[時期] 近世。

19号土坑出土遺物 (図版15－4－4・5)

4は18号土坑出土のものと同一個体である。

5は瓦器。手焙り形土器の底部小破片であろう。外面には花菱あるいは剣菱の叩き目痕が残る。

20号土坑 (第39図)

[位置] (D－9) G

[構造] 18号土坑を切り、19号土坑と重複する。東は調査区域外であるため詳細は不明である。(平面形) 方形か。(規模) 不明×1.40m。(深さ) 40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世か。

21号土坑 (第39図)

[位置] (E－8) G

[構造] 南側は調査区域外である。北側がピット状に深くなっており、そこから遺物の多くが出土している。(平面形) 隅丸方形。(規模) 不明×87cm。(深さ) 46cmで、ピット状の部分は86cmを測る。(覆土) ローム小ブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 須恵器の坏・壷、灰釉の皿・壷の破片が出土した。

[時期] 平安時代 (9世紀)。

21号土坑出土遺物 (第40図4～6、図版15－6－1～3)

須恵器坏形土器 (第40図4)

器高3.7cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡灰褐色を呈し、胎土には黒色粒子・砂粒を含む。遺存度は4／5強である。東金子窯製品。

須恵器甕形土器 (図版15－6－1・2)

1・2はどちらにも自然釉がかかっていることから、胴部上半の小破片であろう。1は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には黒色微粒子・白色粒子を含む。2は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には白色粒子を多く、黒色粒子を含む。

灰釉陶器 (第40図5・6、図版15－6－3)

5は皿形土器。現器高2.3cm、口径15.2cm。胎土には黒色粒子・砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。灰釉は内面に施釉されている。口縁部から体部下半にかけて、1／2程遺存する。

6は長頸瓶。現器高7.3cm、胴部最大径9.8cm。色調は暗灰褐色を基調とし、胎土には黒色粒子を含む。頸部から体部下半にかけて、1／2強遺存する。

図版15－6－3は長頸瓶の胴部上半の破片である。胎土の色調は灰白色を呈し、胎土には黒色粒子・砂粒を僅かに含む。

第６節　遺構外出土遺物

縄文時代から近世までの遺物が検出されている。時期的には縄文時代早・前・中・後期、弥生時代後期、中・近世に比定され、第１～10群に分類された（第41～48図、第４表）。

第１群　旧石器時代の石器（第47図１・２、第４表）

１はナイフ形石器、２は削器である。

第２群　縄文時代の石器及び剥片（第47図３～第48図36、第４表）

３～５は石鏃、６は石鏃未製品、７は二次加工剥片、８～23は剥片、24～30は打製石斧、31・32は磨製石斧、35は削器、36は二次加工石器である。

第３群　縄文時代早期後葉の土器（第42図５～13）

すべて条痕文系土器である。５～９は口縁部破片で、６・９には口唇上に刻みが付され、６・９は波状口縁になるものと思われる。10～13は胴部破片である。胎土中に繊維を多く含むものは１・７・11・12で、６については白色針状物質を多く含んでいる。５～８、11～13は地文の条痕文のみが施されているが、９は文様として細隆起線により作出された区画内に直線文が充填され、内面には横位の条痕文が施される。10は太めの隆起線に矢羽根状の斜線文が充填され、内面にはやや斜位の条痕文が施される。

第４群　縄文時代前期前葉から中葉の土器（第42図14～第43図30）

14は撚糸圧痕文をもつ土器である。特に口縁部直下には渦巻状のものが２カ所施文され、刺突文も併行して用いられている。胎土には繊維を含む。補修孔あり。15は口縁部外面に幅５㎜の粘土を貼り付け、複合口縁状に作出されている。外面には無節の羽状縄文が施される。胎土には繊維を僅かに含む。

16～18は貝殻が施文具として使用された土器で、16は口縁部内外面に貝殻腹縁を連続して刺突した貝殻腹縁文をもつ。17・18は貝殻背圧痕文が施文され、18は擬縄文風といえよう。いずれも胎土には繊維を含む。

19・20は羽状縄文が施文される土器で、19は隆帯をもつ。

21・22は撚糸圧痕文が施される土器である。撚糸の一単位は21が２本、22が４本で、それぞれ格子目状に施文される。

23・24・27～29は無節の縄文により斜状に施文される土器で、27には結節文が併用される。

25・26は半截竹管による沈線文が施文される土器で、26は格子目文、27は鋸歯状文になろうか。26の下部には単節斜縄文が施文される。

30は胴部全体にＲＬの単節斜縄文が施文される土器である。

以上、大略14～22は花積下層式土器、23～30は関山・黒浜式土器に比定されよう。

第５群　縄文時代前期後葉から中期前葉の土器（第43図31～58）

31は半截竹管により曲線化した肋骨文と円形刺突文が施文される土器である。

32・33は半截竹管により連続爪形文が施文される土器である。32は波状口縁に沿って２列の爪形文が描かれ、その下部には単節斜縄文が施される。33は木葉文＋磨消縄文の土器である。

34～38は連続爪形文をもつ浮線文土器で、地文には半截竹管による縦位あるいは斜位の沈線文が施される。38は無文地に粘土貼付文が細い、いわゆる結節浮線文が縦位に施される。

39～42は半截竹管により縦走羽状文あるいは鋸歯状文が施文される土器で、41には部分的に縦位の連

続爪形文をもつ貼付文が付される。42にはボタン状の貼付文が付される。

43・50は三角印刻文が施文される土器である。43は口縁部に連続する三角印刻文が施され、50は上下交互に三角印刻文を連続させることにより隆帯による波状文を表出する効果をもたせている。

44～49・53は半截竹管による横位の沈線文を主体とする土器である。44は複合口縁を呈し、53は口縁部に未発達であるが把手状の突起が付される。49は大きく印刻されている箇所が観察される。

51・52は半截竹管による沈線文が施文される土器である。51は曲線的な微隆起帯が付され、52は三角印刻文とその下部に集合沈線文が施文される。

54～56は横位の結節文が施文される土器である。54は有段口縁を呈し、55は地文に単節斜縄文が施される。

57・58は集合沈線が施文される土器である。57は微隆起帯及び沈線文に区画された内部に半截竹管による集合沈線文が充填される。58は隆帯の下部に連続した押引文・沈線文を横走させ、その下部に細線による集合沈線文が施文される。

以上、31～42・45～48・51は諸磯式土器、43・49・50は十三菩提式土器、44・52～58は五領ヶ台土器に比定されよう。

第６群　縄文時代中期中葉から後葉の土器（第41図１～３、第43図59～第44図96）

１は現器高29.7cm、口径33.4cm。口縁部直下に隆帯をまわし、全体にＬＲの単節斜縄文が施文される土器である。縄文の原体には太縄と細縄のやや異なった縄が使用されているものと思われる。色調は全体に黒褐色を呈する。古墳時代15号住居跡の覆土中からまとまって出土し、口縁部から胴部下半にかけて２／３程遺存する。

２は現器高12.6cm、推定口径27.6cm。口縁部直下に隆帯をまわし、全体にＬＲの単節斜縄文が施文される土器である。色調は全体に黒褐色を呈する。古墳時代10号・15号住居跡の覆土中から出土し、口縁部から胴部上半にかけて１／３程遺存する。

３は現器高3.9cm、底径6.2cm。幅広の沈線による懸垂文と地文のＬＲの単節斜縄文が施文される。色調は暗茶褐色を呈する。古墳時代13号住居跡の覆土中から出土し、底部のみ２／３程遺存する。

59・60は隆帯に沿って半截竹管による連続爪形文が施文される土器で、59は口縁部破片で口唇部に刻み目が付される。60は幅広の爪形文が施文され、その下部には沈線文も併用される。胎土には多くの金雲母が含まれる。61は底部外面に幅広の連続する爪形文が施される土器である。

62・63は沈線による文様が施文される土器で、62は口縁部に無文帯をもつ。

64は刻みをもつ隆帯で区画された内部を縦位の沈線により充填された土器である。65は３段の隆帯の下部に半截竹管による縦位の沈線文が施文される。

66～69・71～83は口縁部破片、70・84～93は胴部破片である。

66・67・71は口縁部文様帯が連続する楕円区画文で構成される土器である。66・71は区画内に沈線が充填され、66の頸部は無文帯をもつ。67は区画内にＲＬの単節縄文、68は区画内にＬの撚糸文が充填される。69は隆帯による渦巻文が描かれ、70は胴部文様帯にＬの撚糸文が施文される。

72・73は無文地の口縁部文様帯に隆帯による三角文、曲線文が施文される。

74はＲＬの単節斜縄文を地文に２本の沈線により、「∩」形の文様が描かれ、75は「？」形の文様が描かれている。76は口縁部直下の隆帯から懸垂文が垂下し、地文はＲＬの単節斜縄文である。77は口縁部直下に２列の円形刺突列文が施文され、その下部に２段の連弧文が大きく波状に描かれる。78は口縁

部直下に２列の円形刺突列文と２本の沈線文が施文される。77・78の地文は半截竹管による縦位の条線文である。

79～81は口縁部直下に沈線により、「∩」形の先端が鋭く尖った「M」字、「ハ」字状の文様が施文される。

82・83・91・92は地文として条線文が施文される土器で、82・83は口縁部直下に半截竹管による縦位の条線文が地文として施文される。91は櫛状工具による縦位の蛇行文である。

84～90は胴部に磨消懸垂文をもつ土器で、84は２本の懸垂文で縦位に区画された内部にＲＬの単節斜縄文が施される。85は口縁部文様帯と胴部文様帯の境を幅広の沈線で画し、胴部文様帯には磨消懸垂文が施文され、地文はＲＬの単節斜縄文である。86は胴部に楕円状の区画文が施文され、その内部にはＲＬの単節斜縄文が施される。87は胴部に磨消懸垂文と「？」形の沈線文が描かれ、地文にはＬの無節斜縄文が施される。89は地文のＬＲの単節斜縄文内に列点文が施文される。90は微隆起線文による懸垂文が施文される土器で、地文にはＲＬの単節斜縄文が施される。

93は棒状工具による綾杉文を地文に沈線と隆帯による懸垂文が施文される土器である。

94～96は土錘である。重さは94が16.4ｇ、95ｇが12.2ｇ、96が22.2ｇ。

以上、大略59～65は中期中葉の阿玉台・勝坂式土器、１～３、66～76・78～92は後期後葉の加曽利Ｅ式土器、77は後期後葉の連弧文系土器、93は後期後葉の曽利式系土器に比定される。

第７群　縄文時代後期前葉の土器（第45図97～第46図134）

97は把手をもつ口縁部破片である。色調は黒褐色を呈する堅緻な土器である。98は波状口縁を呈する口縁部破片で、口縁直下には帯縄文による文様が施文され、沈線区画内にはＬＲの単節斜縄文が充填される。

99～101は単節縄文を地文にスペード文・Ｊ字文の曲線文が施文される土器である。

102～113は沈線文と刺突文あるいは列点文が施文される土器である。

114は有孔の小突起をもつ口縁部破片で、粘土帯の縁には沈線がまわる。115は有孔の大形把手をもつ口縁部破片である。外面有孔直上には刺突文をもつ隆帯が施される。116は口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部に小突起をもち、口縁端部には沈線がまわり、口縁部文様帯には円形刺突文と沈線により文様が施文される。胴部文様帯は磨消懸垂文が施文され、縄文はＲＬの単節斜縄文である。

117～119は隆帯と沈線により文様が表出される土器で、117は注口土器と思われる。胴部上半にリボン風の貼付文が施文されている。

120～127は無文地に沈線による文様が表出される土器で、120は有段状の口縁を呈し、その直下には２本の平行する沈線が垂下する。121は懸垂文に連結し、複数沈線が施文される。122は重弧文風の曲線文が施文される。123～127は沈線による懸垂文である。

128～133は底部から口縁部にかけて大きく外反する朝顔形の器形を呈する土器であろう。

128・129は口縁部内面に沈線、外面には刻みをもつ隆帯がまわる土器である。口縁部内面の沈線は、128が１本、129は１本＋３本の４本である。どちらも色調は黒褐色を呈し、堅緻な土器である。

130・131は横位文様帯の上下を連結する「Ｚ」部分の文様であろう。130は沈線区画内が無文で、地文にＬＲの単節斜縄文が施文される。131は沈線区画内に刺突文が付され、ＬＲの単節斜縄文が施文される。

132・133は横位文様帯を曲線的な帯縄文により施文される土器であろう。縄文はどちらもＬＲの単節

斜縄文を充填するものである。

134は土錘である。重さは10.2ｇ。

以上、97～101は称名寺１式土器、102～113は称名寺２式土器から堀之内２式土器、114～127は堀之内１式土器、128～133は堀之内２式土器に比定されよう。

第８群　縄文時代晩期の安行Ⅲｃ式土器（第41図４）

現器高7.7㎝、推定口径18.1㎝。口縁部文様帯に細描沈線による文様が施文される土器である。文様は上下に平行する沈線をまわし文様帯を画し、その内部にまず２本の平行する沈線を垂下させ小区画を作り、その後上下左右に半月状の曲線文を連結させたものである。色調は暗橙色を基調とし、胎土には砂粒・小石を含む。古墳時代15号住居跡の覆土中から出土し、口縁部のみ１／３程遺存する。

第９群　弥生時代後期の土器（第46図135～144）

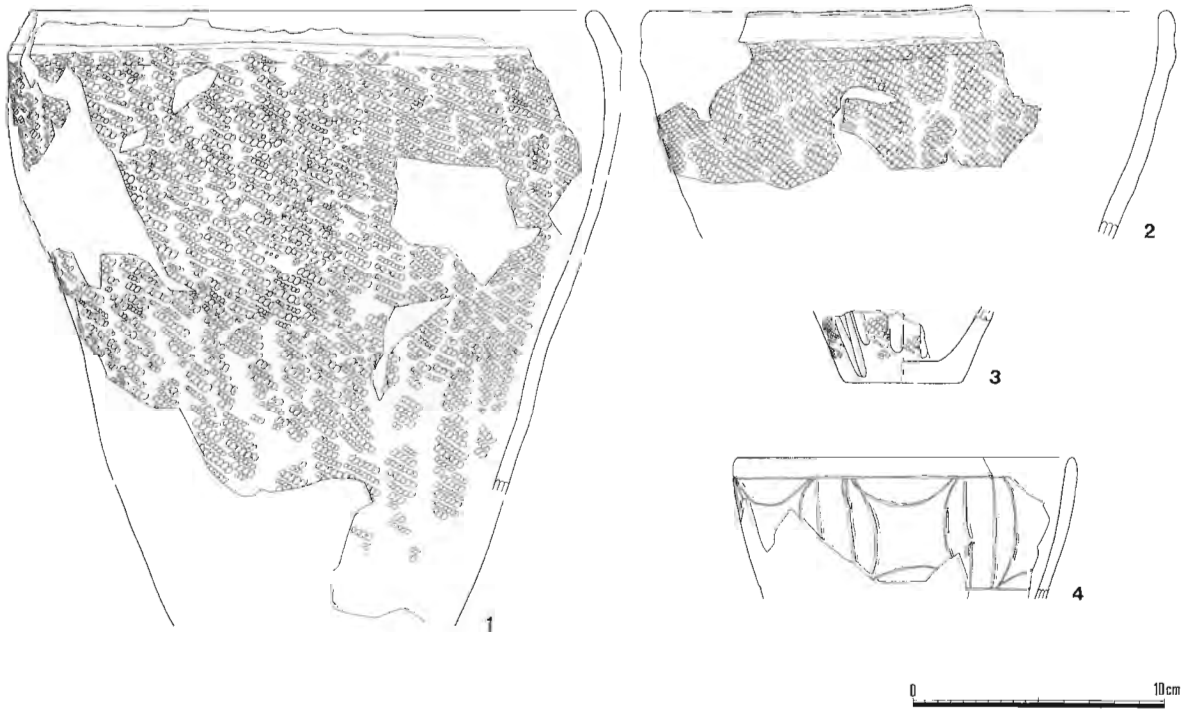
壺形土器（135～140）

135・136は口縁部、137～140は胴部小破片である。

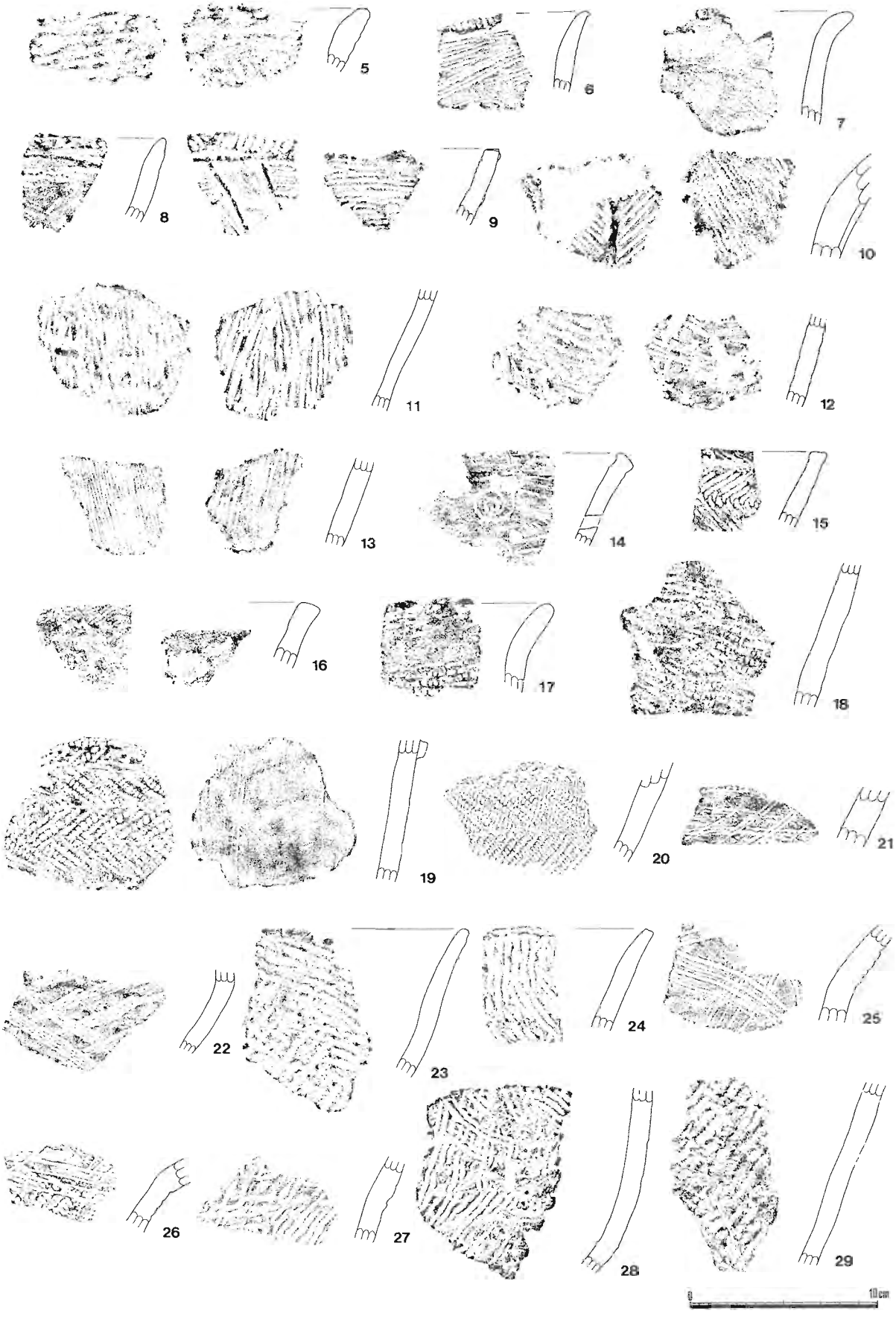
135は幅広の複合口縁を呈し、外面はＬＲの単節斜縄文を地文とし、その上に４本の棒状貼付文を装飾している。また、外面複合部下端にはハケ状工具による刻み目が付されている。胎土には黄褐色粒子を多く含む。赤彩は内面及び外面複合部下端に施され、内面は横方向のヘラ磨き調整が施される。136は有段状の口縁を呈する口縁部小破片で、口唇部はやや平坦に面取りが施されている。内面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施され、外面の有段部には明瞭なハケ目痕が残る。胎土には黄褐色・暗茶褐色粒子を含む。

137～139は文様帯の下端をＳ字状結節文で区画する土器である。137・138の施文部以外は赤彩が施される。139は羽状構成される単節斜縄文に円形赤彩文が施される。

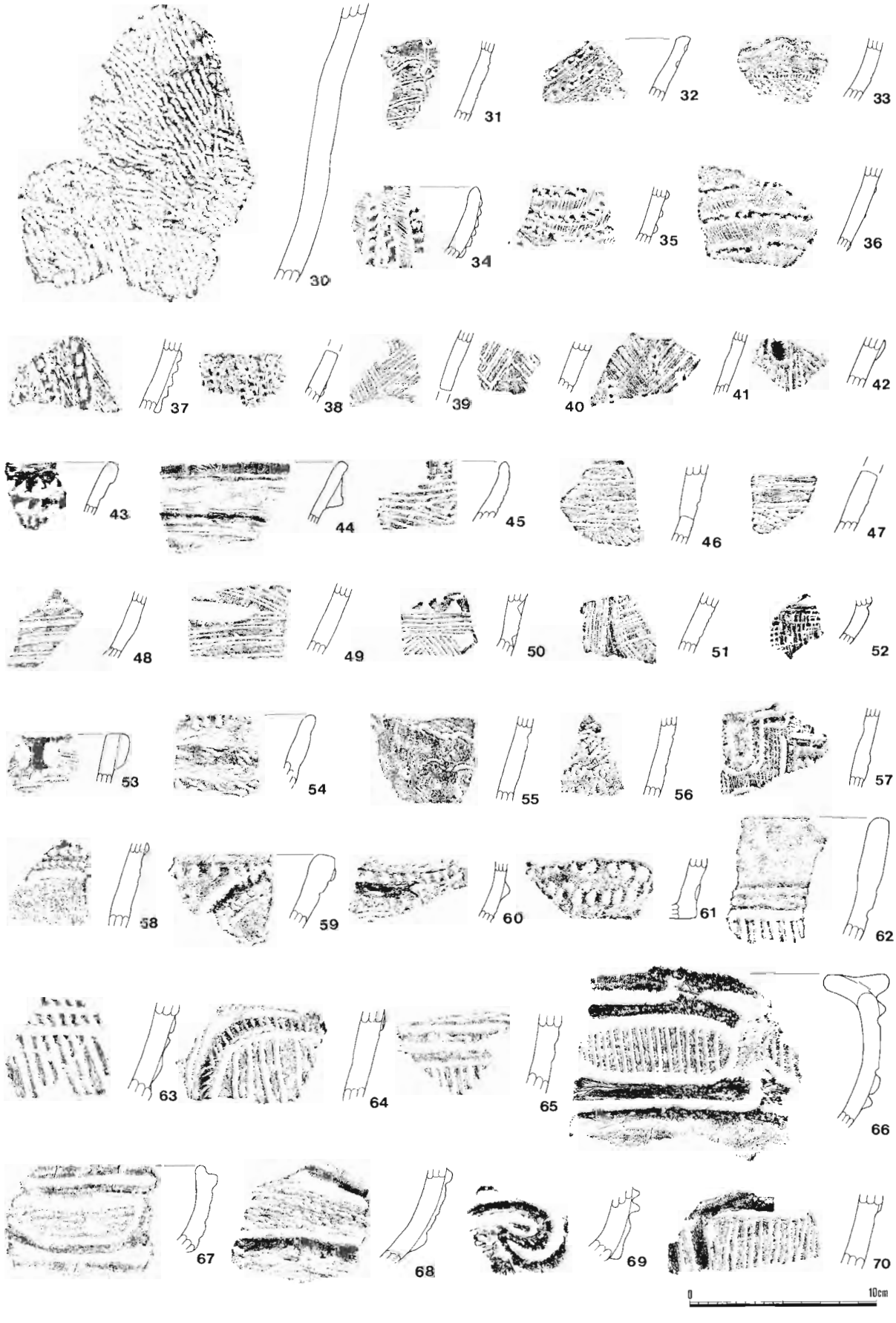
140は沈線区画内に単節斜縄文と網目状撚糸文が施文される土器である。赤彩土器であろう。



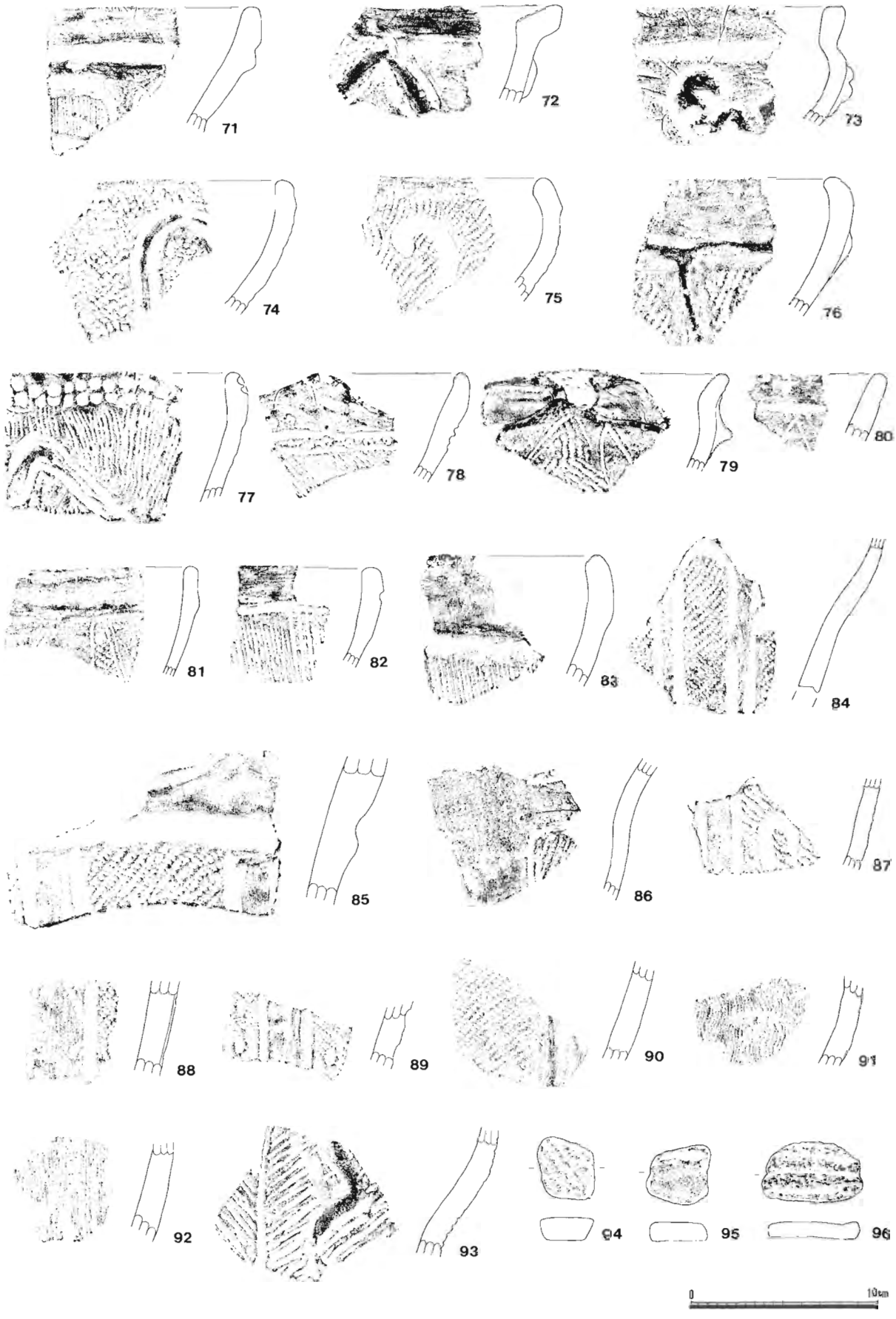
第41図　遺構外出土遺物１（1／4）



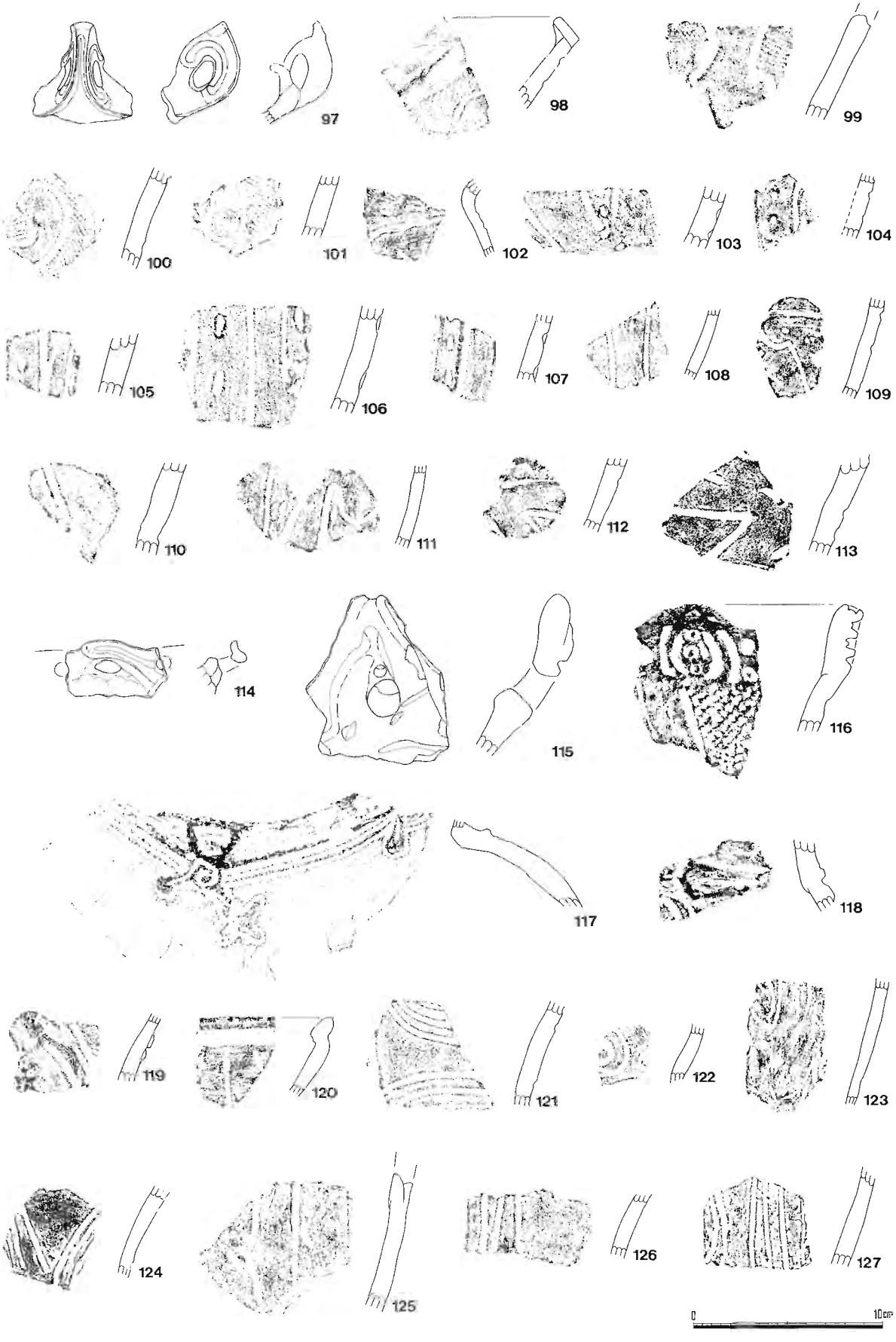
第42図　遺構外出土遺物２（1／3）



第43図　遺構外出土遺物３（1／3）



第44図　遺構外出土遺物４（1／3）



第45図　遺構外出土遺物５（1／3）

甕形土器（141～144）

すべてハケ甕で、141・142は口縁部、143・144は胴部小破片である。

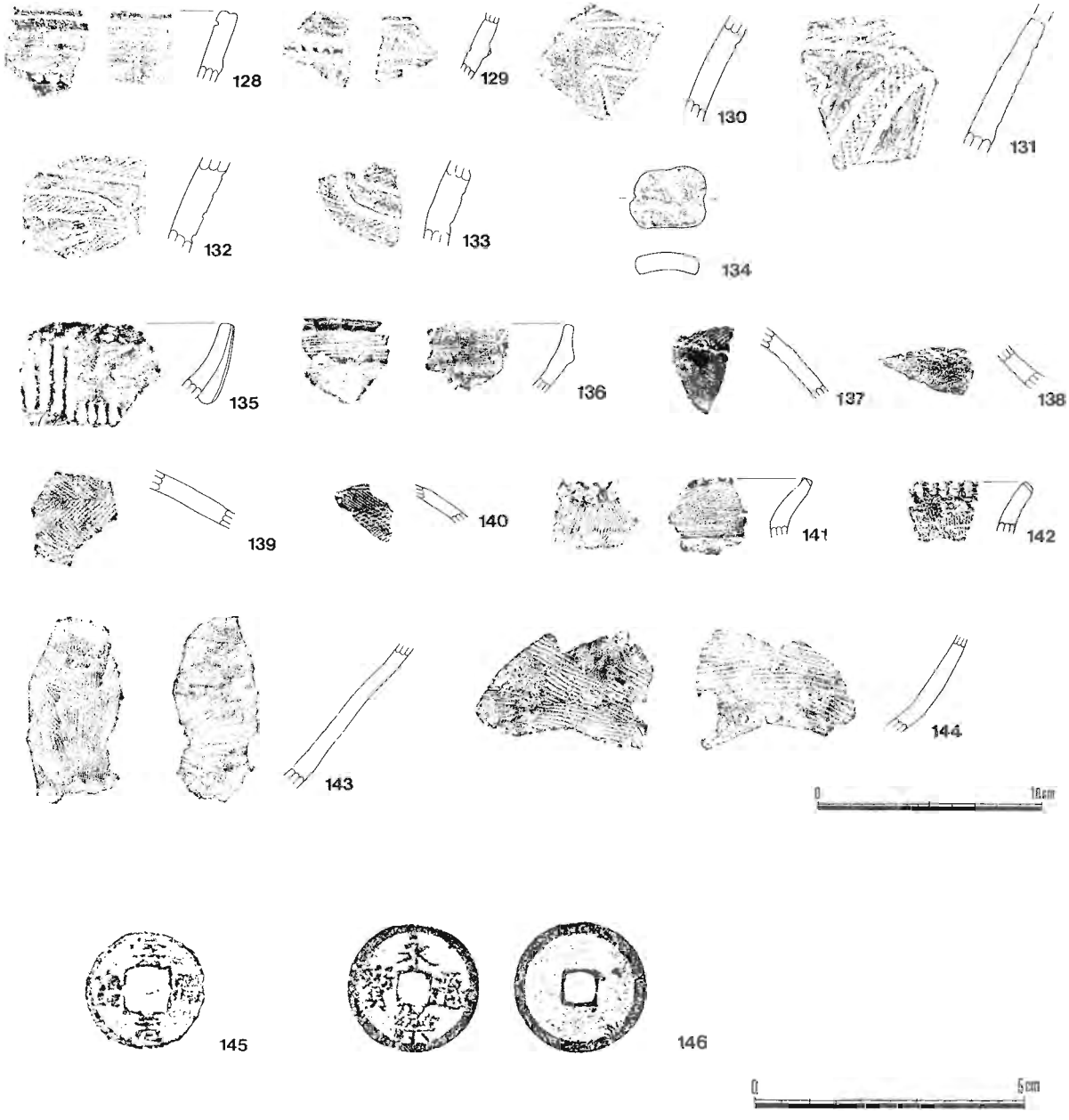
141・142は口唇部にハケ状工具による刻み目が付される。141は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。142は色調が黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。

143の色調は内面が黒褐色、外面が暗黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラ磨き調整が施される。144の色調は黒褐色を基調とし、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。

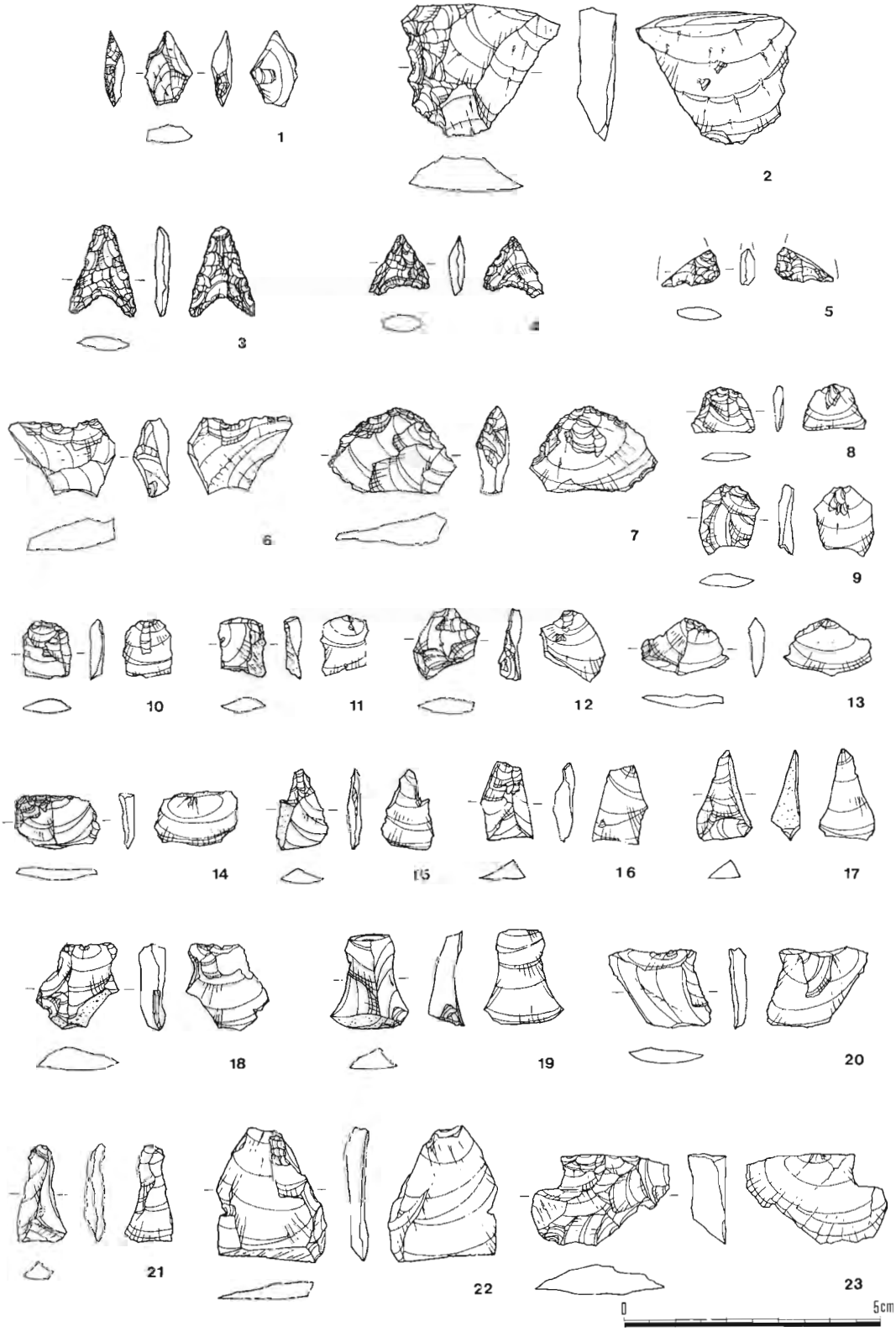
第10群　銅銭（第46図145・146）

145は嘉祐元宝（北宋　初鋳1056年）である。外径2.25㎝、穿径0.80㎝、重さ1.9ｇ。穿孔は星形孔。

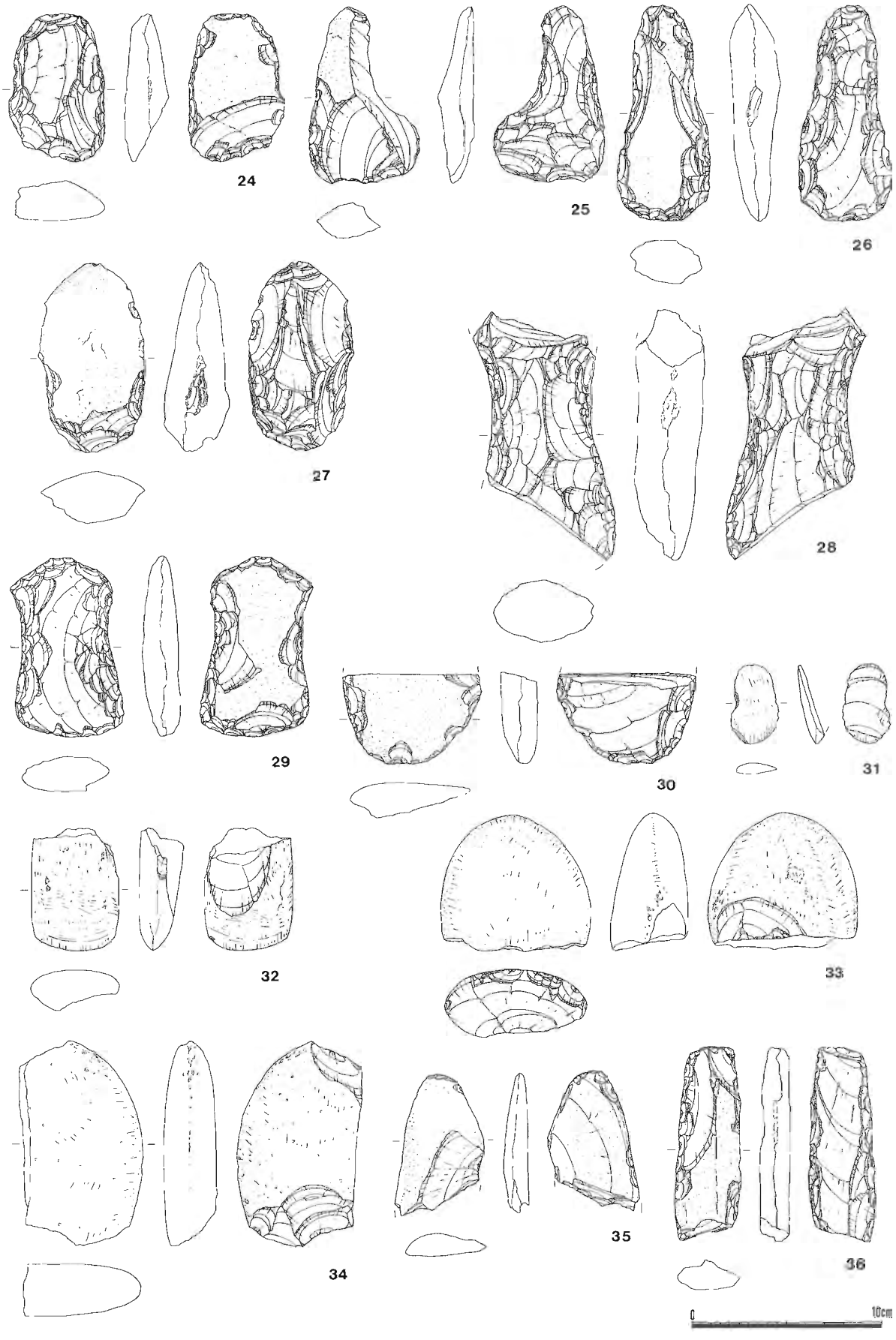
146は永楽通宝（初鋳1408年）である。外径2.40㎝、穿径0.55㎝、重さ2.7ｇ。



第46図　遺構外出土遺物６（1／3・4／5）



第47図　遺構外出土石器１（4／5）



第48図　遺構外出土石器2（1／3）

図版番号		遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第6図	39	1号住居跡	打製石斧	砂岩	99.25	51.83	12.91	74.1	
	40	〃	打製石斧	砂岩	99.14	47.89	23.47	147.2	
	41	〃	石皿	花崗岩	89.23	128.03	44.94	615.0	
	42	〃	石鏃	チャート	19.47	14.87	4.69	1.1	
	43	〃	彫器	黒曜石	16.07	23.29	7.84	2.6	
	44	〃	二次加工剥片	黒曜石	28.94	14.29	8.22	2.0	
	45	〃	剥片	黒曜石	27.07	21.57	3.05	1.4	
	46	〃	剥片	黒曜石	17.93	20.63	5.02	1.3	
	47	〃	剥片	黒曜石	14.62	20.22	5.13	1.0	
	48	〃	剥片	黒曜石	18.78	7.39	3.89	0.5	
	49	〃	剥片	黒曜石	17.36	14.28	4.71	0.7	
	50	〃	剥片	黒曜石	21.70	16.47	3.25	0.7	
	51	〃	剥片	黒曜石	25.45	11.54	4.65	1.3	
	52	〃	剥片	黒曜石	35.04	16.33	6.96	2.6	
	53	〃	剥片	黒曜石	11.58	15.87	4.43	0.7	
第10図	33	29号土坑	敲石	ホルンフェルス	112.60	58.28	33.94	335.1	
第12図	5	2号炉穴	剥片	黒曜石	18.48	16.76	2.96	0.5	
	6	〃	剥片	黒曜石	16.61	15.77	6.84	1.2	
	7	〃	剥片	黒曜石	21.57	26.89	5.75	2.7	
	8	〃	剥片	黒曜石	40.33	38.65	10.23	14.2	
	9	〃	剥片	黒曜石	24.55	13.29	8.99	1.7	
第47図	1	遺構外	ナイフ形石器	黒曜石	19.65	11.90	5.25	1.0	Ⅳ層下部
	2	〃	削器	黒曜石	36.25	40.71	10.73	12.7	Ⅳ層下部
	3	〃	石鏃	チャート	23.97	17.22	3.71	1.2	
	4	〃	石鏃	黒曜石	15.17	15.56	3.85	0.7	
	5	〃	石鏃	チャート	8.11	15.51	3.67	0.3	
	6	〃	石鏃未製品	チャート	20.22	28.35	8.40	4.4	
	7	〃	二次加工剥片	黒曜石	22.79	32.94	8.05	5.1	
	8	〃	剥片	黒曜石	11.44	15.92	2.58	0.4	
	9	〃	剥片	黒曜石	18.12	14.75	3.79	0.8	
	10	〃	剥片	黒曜石	15.17	12.37	3.36	0.7	
	11	〃	剥片	黒曜石	15.85	12.12	3.62	0.6	
	12	〃	剥片	黒曜石	18.86	15.22	5.65	1.0	
	13	〃	剥片	黒曜石	14.59	22.66	3.87	0.8	
	14	〃	剥片	黒曜石	13.76	21.28	3.74	1.0	
	15	〃	剥片	黒曜石	20.40	12.10	3.53	0.7	
	16	〃	剥片	黒曜石	20.16	12.67	5.91	0.9	
	17	〃	剥片	黒曜石	23.31	14.16	7.58	1.1	
	18	〃	剥片	黒曜石	22.37	21.49	5.93	2.3	
	19	〃	剥片	黒曜石	24.75	20.30	9.72	2.4	
	20	〃	剥片	チャート	21.81	25.46	4.57	2.3	
	21	〃	剥片	黒曜石	25.29	12.14	4.43	0.8	
	22	〃	剥片	粘板岩	35.19	28.27	5.32	5.6	
	23	〃	剥片	珪質頁岩	24.53	36.85	8.61	6.7	
第48図	24	〃	打製石斧	砂岩	78.65	51.21	22.31	102.9	
	25	〃	打製石斧	粘板岩	94.65	58.18	16.69	78.6	
	26	〃	打製石斧	ホルンフェルス	116.47	48.42	23.35	130.9	
	27	〃	打製石斧	粘板岩	101.67	55.54	34.10	183.1	
	28	〃	打製石斧	砂岩	134.81	66.86	34.49	346.1	
	29	〃	打製石斧	砂岩	96.63	57.01	18.05	136.1	
	30	〃	打製石斧	砂岩	48.51	73.28	18.91	82.0	
	31	〃	磨製石斧	粘板岩	43.25	24.85	7.10	9.8	
	32	〃	磨製石斧	粘板岩	65.71	46.43	22.29	103.5	
	33	〃	磨石	閃緑岩	73.29	78.73	39.70	335.6	
	34	〃	磨石	閃緑岩	110.64	62.79	28.40	298.2	
	35	〃	削器	粘板岩	76.52	49.57	13.08	46.8	
	36	〃	二次加工石器	片岩	103.79	34.35	16.28	77.2	

第4表　石器一覧表

（単位：mm，g）

第4章　まとめ

中野遺跡は、今までの発掘調査から、旧石器時代、縄文時代早・中・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、中・近世の複合遺跡として判明している。そして、今回の中野遺跡第25地点の調査では、縄文時代早期の炉穴5基、縄文時代中期の住居跡1軒・土坑9基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡10軒、平安時代の住居跡2軒、他土坑16基など数多くの遺構を検出した。

特に、住居跡で最も多く検出された古墳時代後期の住居跡からは、遺物として土器が質・量共に豊富に出土している。本稿では、将来的に中野遺跡の総合的研究を行う上での基礎的データの1つとして、古墳時代後期の住居跡と出土土器についてを重点に置いて分析することにしたい。

なお、本稿での古墳時代の区分は、前期・中期・後期の3期区分を基本とし、そのうち後期については、実年代的に5世紀後葉から7世紀後葉に比定することにする。

第1節　古墳時代後期の住居跡構造の基礎的考察について

（1）平面形・規模について

まず、住居跡の平面形については、不明の10・14号住居跡を除き、13・16号住居跡は長方形を呈するが、その他の15・17～19・21号住居跡は整った正方形である（註1）。

規模については、第49図に示すように、4m台が3軒（13・15・18号住居跡）、6m台が2軒（14・16号住居跡）、7m台が3軒（10・17・21号住居跡）、10m台が1軒（19号住居跡）であった。住居面積では、最小の15号住居跡と18号住居跡がほぼ同じ規模で約17㎡、最大は19号住居跡の約102㎡で最小と最大の面積差は約6倍である。19号住居跡については、市内最大の住居跡であり、関東でも最大級であることは注目に値するであろう（第5表参照）。

また、本遺跡に近接する志木市城山遺跡の5～7世紀の住居跡としては、3m台の超小形のものから8m台の大形のものが検出されているが、その中でも5・6m台のものが最も中心的な存在であると分析されている（佐々木・尾形1988）。

次に、住居跡の規模の推移をみてみることにしよう。そこで、今回検出された住居跡の中で、切り合い関係をもつ15～17・19号住居跡の4軒に注目したい。この中で一番古い住居跡は、16・19号住居跡に切られる17号住居跡で、15号住居跡は16号住居跡に切られ、2番目に古い。16・19号住居跡は同時存在の可能性がある。つまり、6世紀後葉に比定される15号住居跡は7世紀前葉に比定される16号住居跡に切られることで、新しい時期の住居跡の方が大形のものであり、16号住居跡に切られる6世紀前葉の17号住居跡は、16号住居跡よりも大形のものである。さらに、今回検出された住居跡の中で最新の7世紀前葉に比定される住居跡が19号住居跡であることは、一概に住居跡の規模から時間的な推移を明確に捉えることはできないという結論に達した。

古墳時代後期の住居跡の規模の推移については、志木市城山遺跡では、概してⅠ期には小形・中形のもので、Ⅱ～Ⅴ期にかけては、大・中・小形が同時に存在している。そして、住居跡が明確に小形化するのはⅥ期以降であると言える。なお、城山Ⅵ期は最近の研究で、7世紀中葉まで下るものと考えられている（尾形1996・1999a・1999b・2000）。また、東京都新宿区下戸塚遺跡では、「竪穴の規模の大小

にかかわりなく、79号・89号・104号・107号・109号住居址から陶邑のＴＫ208～47併行期の須恵器が出土している点は重視される」と報告されている（橋本1995）ことや埼玉県上福岡市川崎遺跡の報告で、東京都八王子市中田遺跡の住居跡について分析している笹森健一氏によると、「鬼高Ｉ期で、大形住居と小形住居と明確に分離が可能」（笹森1978）とするなどから、概して住居跡の規模は、一時期に同規模の住居跡が存在するのではなく、その集落内での地位の差あるいは役割といった差など様々な要因により、異なった規模の住居跡が同時に存在していたものと考えられる。一般的に６世紀から７世紀にかけて住居跡の規模は、時期が新しくなるにつれて、小形化の傾向にあるものと考えられがちであるが、それはすべての集落で共通することではなく、ましてや調査面積が狭小であった場合のデータでは意味をなさないことを念頭に入れる必要がある。また、他の遺跡での集落の特色が明らかにされたとしてもその特色が、すべての集落で当てはまるという直接的な根拠は何もないはずである。例え、同じ市内という近接な地域であれ、立地条件が明らかに違う遺跡であれば、まず、先入観なしにその特定の集落の基礎的な分析を行うことによって、その集落の特色を明確にし、そこで、初めて集落間との結び付きを考えることが可能になると言える。

（２）主軸方向について

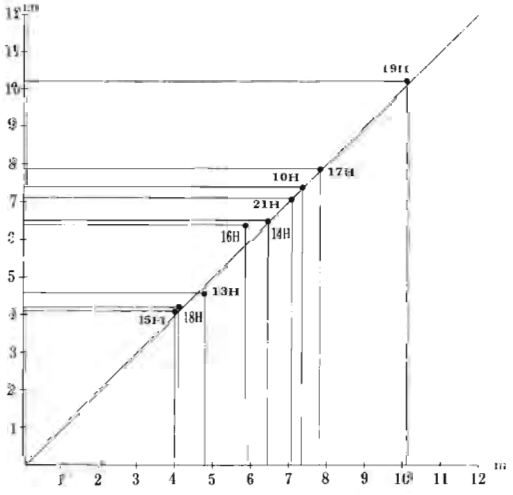
主軸方向については、非常にあいまいで一体何をもって主軸と呼んでいるのか常日頃から疑問に思っている。例えば、今回の13号住居跡は、住居内に煮炊き施設として、炉及びカマドが確認できないため、住居跡の長軸方向あるいは入口施設の方向を主軸方向とすべきかが難しかった。弥生時代の住居跡の場合、炉の位置は大部分が北壁寄りの長軸上にあり、さらに入口施設がそれに対向する壁に存在することから、長軸イコール主軸のイメージである。しかし、弥生時代の住居跡の主軸方向についてもその優先順位として、条件により以下のように変動する可能性がある。

１．長軸方向を主軸方向とする。

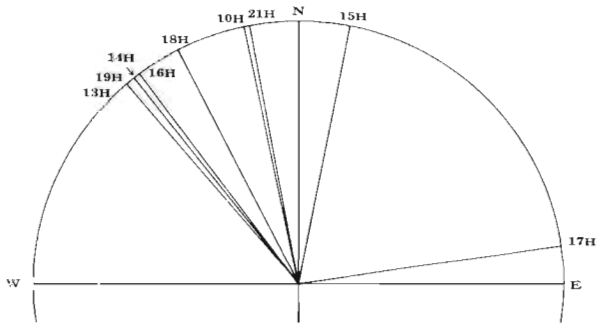
①炉の位置が長軸上の壁寄りにあり、入口施設がそれに対向する壁寄りにある。

②炉の位置が長軸上の壁寄りにあり、入口施設がない。

③炉がなく、入口施設が長軸上の壁寄りにある。



第49図　住居跡の規模の分布図



第50図　住居跡の主軸方向の分布図

	都道府県	市町村	遺跡名	遺構名	規模（m）	時代	掲載資料
1	埼玉県	志木市	中野	19号住居跡	10.21×10.07	7c前半	尾形則敏　2001『埋蔵文化財調査報告書2』志木市の文化財第31集　志木市教育委員会
2	埼玉県	志木市	城山	29号住居跡	8.70×8.60	7c前半	佐々木保俊・尾形則敏　1987『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　志木市教育委員会
3	埼玉県	志木市	城山	36号住居跡	8.64×8.50	6c中葉	佐々木保俊・尾形則敏　1987『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　志木市教育委員会
4	埼玉県	所沢市	高峰	SB120	一辺9.01	6世紀	金井浩雄　1984『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集
5	埼玉県	大宮市	茗花	第1住居跡	7.95×8.40	7c中葉	田代　治　1999『上加遺跡　中野林袋遺跡　茗花遺跡　指扇下戸遺跡』大宮市遺跡調査会報告第65集　大宮市遺跡調査会
6	埼玉県	大宮市	根切	第6号住居跡	一辺9	6世紀	宮崎田利江・渡辺正人他　1991『市内遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第29集　大宮市教育委員会
7	埼玉県	大宮市	御蔵山中	第3住居跡	一辺8.3	5c後半	山形洋一・山口康行他　1989『御蔵山中遺跡Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告第26集　大宮市遺跡調査会
8	埼玉県	日高市	上猿ヶ谷戸		一辺14	7c中葉	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994『年報』23ページ
9	埼玉県	岡部町	砂田前	第22号住居跡	9.20×8.90	6c後半	岩瀬　譲　1991『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
10	埼玉県	岡部町	六反田	C区第113住居跡	一辺8	六反田Ⅷ期	梅沢太久夫・石岡憲雄　1981『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会　埼玉県立歴史資料館編
11	埼玉県	行田市	築道下Ⅱ	第327住居跡	8.30×8.20	6c後半	大屋道則　1998『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
12	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第365住居跡	一辺約9	7c後半	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
13	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第457住居跡	8.60×8.54	6c中葉	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
14	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第461住居跡	8.25×8.15	6c前葉	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
15	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第532住居跡	8.84×9.13	6c中葉	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
16	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第537住居跡	一辺約9	6c中葉	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
17	埼玉県	行田市	築道下Ⅲ	第537住居跡	9.65×7.95	6c中葉	劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
18	東京都	八王子市	中田	E－8	一辺9.6		岡田淳子・服部敬史　1966～1968　『八王子市中田遺跡』資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　八王子市中田遺跡調査会
19	東京都	八王子市	中田	E－11	一辺11.5		岡田淳子・服部敬史　1966～1968　『八王子市中田遺跡』資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　八王子市中田遺跡調査会
20	東京都	八王子市	中田	E－20	9.25×9.1		岡田淳子・服部敬史　1966～1968　『八王子市中田遺跡』資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　八王子市中田遺跡調査会
21	東京都	秋川市	宮ヶ谷戸	第4号住居跡	12.00×11.25	6c末～7c初	㈱ジャパン通信情報センター　1993『月刊文化財発掘出土情報』27ページ
22	神奈川県	横浜市	荏田第1	第6号住居跡	一辺約8.5	7c中葉	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代のよこはま』137ページ
23	神奈川県	横浜市	矢崎山	H15	10以上	5c後半	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代のよこはま』
24	神奈川県	横浜市	矢崎山	H13	一辺9.5	5c後半	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代のよこはま』
25	神奈川県	横浜市	花見山	B7	一辺9	5c前半	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代のよこはま』
26	神奈川県	藤沢市	南鍛冶山	4－SI85	一辺10		藤沢市文書館運営委員会編　1991『藤沢市史研究　24』
27	群馬県	前橋市	大室内堀群		一辺12	6c前半	㈱ジャパン通信情報センター　1998『月刊文化財発掘出土情報』35ページ
28	群馬県	尾島町	歌舞伎	A2号住居跡	一辺9.64	7c	井上唯雄　1982『歌舞伎遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
29	群馬県	尾島町	歌舞伎	B23号住居跡	9.0×8.6	5c後半	井上唯雄　1982『歌舞伎遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
30	栃木県	佐野市	ゴロノミヤ		一辺12	6c後半	㈱ジャパン通信情報センター　1998『月刊文化財発掘出土情報』25ページ
31	千葉県	市原市	潤井戸西山	K－14	一辺8.9	7c後半	1986『潤井戸西山遺跡』財団法人　市原市文化財センター

第5表　大形住居跡一覧

2．炉の位置を主軸方向とする。

①住居プランに長軸・短軸の差がみられず、炉が一辺の壁に寄って存在する。

3．炉の長軸方向を主軸方向とする。

①住居プランに長軸・短軸の差がみられず、炉が住居中央に存在する。入口施設は存在しない。

4．入口施設が付設する壁に直交する方向を主軸方向とする。

①住居プランに長軸・短軸の差がみられず、炉が存在しない。

5．主眼が曖昧になり、研究者の判断による。

①住居プランに長軸・短軸の差はあるが、入口施設が短軸上の壁寄りに存在する。

②住居プランに長軸・短軸の差はあるが.炉の位置が規則的になく、入口施設がない。

③住居プランに長軸・短軸の差はあるが.長軸が東西方向にあり、炉・入口施設がない。

④住居プランに長軸・短軸の差がみられず、炉・入口施設が存在しない。

⑤住居プランに長軸・短軸の差がみられず、入口施設は壁寄りに存在するが、炉は住居中央に存在し、炉の形態は入口施設の方向に対し短い。

⑥住居の大部分が調査区域外にあり、壁の一部が確認されている。

以上、5のように主眼が曖昧で、その順位が、研究者の捉え方次第で違ってしまうこともあり得ることは、やはり、主軸という表現を使用する場合は、何をもって主軸であるのかを明らかにする必要があろう。

カマドを有する住居跡に関しても、非常に難しい問題は、その主軸とする基準にカマドを重視するかあるいは入口施設を重視するかである。カマドと入口施設が同軸上に存在する場合は、問題はないが、カマドと入口施設が直交する場合は、個々の遺構では判断ができず、その集落全体における配置にも言及する必要があるものと思われる。例えば、集落への入口と個々の住居入口の配置がどのような関係にあるのか、あるいは、煙の被害にならないように隣接する住居間でカマドの位置が前もって決められていたのではないかなどの問題である。

第50図は、こうした住居跡の主軸方向の分布を表したものであるが、本報告第2章での遺構の事実記載では、主軸方向という表現は使用していない。ここでの主軸方向とは、カマドを有する住居跡の場合、カマドを有する壁の1辺を基軸とし、その直交する2辺の平行する壁の示す平均した方向を示している。カマドを有さない13号住居跡については、前記5－①に該当し、北方向を重視した上での入口施設の方向を主軸方向とした。また、14号住居跡については、5－⑥に該当し、北方向を重視した方向を示した。

特に、カマドを有する10・15～19号住居跡は、17号住居跡を除き、その主軸方向はおおよそ北西方向である。中でも、主軸方向がほぼ同一方向である16・19号住居跡は、出土土器から、同時期である可能性がある。17号住居跡は、その主軸方向をほぼ東西方向に示しやや異例であるが、その要因については、将来的に中野遺跡全体のアウトラインを把握した上で解明されることであろう。

（3）主柱穴について

中野遺跡は、前述したように、旧石器時代から中・近世にかけての複合遺跡であるため、住居跡内にも他の時代のピットが存在する可能性がある。そして、これらのピットについては、数が多く、群を成す場合、例え意識的に調査を進めたとしても、明確にどの時代の所産であるかを見出すことは至難なことであろう。

古墳時代の住居跡には、住居各コーナーに4本の主柱穴が配されているのが一般的であるが、今回明らかに主柱穴をもつと考えられる住居跡は、10・14・16～19・21号住居跡の7軒であった。そのうち、主柱穴が4本で構成されるものは、10・14・16～18・21号住居跡で、19号住居跡については、各コーナーに大きめで深さをもつ4本の柱穴とそれらの間に一回り小さめの補助的な柱穴を1本ずつ配し、8本で主柱穴が構成されている。

主柱穴が8本で構成される住居跡は、市内では、今まで報告書として刊行された例にはないが、同遺跡内においては、すでに本地点の北側に隣接する第28地点（平成5年に発掘調査実施）から29・34号住居跡の2軒、第40地点（平成9年に発掘調査実施）から44号住居跡の1軒が検出されており、市内では今のところ、中野遺跡からの検出に限られるものである。なお、主柱穴が8本で構成される住居跡は、埼玉県浦和市一ツ木遺跡（谷井・戸田他1966）、大宮市茗花遺跡（田代1999）、行田市築道下遺跡（劔持2000）、東京都八王子市中田遺跡などから類例をみることができる。そして、これらの住居跡は、その規模が7mを超える概して大形住居であるという共通した特徴をもつ。

また、本遺跡では、特異な主柱穴をもつ例として、第28地点（平成5年に発掘調査実施）から、主柱穴が12本で構成される住居跡が1軒（26号住居跡）検出されている。この住居跡は、7.9×8.1mの大型のもので、柱穴は、各コーナーに4本とそれらの間に2本ずつ配されている。主柱穴が12本で構成される類例には、千葉県市原市潤井戸西山遺跡k－14号住居跡（一辺8.9m）がある（鈴木1986）。

（4）出入口施設について

出入口に関連する施設として、中野遺跡では第12地点の4号住居跡（尾形1992）を例にあげることができる。第12地点は、今回の調査地点から50mも離れていないすぐ北東に位置しており、この4号住居跡には、カマドに対向する南壁に付設し、凸堤と小ピットが検出されている。また、本地点の北側に隣接する第28地点（平成5年に発掘調査実施）からは、埼玉県富士見市打越遺跡（会田1978・1983）と同様にカマドに直交する壁際から出入口施設と考えられる凸堤と小ピットをもつ住居跡が検出されている。

しかし、今回の住居跡を観察すると、こうした凸堤と小ピットがセットで検出されるものはなく、次のように2タイプのものであった。

①小ピットはないが、凸堤が南壁から検出される住居跡（13号住居跡）

②凸堤を有さないが、小ピット単独で壁際から検出される住居跡（16・18・19号住居跡）

上記②の住居跡については、すべてカマドに対向する壁際から検出されるものである。小ピットの深さは、16号住居跡が21cm、18号住居跡が51cm、19号住居跡が20cmを測り、特に18号住居跡ものは垂直に掘られたものではなく、住居内側に向かって約80°の傾きをもつ、いわゆる斜向ピットである。

（5）カマドの基本構造について

今回検出された古墳時代後期の住居跡のうちカマドをもつ住居跡は、10・15～19号住居跡の6軒である。特に遺存状態の良いカマドは、今回の調査では検出されなかったが、ここではカマドの基本的な構造について考えることにする。

位　置－　カマドの付設位置は、17号住居跡の東壁を除き、10・15・16・18・19号住居跡はほぼ北壁である。さらに、北壁に付設されるものは、10・15号住居跡が中央からやや東寄りに偏って位置するが、16・18・19号住居跡については、ほぼ中央に位置している。東壁に付設される

17号住居跡については、東壁のほぼ中央に位置している。こうしたカマドの付設位置の違いが、一体何に起因するかは今のところ不明であるが、時間軸上で、切り合い関係にある17号住居跡と19号住居跡の両者のカマドが壁中央に位置することは単に時間差の問題では解決できない根拠と成りうるであろう。

袖　部－　今回検出されたカマド袖部の基盤として、すべて掘り方の段階で、両袖部ともにロームを掘り残し、馬蹄形に張り出しをもつタイプである。構築材として土器を使用するタイプは確認できなかった。現時点での市内における最古のカマドを有する住居跡は、中道遺跡19号住居跡（５世紀中葉）に比定され、このカマドの構造は、掘り方段階でまず壁溝を全周させ、その後、カマド構築部分の壁溝を埋め戻し、両袖部の基盤には 黒色土を基調とする土層を貼り、その上部に粘土を被覆させるタイプのものである（尾形1997）。

詳しい分析はまだ成されていないが、今回検出された袖部にロームを馬蹄形に掘り残すタイプは、６世紀に入り導入されたもので、当地では６世紀以降、袖部にロームを馬蹄形に掘り残すタイプとそうでないタイプの両者に分かれ、以後６世紀中葉までは併存し、６世紀後半には袖部にロームを馬蹄形に掘り残すタイプが主流になるものと考えられる。また、構築材として土器を使用するタイプは、市内では田子山遺跡（尾形1995）で検出される例に限られ、時期的には７世紀中葉以降に比定されることから、袖部にロームを馬蹄形に掘り残すタイプより後出タイプと言えるであろう。

天井部－　粘土範囲をみると10・18号住居跡のカマドには両袖部のみに被覆されており、15・16号住居跡のカマドには天井部にも被覆されている。17号住居跡については、粘土範囲が図示されていないが、図版４－６の写真では甕が掛け口に設置された状態で検出され、その周囲が粘土であることから、比較的に遺存状態が良好であったといえる。19号住居跡については、大部分が耕作による撹乱を受け詳細不明である。基本的にカマドの天井部及び掛け口の有無については、人為的な要因による取り壊しがあった可能性も十分考慮しなければならないが、遺存状態の良好な例も少なくないことや遺存状態の不良な例でも天井部のものと考えられる粘土が自然に住居内に流れ込んでいる状況を観察することができることから、大部分の例が住居の機能が停止したと同時にカマドの機能も停止したとみる方が自然であるように思われる。その場合、土器を設置させた状態で放置させた場合や土器を取りはずし持ち出した場合などで検出時の状況が異なるものではないかと考えられる。

燃焼部－　18号住居跡のみ確認できた。燃焼部の範囲は42×31㎝の楕円形を呈し、壁から燃焼部のほぼ中心までの距離は約80㎝であった。また、15・17号住居跡からは支脚が検出されているが、壁からの距離はそれぞれ25㎝、50㎝である。時期的にみると６世紀前葉に比定される17・18号住居跡のものは、６世紀後葉に比定される15号住居跡のものより、燃焼部が壁から離れた位置にある傾向にある。

煙道部－　煙道部に相当する壁への掘り込みの長さは、10号住居跡が10㎝、15号住居跡が40㎝、16号住居跡が５㎝、17号住居跡が15㎝、18号住居跡が５㎝であり、15号住居跡が幾分煙道部として意識できるが、市内での一般的なタイプは壁への掘り込みが20㎝未満の未発達なものである。市内で最古に比定される中道遺跡19号住居跡のカマドについては、煙道部が140㎝を測り、特異な例であろう。カマドの変遷を考える上で、東京都新宿区下戸塚遺跡（橋本1995）

を参考にすると、煙道部は初現のⅡ期（ＴＫ23～47）・Ⅲ期（ＴＫ43）では、まだ未発達で、Ⅳ期（湖西Ⅱ－６）で壁外へ約40cmの掘り込みが確認され、その後Ⅵ期で掘り込みが70cmと長くなるという分析が得られている。

埼玉県内のカマドについては、末木啓介氏により分析が行われ、カマドにみる地域差が明らかにされている（末木1994）。これによると、今回の煙道部の未発達のタイプは、Ｃ類に分類され、そのうちの壁の上部を若干切り込むＣ１類に比定される。末木氏はこのタイプをカマド導入段階から存在するものとし、「袖を掘り残して構築するなど画一的なカマド」としている。

また、前述した中道遺跡19号住居跡のような煙道部が長く伸びるタイプは、Ｅ１類に分類され、この類は「利根川の流域の群馬域に多くみられる傾向」があり、地域４とした小山川右岸の妻沼低地や地域７とした元荒川中流域の大宮台地北端部には、このタイプを主体とした遺跡が散見できる。おそらく、中道遺跡へ煙道部が長く伸びるタイプのカマドが導入される経路は、埼玉県北部の本庄・深谷市周辺を発端に元荒川流域の鴻巣市周辺（中三谷遺跡）へ下り、その後、桶川市・大宮市周辺（八幡耕地遺跡・茗花遺跡・Ｃ－１号遺跡）、富士見市・志木市（打越遺跡・中道遺跡）へとそのルートが想定される。しかし、神奈川県鎌倉市手広八反目遺跡（永井・松尾1984）のように５世紀後半の早い段階から、煙道部が長く伸びるタイプのものが存在することは、以上のような想定にやや疑問が持たれるのも事実である。今後、一元的なルートに固執せずに多角的な視点からもう一度検討する必要があろう。

（６）貯蔵穴について

貯蔵穴が検出された住居跡は、カマドをもつ住居跡と同じ10・15～19号住居跡の６軒である。貯蔵穴の基本構造は、第６表に示したが、これによると貯蔵穴の平面形態は、10号住居跡例が長方形を呈する他は、概して隅の丸い方形あるいは長方形である。規模については、一辺１ｍを超えるものは、10・19号住居跡であり、今回住居規模で最小の15・18号住居跡が短軸で60cmに満たないことから、ある程度、貯蔵穴の規模の大小は、住居跡の規模に比例すると考えてよさそうである。

細部構造の特徴で特筆すべき点は、以下の２点である。

①貯蔵穴の上端にテラス状の段が設けられている（10・19号住居跡）。

②貯蔵穴の周囲に凸堤がまわる（18号住居跡）。

特に、①と同様な例は深谷市城北遺跡（山川・大屋1995）、群馬県渋川市中筋遺跡（大塚1988）でも散見でき、実際に蓋材の確認されている城北遺跡では、「蓋を受ける段」として報告されている。

次にカマドと貯蔵穴の位置関係については、10・15～19号住居跡のすべてが、共通してカマドの右横から貯蔵穴が検出されている。しかし、厳密には、カマドのすぐ右横と住居コーナーに位置するものに分類することができる。この場合、カマドの位置が壁中央にある場合のみに言えることであり、カマドが中央から貯蔵穴のある側に偏って付設される10・15号住居跡については、カマド右横の住居コーナーに位置することになる。

カマドと貯蔵穴との距離は、10号住居跡が38cm、15号住居跡が20cm、16号住居跡が70cm、17号住居跡が64cm、18号住居跡が26cm、19号住居跡が22cmであった。この数値から言えることは、19号住居跡のように大形住居がカマドを有し、そのカマドが壁中央にある場合、貯蔵穴はカマドのすぐ右横に位置する

が、16号住居跡のような中形住居がカマドを有し、そのカマドが壁中央にあり、貯蔵穴が住居コーナーに位置する場合、カマドと貯蔵穴の距離はやや遠くなることである。しかし、この数値は、人がカマドの側に居ながらにして、貯蔵穴付近でも作業を行えるという至近距離であることから、カマドと貯蔵穴の位置には、対としての役割があるものと理解できよう。

結論としては、カマドと貯蔵穴の両者は、共通した用途を根底にその位置関係が成立したと考えられ、貯蔵穴がカマドの横に位置することが一般的になる6世紀以降、常に両者は密接な関係にあることを意味する。

最後に貯蔵穴の機能については、煮炊き施設であるカマドに密接な関係であることから、単純に当時の炊事場である空間内の一部に設置された、文字通りに「貯蔵」するための機能をもつものと筆者は今でも思っている。しかし、いったい何をどのように貯蔵したかは今のところ結論は出せないでいるのも確かである。報告書でもよく貯蔵穴内からの出土土器と掲載があり、今回の調査でも10・17・19号住居跡から貯蔵穴出土の土器が多数掲載されているが、いずれの例も、それらの土器が貯蔵穴内に置かれた状態で出土したのではなく、カマド周辺の床面近くから流れ込みの状態で出土した状況を示している。

（7）住居構造に関する設計について

前述したように、平面形については、不明の10・14号住居跡を除き、13・16号住居跡は長方形を呈するが、その他の15・17～19・21号住居跡は整った正方形である。このように、整った正方形の住居を構築するためには、あらかじめある程度の設計あるいは基準があったものと推測される。

そのため、第51図と第6表に今回検出された住居跡の平面プランの相関図と基礎データを掲載した。まず、第51図は住居跡の平面形と規模、そして主柱穴の配置の相関関係を知るために、住居跡の平面図をＸＹの座標軸に転写したものである。これによると平面形が正方形で主柱穴をもつ17～19号住居跡の3軒については、すべて住居の対角線上に主柱穴が配置されることが判明した。このことから、当初すべての住居跡の柱穴の位置は、この対角線上に対応することを優先に設定されているではないかと考えていた。しかし、長方形を呈する16号住居跡については、柱穴の位置が対角線上に設定されていないことから、以上の考えでは説明がつかないものと言える。

このことを解明するために、桐　国男氏の研究（桐1967・1975）を参照すると、住居跡の柱穴の位置の決定には、基本的に以下の2通りが考えられている。

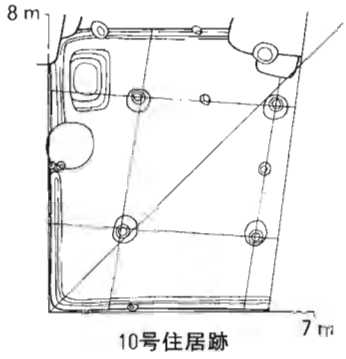
①対角線の交点から計画された半径で等距離の位置に設定する。

②中心線を基準に設定する。

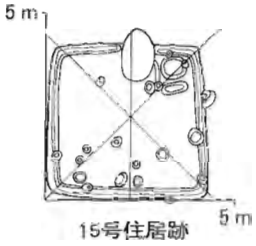
住居番号	平面形	規模 長軸	規模 短軸	主柱穴 構成	主柱穴 最深度	カマド 位置	カマド 主軸方位	カマド 支脚	貯蔵穴 位置	貯蔵穴 平面形	貯蔵穴 規模	貯蔵穴 深度	貯蔵穴 凸堤	出入口施設 位置	出入口施設 凸堤	出入口施設 ピット	出入口施設 ピット深度
10H	正方形？	不明	7.40	4本柱	1.08	北壁やや東寄り	N－12°－W	無	カマド右横	長方形	1.60×0.98	0.86		－	－	－	－
13H	正方形	4.78	4.54	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	－	南東壁？	有	－	－
14H	正方形？	不明	6.60	4本柱	0.76	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
15H	正方形	4.20	4.12	不明	－	北壁やや東寄り	N－21°－W	有	カマド右横	隅丸長方形	0.64×0.57	0.64	有	南壁（カマド対向）	無	有	－
16H	長方形	5.40	5.88	4本柱	1.07	北西壁ほぼ中央	N－37°－W	無	カマド右横	隅丸長方形	0.85×0.57	0.56	無	南東壁（カマド対向）	無	有	0.21
17H	正方形？	不明	7.84	4本柱	1.08	東壁ほぼ中央	N－82°－E	有	カマド右横	隅丸方形	0.92×0.80	0.91	－	－	－	－	－
18H	正方形	4.20	4.10	4本柱	0.96	北西壁ほぼ中央	N－27°－W	無	カマド右横	隅丸長方形	0.88×0.58	0.90	有	南東壁（カマド対向）	無	有	0.51
19H	正方形	10.24	10.07	8本柱	1.18	北西壁中央	N－40°－W	無	カマド右横	隅丸方形	1.40×1.28	0.87	無	南東壁（カマド対向）	無	有	0.20
20H	不明	不明	不明	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
21H	正方形？	不明	7.08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

（単位　m）

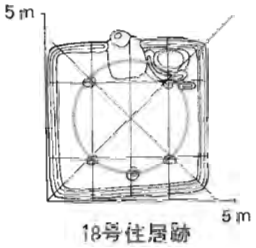
第6表　住居跡計測一覧



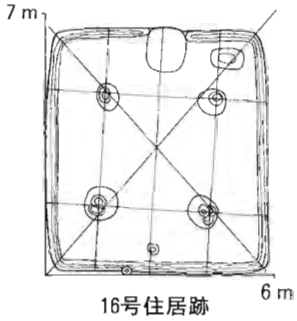
10号住居跡



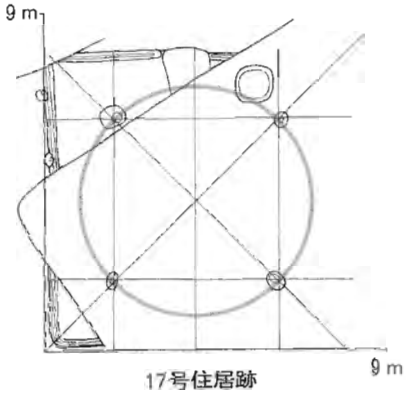
15号住居跡



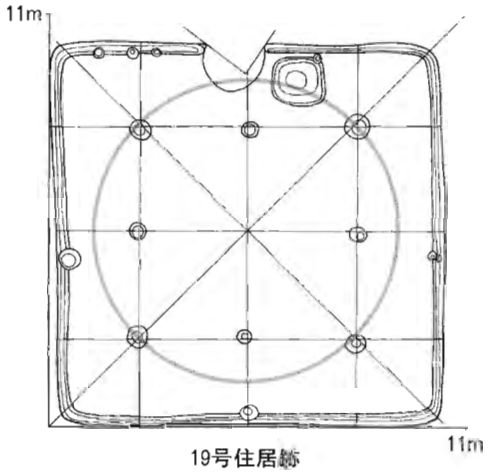
18号住居跡



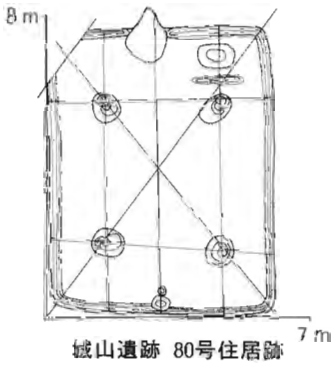
16号住居跡



17号住居跡



19号住居跡



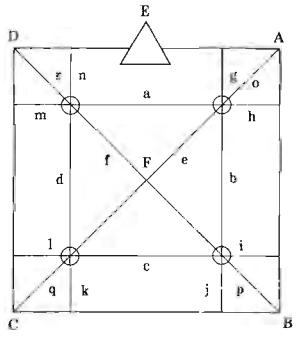
城山遺跡 80号住居跡

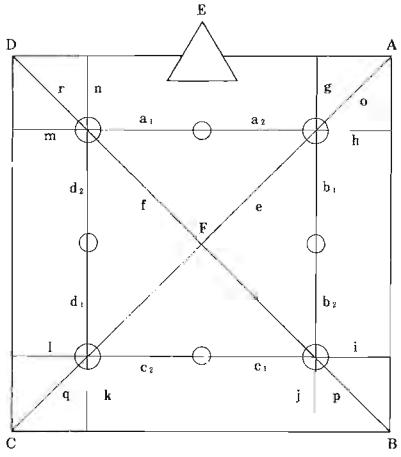
第51図　住居跡の平面プランと設計

椚氏によると、①については、「力学上もっとも安定した位置で、正確な正方形プランとあいまって、この家はかなり高い技術をもって建てられている」とし、②については、①の方法で構築された住居跡に比べ、「だいぶつくりが崩れている。四つの辺の長さは不揃いで、掘り方もみだれ、四柱穴は等間隔でありながら、住居の中心線とずれ、その上、角も直角でない」と両者の違いを説明している。

そこで、今回検出された住居跡を検討してみると、17～19号住居跡の3軒については、出入口に関連する小ピットとカマドの位置の対応なども含め、すべての点で正確性を有していることから、①の方法が使用された可能性が高いものと考えられる。特に19号住居跡については、10mを超える大形の住居跡でありながら、みごとな程まで正確に造られていることから、完成度の高い住居跡であると言ってもよいであろう。

長方形の16号住居跡の主柱穴が、正確に対角線上に位置しないことは、②の方法が採用されることにより、それぞれの長さの異なる住居跡の辺の等分を優先して柱穴の位置を決定したことで説明がつくであろう。この住居跡は、カマドと出入口に関連する小ピットを結ぶ中心線がやや北東方向に偏っていたため、柱穴の位置もその中心線に直角に振られ、住居全体のレイアウトではアンバランスなものになっ





	柱穴間の距離						柱穴－壁間の距離											
	a(1.2)	b(1.2)	c(1.2)	d(1.2)	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
10H	3.62	3.63	3.68	3.51	4.96	5.18	2.23	1.80	—	—	—	1.83	2.06	1.89	—	—	—	2.72
15H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16H	2.95	2.97	2.85	2.80	—	4.08	1.79	1.34	1.61	1.70	1.86	1.42	1.57	1.76	—	2.23	—	2.05
17H	4.34	4.33	4.39	4.41	6.25	6.10	—	—	—	—	—	1.62	1.83	1.69	—	—	2.21	—
18H	2.03	2.07	2.03	2.07	2.91	2.87	1.12	1.00	1.05	1.01	0.98	10.7	1.12	1.03	1.32	1.25	1.33	1.37
19H	(2.86. 2.86)	(2.87. 2.85)	(2.92. 2.77)	(2.77. 2.68)	8.00	7.96	2.25	2.19	2.32	1.99	2.27	2.12	2.35	2.40	2.87	2.86	2.90	3.20
21H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
80H	3.10	3.98	3.10	3.76	4.86	5.05	1.92	1.44	1.38	1.73	1.84	1.42	1.44	1.90	—	1.99	2.01	—

	住居跡一辺の長さ				対角線の長さ		カマドまでの距離		中心からの距離			
	A－B間	B－C間	C－D間	D－A間	A－C間	B－D間	A－E間	D－E間	F－A間	F－B間	F－C間	F－D間
10H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16H	6.25	5.64	6.21	5.35	8.16	8.36	2.44	2.91	4.10	4.28	4.06	4.08
17H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18H	3.92	3.84	3.99	3.88	5.56	5.49	2.00	1.88	2.77	2.70	2.79	2.79
19H	9.73	9.82	9.91	9.92	13.77	14.02	5.26	4.66	6.98	6.94	6.79	7.08
21H	—	—	—	7.07	—	—	2.65	4.42	—	—	—	—
80H	7.41	5.53	—	—	9.06	—	3.06	—	4.67	4.68	4.39	—

第7表　住居跡の細部構造の計測一覧

（単位：m）

ていると考えられる。そこで参考に、長方形プランをもつ志木市城山遺跡80号住居跡を第51図に掲載する。この住居跡は、7.62×5.94ｍの大型の住居跡で、主柱穴の位置が長方形プランに対応し、正方形の配置をしていないことから、①の方法が採用されていないことが理解できる。

ここで、前述①の方法が採用されたと考えられる19号住居跡について、その細部構造の計測値を示した第７表を参照し、具体的に数値の上で一定した基準があるかを検討したい。

なお、これらの数値については、住居跡という長い年月が経過し、相当遺存状態の悪いものを対象としたものと認識しなければならないため、実際の測定値が当時の計測値とは一致しない可能性がある。さらに、柱穴を実際に建てると想定した場合でも、まず柱穴の位置を計測し設定する段階と実際に柱穴を掘る段階、さらに柱穴を埋め込み建てる段階では当然、微妙な狂いが生じるのではないかと考えられる。そのため、第７表の数値が実際に使用された数値ではなく、そこには多少なりとも許容誤差を考える必要があることを付け加えることにしたい。

	尺	１尺の長さ（ｍ）
1	戦国尺	0.23
2	前　漢	0.233
3	新	0.231
4	後　漢	0.235
5	魏	0.243
6	晋	0.24
7	宋	0.247
8	梁	0.249
9	東　魏	0.348
10	隋	0.274
11	唐	0.301
12	高　麗	0.35

第８表　尺の種類と長さ
（椚1975　参照）

椚氏によると、対角線の交点から計画された半径で等距離の位置に設定するとあるが、実際に19号住居跡においては対角線の交点から半径４ｍ（ｅ・ｆの1／2）の位置に四隅の柱穴を設定したものと考えられる。各住居コーナーとその対角線を通る四隅の柱穴までの距離ｏ・ｐ・ｑ・ｒ（註２）と各柱穴間の距離は約2.9ｍと共通することから、第１段階では、対角線を重視し、約2.9ｍの基準値が用いられた可能性がある。また、各柱穴から壁までの距離ｇ～ｎが約2.2ｍを測定できることも約2.9ｍを基準に2.9ｍ÷２＝1.45ｍ、さらに1.45ｍ÷２＝0.725の２つの値をたすことにより導くことができ、ここで約0.7ｍという単位がより最小の基準値として浮上することになった。

椚氏は、基本尺についても言及されているが、この約0.7ｍという値から最小単位を割り出すには、単純に自然数で割り切れる２分の１と３分の１から導き出された答えが有力になるものと思われる。ちなみに、その２分の１は0.35ｍ、３分の１は0.2333…ｍである。しかし、ここで問題になるのは、これらに該当する基本尺が実際に存在するかであるが、第８表を参照してもらいたい。この表は中国・朝鮮の基本尺をまとめたものであるが、これを参照すると、まず、前者の0.35ｍについては、12の高麗尺に相当するが、後者については、その誤差から１～８のすべてに当てはまってもおかしくない。

そのため、もう一度第７表を参照し、以上のどの基本尺が適合するかを考えてみることにする。その結果、高麗尺0.35ｍを用いると、柱穴間の距離が0.35ｍ×８尺＝2.8ｍ、柱穴から壁までの距離が0.35ｍ×６尺＝2.1ｍ、３本の柱穴を通る住居の規模2.8ｍ（８尺）×２＋2.1ｍ（６尺）×２＝9.8ｍ（28尺）となり、住居跡一辺の長さについてもうまく適合するものと考えられる。例えば、５・６の魏・晋尺で考えた場合、魏尺では2.916ｍ（12尺）×２＋2.187ｍ（９尺）×２＝10.206ｍ（42尺）、晋尺では2.88ｍ（12尺）×２＋2.16ｍ（９尺）×２＝10.08ｍ（42尺）となり、これらの数値は、一見、第６表の19号住居跡の規模に一致するが、これはあくまでも最大規模を示したものであり基準のある数値ではない。

以上を要約すると、19号住居跡については、柱穴間の距離、壁から柱穴間の距離、対角線から各柱穴間の距離、貯蔵穴の位置のほぼ住居構造に関する大部分が、ある一定した基準により配置していること

を確認した。そして、そこから最小の基準値として0.35ｍが基本に用いられた可能性があることを導くことができた。すなわち、この値を基本尺と呼ぶのであれば、高麗尺35㎝に相当するものである。

尺の使用について、筆者はその可能性はあるものの実際に測定者による恣意的な要素が働くことにより、その値が多いに変動する危険があるものと考えているため、積極的に触れることは避けたかった。

しかし、今回の19号住居跡は10ｍを超える大形住居跡でありながら、細部にわたり規格性を有することから、単に住居跡というより、現代における住宅建設とも呼ぶべき、精密な設計がその根底にあったということをどうしても認識する必要があった。将来的に中野遺跡の総合的研究を行う上での基礎的データの１つとして大変貴重な資料と成り得るものと考えられる。

最後に、今回の分析を行うに当たり気が付いたことは、第51図の16号住居跡と城山遺跡80号住居跡の対角線Ｂ－Ｄ間上に２本の柱穴が存在することである。これは中心線を基準とする方法が採用されたとする長方形の住居跡についても１本の対角線を基準とする基本設定が併行して採用されたのではないかと推測されることである。今後、改めて検討したいものと考えている。

第２節　古墳時代後期の土師器の様相について

今回の調査で、住居跡間の切り合い関係によって新旧関係が明らかになっている古墳時代後期の住居跡は、15・16・17・19号住居跡の４軒である。これにより、17号住居跡→19号住居跡、17号住居跡→16号住居跡、15号住居跡→16号住居跡の関係が成立している。この新旧関係は、土器の変遷を考える上での基礎となっていることは重要である。

（１）器種構成と分類について（第52・53図）

古墳時代後期の土師器は、基本的に坏・坩・高坏・鉢・甕・甑形土器の器種をもって構成される。前段階の古墳時代前・中期に主要器種として存在した器台・壷形土器の２器種がここで欠落していることが器種構成での大きな変化として把握することができる。しかし、坩形土器の特に小型坩について、比田井克人氏は、「小型丸底坩の消滅期時期はＴＫ216型式の時間幅に中に定点をもっていくことができる」と分析され（比田井1988）、一般的にも５世紀後半に消滅し、６世紀までは存続しないものと考えられがちであるが、今回ヘラ磨き調整が粗雑化した精巧な作りでないもの（10Ｈ－４）が、６世紀中葉まで継続して存在することが判明した。

それぞれの器種における形態差については、今回大略であるが以下のように分類を行った。

１．坏形土器

第３章では坏・椀形土器として取り扱ったものであるが、ここでは便宜的に坏形土器とした。実測可能な土器は総数56個体である。また、今回の坏形土器の分類は、基本的に以前筆者が行った分類（尾形2000）を参考に修正したものである。

Ａ類　頸部にくびれを有し、器高の高いもの（18Ｈ－１、19Ｈ－14、20Ｈ－２・３）。

Ｂ類　口縁部が「Ｓ」字状を呈するもの。

１　器高の高いもの（17Ｈ－２）。

２　いわゆる比企型坏と呼ばれるもの。

ａ　初現段階の比企型坏である（17Ｈ－１）。

ｂ　ａがやや偏平化したもの（16Ｈ－３・４、19Ｈ－４）。

c　定型化した比企型坏である（19H－1・2・3・5）。

C類　底部から口縁部にかけて、大きく内湾するもの。

1　口径11～13cmを基本とするもの。

a　丸底を呈するもの（13H－2、14H－1、17H－3、20H－1）。

b　偏平なもの（16H－6）。

2　1より大型のもの（13H－3・4、18H－2、19H－13）。

D類　有段口縁を呈するもの。

1　口径12～14cmを基本とするもの。

a　TK23・47型式の須恵器坏蓋を模倣したもの（14H－2・3、17H－4）。

b　aが粗雑化したもの（19H－7・9）。

c　C類との折衷様を呈するもの（13H－1）。

2　口径15cm以上の大型もの（10H－1・2・3、15H－4、16H－1・2、17H－5）。

3　有段口縁の段が消去されたもの（15H－1・2・3・5・6、16H－5）。

4　須恵器坏身を模倣したもの（19H－8）。

E類　有段口縁が不明瞭で、稜をなすもの（19H－6・10・11・12、20H－4）。

F類　その他（15H－7）。本文中では壺形土器として取り扱っている。

2．坩形土器

今回の調査で検出された坩形土器は、10号住居跡から出土した1個体のみであった。口縁部は欠損していたが、ややつぶれた球形の体部と碁笥底状の底部をもつ小型坩である。

3．高坏形土器

高坏形土器の実測可能な土器は総数6個体と少なく、全形を知り得るものも乏しかった。

A類　長脚を基本とするもの。

1　坏部下端で屈曲し、口縁部が外反する深身のものである（13H－5）。

2　坏部が直線的に開くもの（14H－4）。

B類　短脚を基本とするもの。

1　坏部がA1類の基本を踏襲するもの（14H－5）。

2　坏部が有段口縁を呈するもの（10H－5）。

3　脚のみ（17H－6、19H－4）。

4．鉢形土器

今回の調査で検出された鉢形土器は、16号住居跡から出土した1個体のみであった。器形は体部上半に膨らみをもち、口頸部は「コ」字状を呈し、口唇上には沈線がまわる赤色土器である。この特徴は概して比企型坏に共通するものである。

5．甑形土器

実測可能な土器は総数8個体である。形態は口縁部形態を基準とし、さらに胴部形態の違いから、A～C類に大別し、5分類に細分した。

A類　複合口縁を呈するもの。

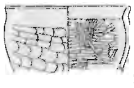
1　全体的に球状の胴部をもつもの（13H－6、20H－6）。

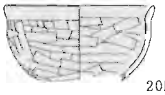
2　1より長胴を呈する（10H－9）。

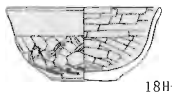
坏形土器

A類

19H-14


20H-2


20H-3


18H-1

B1類

17H-2

B2a類

17H-1

B2b類

16H-3

16H-4

19H-4

B2c類

19H-1

19H-2

19H-3

19H-5

C1a類

13H-2

14H-1

17H-3

20H-1

C1b類

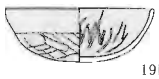
16H-6

C2類

13H-3

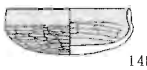
13H-4

18H-2


黒彩
19H-13

D1a類

14H-2


14H-3

17H-4

D1b類

19H-7

黒彩
19H-9

D1c類

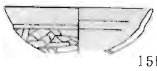
13H-1

D2類

10H-1

10H-2

黒彩
10H-3


15H-4

黒彩
16H-1

16H-2

17H-5

D3類

15H-1

15H-2

15H-3

黒彩
15H-5

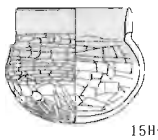
15H-6

16H-5

D4類

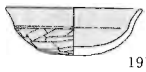
黒彩
19H-8

F類


15H-7

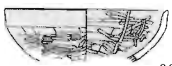
E類

19H-6


黒彩
19H-10

黒彩
19H-11

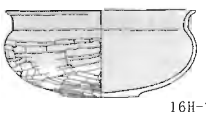
黒彩
19H-12


20H-4

坩形土器

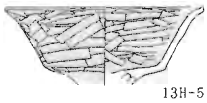
10H-4

鉢形土器


16H-7

高坏形土器

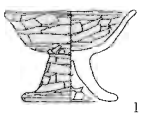
A1類


13H-5

A2類

14H-4

B1類


14H-5

B2類

10H-5

B3類

17H-6

19H-15

第52図　器種構成と分類1（1／8）

甑形土器

A1類

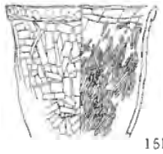
13H-6

20H-6

A2類

10H-9

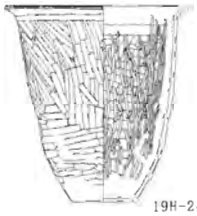
A3類


15H-12

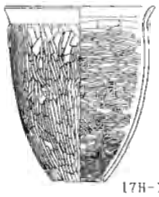
15H-13

18H-7

B類


19H-24

C類


17H-10

甕形土器

A1a類

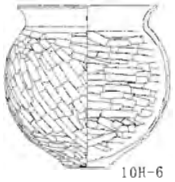
13H-7

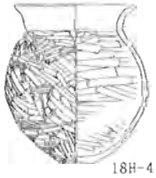
17H-7

A1b類

15H-8

A2a類


10H-6


18H-4

A2b類

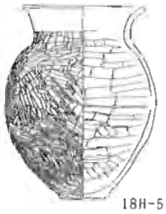
15H-9

17H-9

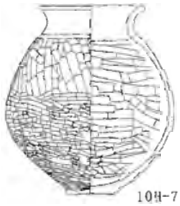
B1a類

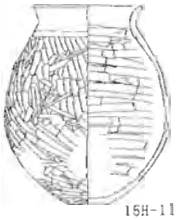
10H-8

B1b類


18H-5

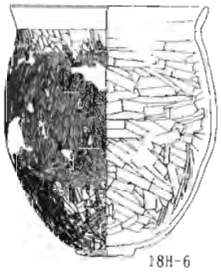
B1c類


10H-7


15H-11

17H-8

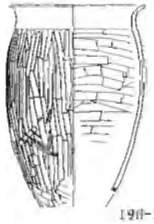
B2類

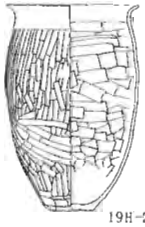

18H-6

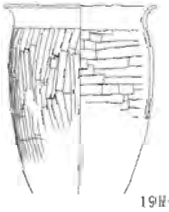
C1類

15H-10

C2類


19H-20


19H-21


19H-23

第53図　器種構成と分類2（1／12）

3　口縁部から底部にかけてゆるやかにすぼまる器形を呈する（15H－12・13、18H－7）。

B類　口縁部に輪積み痕を残すもの（19H－24）。

C類　単純口縁を呈するもの（17H－10）。

6．甕形土器

実測可能な土器は総数22個体である。形態は胴部形態を基準とし、さらに口縁部形態の違いから、A～C類に大別し、9分類に細分した。

A類　球状の胴部をもつもの。

1　小型のもの。

a　「く」の字口縁を呈するもの（13H－7、17H－7）。

b　口縁部が弓状を呈し外反するもの（15H－8）。

2　中型（一般型）のもの。

a　「く」の字口縁を呈するもの（10H－6、18H－4）。

b　「コ」の字口縁を呈するもの（15H－9、17H－9）。

B類　長胴の兆しがあるもの。

1　中型（一般型）のもの

a　「く」の字口縁を呈するもの（10H－8）。

b　「コ」の字口縁を呈するもの（18H－5）。

c　口縁部が弓状を呈し外反するもの（10H－7、15H－11、17H－8）。

2　大型のもの（18H－6）。

C類　長胴化したもの。

1　胴部最大径を中位にもつもの（15H－10）。

2　胴部最大径を上半にもつもの（19H－20・21・23）。

（2）出土土器の変遷について（第54・55図）

ここでは、今回の出土土器を前項の分類を基準とし、1～5期に区分し、その変遷を考えることにする。なお、実年代の比定については、1期－5世紀後葉、2期－6世紀前葉、3期－6世紀中葉、4期－6世紀後葉、5期－7世紀前葉である。

1期（5世紀後葉）－13・14号住居跡

この段階での器種構成は、坏・高坏・甑・甕形土器である。

坏形土器

C・D類で構成される。C類はすべて底部が丸底化している。内外面ていねいにヘラ磨き調整が施されたもの（13H－2）、ハケ目痕を顕著に残すもの（13H－4）が主体となる。ヘラ削り痕を顕著に残すもの（14H－1）は後出タイプであろう。

D類ではこの段階からTK23・47型式の須恵器坏蓋を模倣した赤色系のD1a類が出現している。D1c類（13H－1）は坏形土器で最も古いタイプとするC類と須恵器の要素である有段が融合することにより誕生した土器と考えられる。

高坏形土器

A・B類で構成される。長脚を基本とするA1類（13H－5）・A2類（14H－4）が前段階から踏

襲するものとして理解できるが、Ｂ１類とする短脚のもの（14Ｈ－５）が出現する時期でもある。調整技法としては、軽いナデ調整が器面全体に施されることを特徴とする。

甑形土器

胴部が球状を呈するＡ１類（13Ｈ－６）のみで構成される。この土器は胴部下半にヘラ削り調整の技法が採用されているが、胴部内外面には顕著にハケ目痕を残している。口縁複合部は幅広で、その指頭押捺痕からしっかりと貼り付けられていることがわかる。

甕形土器

口縁部が「く」字状を呈する小型球胴甕Ａ１ａ類（13Ｈ－７）のみで構成される。内外面にはヘラナデが施されるが、甑形土器同様にハケ目調整が併用されている。

２期（６世紀前葉）－17・18・20号住居跡

この段階での器種構成は、坏・甑・甕形土器である。

坏形土器

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ類で構成される。Ａ類が存在しているが、この類の初現については、中野遺跡３号住居跡例（佐々木・尾形1985）から市内では５世紀後葉まで遡ることが確認されており、20Ｈ－２はそれに比較して、外面体部がヘラ磨き調整ではなく、ヘラナデに変化していることを指摘できる。

Ｂ類は器高の高いＢ１類（17Ｈ－２）とＢ２ａ類（17Ｈ－１）が存在する。このうち、Ｂ２ａ類については、口径13cm未満の初現段階の比企型坏に相当するものである。

Ｃ類は前段階にみられたヘラ削り痕を顕著に残すもの（17Ｈ－３）のみ存在する。

Ｄ類はすべて赤色系土器である。Ｄ１ａ類は前段階ではヘラ磨き調整によりていねいに仕上げられたものであったが、この段階ではヘラ削り痕を顕著に残す粗雑なもの（17Ｈ－４）に変化する。Ｄ２類は口径15cm以上の大型品で、この類は須恵器坏蓋の大型化が顕現するＭＴ15型式の模倣坏と考えられる。17Ｈ－５は初現段階の比企型坏と胎土・調整が類似する堅緻な作りの土器である。

Ｅ類は基本的に有段口縁の有段が退化した無彩系土器と認識しているため、20Ｈ－４は５期以降のものとは別の出自と考えられる。赤色系土器であることから、Ｃ類とＤ類の中間型である可能性がある。

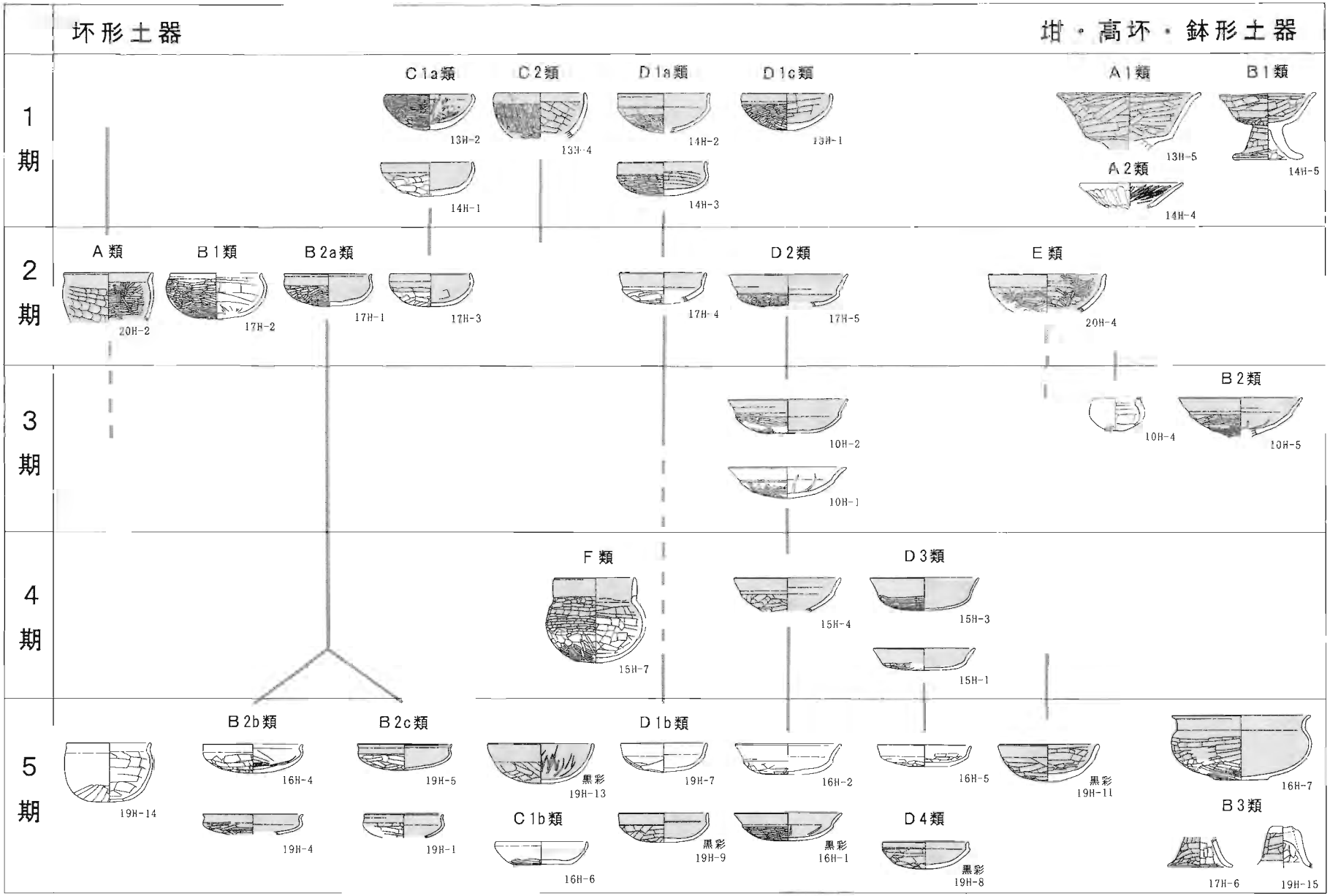
甑形土器

Ａ・Ｃ類で構成される。Ａ類のうちＡ１類は13Ｈ－６から直接系譜があるものと思われる20Ｈ－６が存在している。調整面ではハケ目調整ではなく、ヘラナデ主体による技法に変化していることに注目される。また、口縁複合部の作りは指頭による押捺が弱いものになっている。Ａ３類は口縁部から底部にかけてゆるやかにすぼまる器形のもので、18Ｈ－７はヘラ磨き調整を思わせるような細長いナデ調整が施される堅緻な作りのものである。

Ｃ類については、今まで甕形土器の長胴化が完成する６世紀後葉から７世紀前葉の時期に出現するものと考えられていたが、この段階から確認されるのは市内では初めてである。作りは精巧なもので、ヘラナデ後再度ヘラ磨き調整による仕上げが施されている。

甕形土器

Ａ・Ｂ類で構成される。Ａ類のうちＡ１ａ類は口縁部が「く」字状を呈する小型球胴甕（17Ｈ－７）で、この土器は外面及び口頸部内外面に赤彩が施される特異な土器と言える。Ａ２ａ類では18Ｈ－４が存在するが、口縁部の「く」の字状の形態は古いタイプのものに比べ、直立気味に間延びしている傾向



第54図　坏・坩・高坏・鉢形土器の変遷（1/8）

甕形土器　　甕形土器

1期
A1類
13H-6
A1a類
13H-7

2期
20H-6
A3類
18H-7
C類
17H-10
17H-7
A2a類
18H-4
A2b類
17H-9
B1b類
18H-5
B1c類
17H-8
B2類
18H-6

3期
A2類
10H-9
10H-6
B1a類
10H-8
10H-7

4期
15H-12
A1b類
15H-8
15H-9
15H-11
C1類
15H-10

5期
B類
19H-24
C2類
19H-21

第55図　甕・甕形土器の変遷（1／14）

にある。口縁部が「コ」の字状を呈するＡ２ｂ類はこの段階からの出現であろう。

Ｂ類は胴部が卵形状を呈し、Ａ類に比べ長胴化の兆しがあるもので、口縁部形態としては、「く」の字状のＡ２ｂ類が欠落しているが、新たに弓状を呈するＢ１ｃ類が出現する。Ｂ２類は大型のもので、今回は18Ｈ－６の１点が出土するのみである。この段階でのＢ類の調整は、ヘラナデが併用されるが、未だヘラ磨き調整が主体であるものと言える。

３期（６世紀中葉）－10号住居跡

この段階での器種構成は、坏・坩・高坏・甑・甕形土器である。

坏形土器

Ｄ２類の盛行の時期である。この段階には赤色系土器（10Ｈ－２）・黒色系土器（10Ｈ－３）・無彩系土器（10Ｈ－１）という異系統の土器が共存する。形態的には前段階のものに比べ、口縁部が開き気味になるため、飛躍的に大型化する傾向にある。

坩形土器

10Ｈ－４のみ存在する。調整については、遺存状態が悪く明瞭に観察できなかったが、ハケ目痕を残すことから、ていねいにヘラ磨き調整が施される５世紀代のものに比べ粗雑品といえる。

高坏形土器

坏部が坏形土器Ｄ２類と同じ形態を呈するＢ２類（10Ｈ－５）のみが存在する。この土器は須恵器無蓋高坏の模倣品ということも可能であるが、むしろ、この段階が坏形土器Ｄ２類の盛行時期であるために高坏形土器にもこの形態が取り入れられたと判断した方が自然であろう。

甑形土器

Ａ２類のみで構成される。この類は市内でも類例がないことから、Ａ１類からＡ３類へ、あるいはＡ３類からＣ類へと変化する中で誕生した過渡的なタイプと思われる。

甕形土器

Ａ・Ｂ類で構成される。Ａ２ａ類の10Ｈ－６は前段階の直立気味に間延びした口縁部形態を受け継いでおり、この段階を境に「く」の字状のしっかりした口縁部をもつものは一気に衰退する。

Ｂ類では、口縁部が「く」の字状を呈するＢ１ａ類（10Ｈ－８）、口縁部が弓状を呈するＢ１ｃ類（10Ｈ－７）が存在する。ここで言えることは、Ｂ１ａ類には伝統的な技法であるハケ目調整が施されているのに対し、Ｂ１ｃ類ではヘラナデが採用されていることから、変化の傾向はＢ１ａ類→Ｂ１ｃ類であることが理解できる。

４期（６世紀後葉）－15号住居跡

この段階での器種構成は、坏・甑・甕形土器である。

坏形土器

Ｄ・Ｆ類で構成され、Ｄ２類はヘラ磨き調整に代わりヘラナデが施される赤色系土器（15Ｈ－４）が存在する。Ｄ３類はＤ２類の有段が消去されたもので、器高も低く偏平な土器である。この類にも赤色系土器（15Ｈ－１・２・３）・黒色系土器（15Ｈ－５）・無彩系土器（15Ｈ－５）が存在する。

Ｆ類は15Ｈ－７である。この土器の胎土・調整は３期で新たに出現するＤ２類の中に類似するものがあることから、同一場所で生産された可能性がある。

甑形土器

Ａ３類（15Ｈ－12・13）のみが存在する。この段階のものは２期のものに比べ、全体にずっしりした重量感が無く、ヘラナデ主体の調整技法であると言える。

甕形土器

Ａ・Ｂ・Ｃ類で構成される。Ａ類のうちＡ１ｂ類は口縁部が弓状に変化した小型球胴甕（15Ｈ－８）である。Ａ２ｂ類はこの段階が最終形態のものと思われる。15Ｈ－９は胴部上半の膨らみが弱くなっている。

Ｂ類については、「く」の字状・「コ」の字状の口縁部を呈するものが姿を消し、口縁部が弓状を呈するＢ１ｃ類のみに収束する。

Ｃ類のような口縁部が弓状を呈し、長胴化の完成したものはこの段階からの出現と考えられる。Ｃ１類である15Ｈ－10は幾分胴部中位に膨らみを残すが、Ｂ類の形態とは一線を画すことが可能であろう。また、この土器は３期の10Ｈ－８に調整技法が類似することから、Ｂ類→Ｃ類へと直接変化した状況を読み取ることができる（注３）。

５期（７世紀前葉）－16・19号住居跡

この段階での器種構成は、坏・鉢・甑・甕形土器である。

坏形土器

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ類で構成される。Ａ類とした19Ｈ－14は胎土・調整が無彩系土器Ｅ類に類似することから、基本的にはＥ類のバリエーションの中で把握できるものである。

Ｂ類はＢ２ｃ類とした定型化した比企型坏が出現する時期であるが、口縁部内面に沈線をもたないＢ２ｂ類も直接初現段階の比企型坏Ｂ２ａ類から変化したものとして残存している。19Ｈ－１は推定口径11.5cmと小型化傾向にあるもので、やや後出タイプである。

Ｃ類のうちＣ２類の19Ｈ－13は黒色系土器で、基本的にはＣ類には該当しないものであろう。純粋なＣ類については、古墳時代後期では最古形態のもので、一般的に本稿３期以降には姿を消すと考えられる。Ｃ１ｂ類についても基本的にはＣ類には該当しないものであろう。16Ｈ－６は無彩系土器であることから、Ｅ類に属するものであろうか。

Ｄ類では、赤色系土器が欠落する段階である。Ｄ１ｂ類では黒色系土器（19Ｈ－９）・無彩系土器（19Ｈ－７）、Ｄ２類では黒色系土器（16Ｈ－１）・無彩系土器（16Ｈ－２）、Ｄ３類では無彩系土器（16Ｈ－５）が存在する。Ｄ４類の19Ｈ－８は今回の調査で唯一検出された須恵器坏身を模倣したもので、黒色系土器に属する。

Ｅ類の出現の時期は基本的にこの段階と考えられる。この類はＤ類の有段が退化した無彩系土器で、「砂粒・金雲母を多く含む胎土やヘラ削り痕を顕著に残す特徴など当地域の甑・甕形土器に類似」（尾形2000）する在地色の強い土器である。

鉢形土器

16Ｈ－７のみ存在する。この土器は口縁部内面に沈線がまわることや胎土・調整のすべての点において、比企型坏の特徴を有するものである。

甑形土器

Ｂ類（19Ｈ－24）のみが存在する。この土器はＡ類の特徴である複合口縁が退化し、痕跡として口縁

部直下に輪積み痕を残したものと思われる。調整技法ではこの段階から、ヘラナデがハケ目調整と判断しづらかったささら状を呈するものではなく、全体にボンヤリと柔らかい膜がかかったようなもの（スリップか）へ大きく変化し、胴部下半には明瞭なヘラ削り痕を残すようになる。

甕形土器

19号住居跡出土のものすべてがC２類であることから、この段階に甕形土器はC２類に収束され統合されるものと考えられる。調整技法については、この段階以降、甑形土器と類似するものと言えるが、内面を観察すると、甑形土器ではヘラナデ後縦方向に細長い磨き調整が施されるが、甕形土器では磨き調整が一切見られないことから、小破片での器種判別の基準に成りうるであろう。さらに、この甑形土器の内面に見られるヘラ磨き調整は、古段階ものが「密」で、新段階のものが「疎」であるという分析が報告されている（佐々木・尾形1988）。

（３）主要器種にみられる調整技法（図版20～22）

最後に主要器種にみられる調整技法について触れることにする。土器の調整技法については、一般的にその調整痕の観察から、当時使用した調整工具を特定し、その技法が再現されるものと思われる。そのため、可能性としては、観察者による観点の相違により、ある者がヘラ削り調整としたものが、他の者がヘラナデ調整とすることも有り得るであろう。そして、その結論として、報告書の土器観察表や土器の実測図として記載された場合、しばしば、我々はそれを疑いも無く採用することになる。しかし、本来はこうした調整技法の名称・概念は共通した意識の中で捉えなくてはならないものと痛感するのであるが、製作過程における成形及び調整についての理解の仕方にも各研究者に違いがあるなど簡単に解決できるものではない。

ここでは、特に坏・甑・甕形土器の主要器種の土器にみられる代表的な調整痕を写真図版で紹介することにより、視覚的に調整痕をイメージし、複雑で多様な５世紀から７世紀にかけての土器の調整技法を共通した意識の中で理解したいものと考える。

坏形土器（図版20－１～６）

○ハケ目＋ヘラ磨き（図版20－１）

粗いハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。この技法は、関東地方南部では弥生時代から連綿と使用されてきたいわば伝統的な技法である。古墳時代では、坏・壺・甕形土器の器種に採用され、今回の土器では１期までの特徴と言える。

○ヘラ磨き＋ヘラ削り（図版20－２）

口縁部から体部下半にかけて横方向のヘラ磨き調整が施されるが、底部を中心に僅かにヘラ削り痕が残る。この技法は、坏形土器の出現期と考えられる５世紀前葉には底部のヘラ削り痕は見られず、ヘラ磨き調整のみであるため、基本的には５世紀中葉以降に採用されたものであろう。そして、この時期は須恵器の生産開始直後に比定されることから、ヘラ削り調整は須恵器の製作技術が直接土師器に導入されたのではないかと考えられる。

○未調整部分＋ヘラ削り（図版20－４）

在地化した無彩系土器に一般的に見られる特徴である。ヘラ削り痕は底部を中心に施され、口縁部直下には成形痕がそのまま未調整部分として残る。そのため、未調整部分には多くの指紋が観察される。

○暗文（図版20－５・６）

調整技法ではないが、坏形土器の内面に施文された暗文である。古墳時代後期における暗文土器は、ヘラ磨き調整が衰退する5世紀中葉にほぼ一致して出現する。このことから、ヘラ磨き調整が衰退し、間隔の開いたものに変化する中で装飾効果をもった暗文が誕生したのではないかと考えられる。

甕形土器（図版20－7・8、図版21－1～8）

○ハケ目＋ヘラ削り（図版20－7）

胴部全体に縦あるいは斜位方向にヘラ削り調整が施されるが胴部上半にハケ目痕が残る。この技法は、図版20－2の坏形土器のヘラ磨き調整をハケ目調整に置き換えて考えることができる。

○ハケ目＋ヘラ磨き（13H－7）

図版20－1の坏形土器と同様に、弥生時代から連綿と使用されてきたいわば伝統的な技法である。

○ヘラ磨き（図版21－1）

古墳時代後期のヘラ磨き調整は、特に6世紀以降、幅が広く粗いものに変化するため、弥生時代から古墳時代前期のものと容易に判別が可能である。

○ヘラ削り（図版21－2）

幅の広いヘラ削り痕が観察できる。胎土中に含まれる砂粒の動きにより、ヘラ削りの方向を特定することが可能である。坏形土器同様に6世紀以降の特徴と言えることができる。

○ヘラナデ（ささくれ状）（図版21－3）、ヘラナデ（ささくれ状）＋ヘラ磨き（図版21－4）

このヘラナデは、一見ハケ目痕とは判別が難しいものである。おそらく、調整工具の木口部分がささくれ状を呈しているためにこうした細かい筋が残るものと思われる。この技法は、ハケ目・ヘラ磨きの技法が衰退する5世紀中葉から出現し、ヘラ削り・ヘラナデの技法が本格化する前の6世紀中葉まで多く使用されるものである。この調整痕の実測には細心の注意が必要であろう。

○口縁部横ナデ＋ヘラナデ（スリップか）（図版21－5・6）

このヘラナデは、前述のささくれ状のものとは区別して考えなくてはならない。この技法は甕形土器の長胴化が完成した6世紀後葉の段階に採用されるもので、ヘラ削りとの組合わせで使用される。写真により胴部にボンヤリと薄い膜状のものが貼られたような痕跡が観察されるのが解るであろう。こうした器厚の薄い土器の最終仕上げの段階では、粘土の乾燥度が進行しているため、単にナデられた場合には、粘土との摩擦が働きこのような痕跡にはならないものと思われる。ここでは、スリップの可能性があると考えたいが、調整工具にただ水分を含ませただけでもこのような痕跡になるものと思われるため、詳しい分析は今後の課題としたい。

○ヘラナデ（横方向）（図版21－8）

甕・甑形土器の内面の調整には一般的な技法である。弥生時代の甕形土器の胴部内面には、すでにこの技法が採用されている。

甑形土器（図版22－1～8）

○複合口縁（指頭押捺）＋ハケ目（図版22－1）

口縁複合部には明瞭な指頭押捺痕と胴部には粗いハケ目痕が観察される。特に、口縁部の指頭押捺については、図版22－3の土器の口縁複合部と比較すると横ナデが施されていない。おそらく、6世紀以降は口縁複合部には横ナデが施され、指頭押捺は不明瞭になるものと思われる。

○ヘラナデ（ささくれ状）（図版22－3・7）

甑形土器にも甕形土器（図版21－3）と同様な技法が使用されている。

○ヘラナデ＋磨き（縦方向）（図版22－6）

横方向のヘラナデ後縦方向に間隔の開いた細長い磨きが施される。この技法は甕形土器にのみ採用される技法で、7世紀前葉の出現であろう。

註

（1）21号住居跡については、平成4・5年度に発掘調査が実施された第28地点から、住居南半部が検出されている。今回の報告では図示していないが、調査結果を参考にした。

（2）rについては3.20mであるが、この差は特に対角線A－C間の基準を重視した結果により、B－D間に若干のしわ寄せが生じたものと考えられる。

（3）以前、筆者は城山遺跡の報告（佐々木・尾形1988）の中で、今回の甕形土器B類からC類への変化の傾向を説明した際、ハケ目＋磨き（的）手法とヘラ削り＋ナデ手法のものが、推移的には前者→後者の傾向を示すものの、この変化は伝統手法の中では理解できないことから、異系統のものと想定した。しかし、今回2期の甕形土器B類の調整技法にはハケ目調整・ヘラナデ・ヘラ磨き調整・ヘラ削りが複雑に併用されていることから、大きく「ハケ目＋磨き」手法から「ヘラ削り＋ナデ」手法に変換する前提において、生産者が弥生時代から長い間採用し続けた伝統技法と須恵器製作により新しく取り入れた技法の狭間でその形態の決定を含め、非常に混沌とした状況が把握できる。このことから、前述した異系統という想定は間違いであると現状では考えているが、製品レベルでの胎土・焼成技術などといった根本的な違いを見い出すことができることから、こうした変化の根底には土師器全器種を含めた上での生産体系に一大改革が行われたと考えるべきあろう。

［引用・参考文献］

会田　明　1998『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集

1983『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集

大塚昌彦　1988『中筋遺跡　第2次発掘調査概要報告書』渋川市発掘調査報告書第18集　渋川市教育委員会

尾形則敏　1992「第3章　中野遺跡第12地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集　志木市教育委員会

1995「第3章　田子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集　志木市教育委員会

1996「第7章　まとめ」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集　志木市教育委員会

1997「第7章　中道遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集　志木市教育委員会

1999a「第11章　まとめ」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集　志木市教育委員会

1999b「いわゆる比企型坏の編年基準について」『あらかわ』第2号　あらかわ考古談話会

2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）」『あらかわ』第3号　あらかわ考古談話会

椚　国男　1975「竪穴住居の設計計画（上）」『考古学雑誌』第52巻第4号　日本考古学会

1975『古墳の設計』株式会社　築地書館

劔持和夫　2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

坂口　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要－4－』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐々木保俊・尾形則敏　1985「第2章　中野遺跡第2地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点　中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集　志木市遺跡調査会

1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　志木市遺跡調査会

笹森健一　1978『川崎遺跡（第3次）・長宮遺跡発掘調査報告書』郷土史料第21集　上福岡市教育委員会

末木啓介　1994「埼玉県におけるカマド導入期の様相」『研究紀要』第11号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

鈴木英啓　1986『潤井戸西山遺跡』市原市文化財センター調査報告書第9集　財団法人市原市文化財センター

田代　治　1999『上加遺跡　中野林袋遺跡　茗花遺跡　指扇下戸遺跡』大宮市遺跡調査会報告書第65集　大宮市遺跡調査会

谷井　彪・戸田　健他　1966『南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集－第1次調査－　一ツ木遺跡』浦和市教育委員会

永井正憲・松尾宣方　1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広八反目遺跡発掘調査団

橋本博文　1995「2．下戸塚遺跡の古代の遺構と集落の変遷について」『下戸塚遺跡の調査　第3部　古代編』早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編　早稲田大学

比田井克仁　1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号　史館同人

村田健二　1992『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

山川守男・大屋道則他　1995『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

図　　版

1．調査区近景

2．確認調査風景

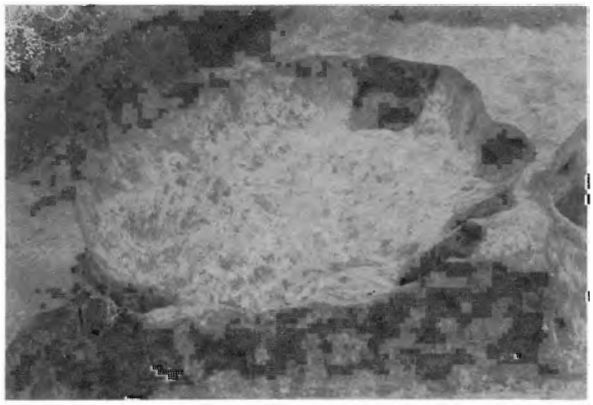
3．1号住居跡

4．4号土坑遺物出土状態

5．23号土坑遺物出土状態

6．27号土坑遺物出土状態

7．28号土坑



8．29号土坑

1．2号炉穴

2．3号炉穴遺物出土状態

3．4号炉穴

4．4号住居跡

5．10号住居跡

6．10号住居跡遺物出土状態

7．10号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

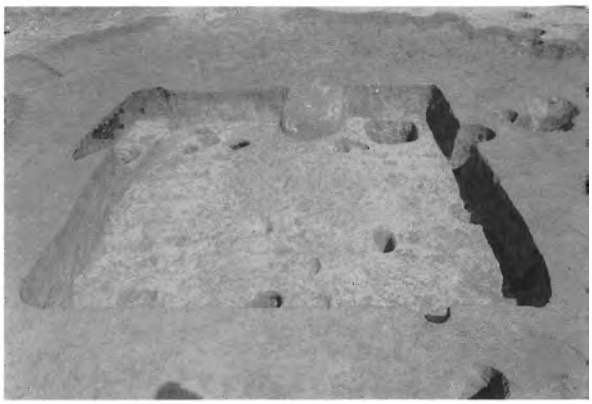
8．10号住居跡貯蔵穴

1．13号住居跡遺物出土状態

2．13号住居跡遺物出土状態

3．14号住居跡

4．14号住居跡遺物出土状態



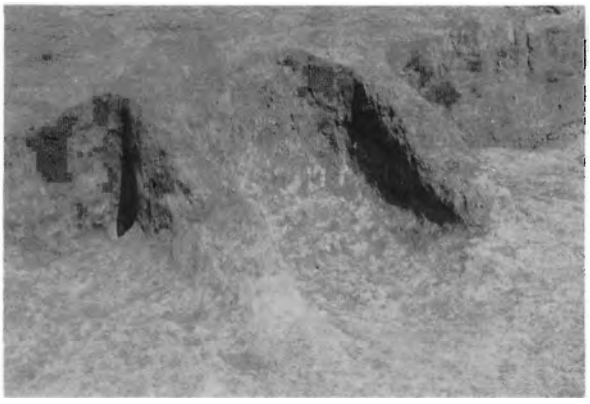
5．15号住居跡

6．15号住居跡カマド

7．15号住居跡遺物出土状態

8．15号住居跡遺物出土状態

1．16号住居跡



2．16号住居跡カマド

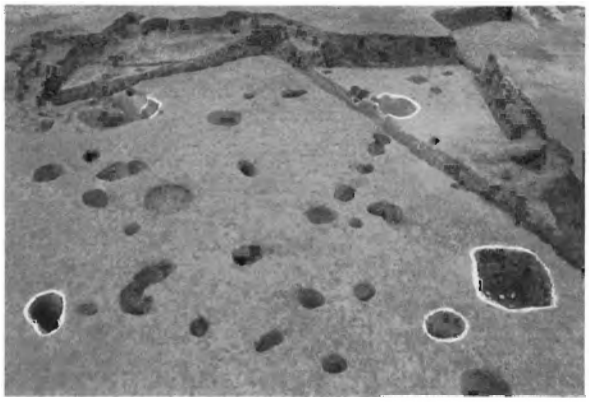
3．16号住居跡遺物出土状態

4．17号住居跡遺物出土状態

5．17号住居跡カマド遺物出土状態

6．17号住居跡カマド

7．17号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



8．17号住居跡

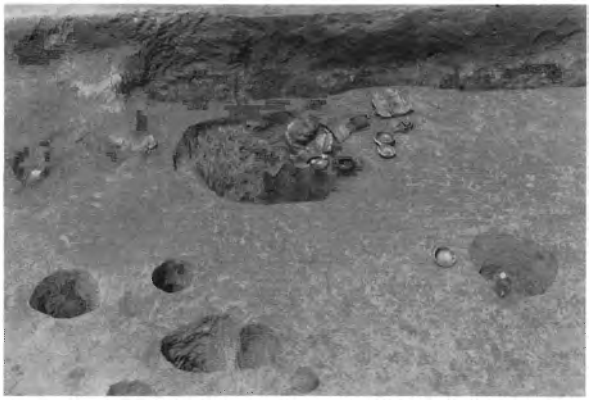
1．18号住居跡遺物出土状態

2．18号住居跡

3．18号住居跡カマド

4．18号住居跡遺物出土状態

5．19号住居跡発掘風景



6．19号住居跡遺物出土状態

7．19号住居跡遺物出土状態

8．19号住居跡遺物出土状態

1．19号住居跡遺物出土状態

2．19号住居跡遺物出土状態

3．19号住居跡遺物出土状態

4．19号住居跡貯蔵穴

5．19号住居跡

1．20号住居跡遺物出土状態

2．21号住居跡

3．5～7号土坑

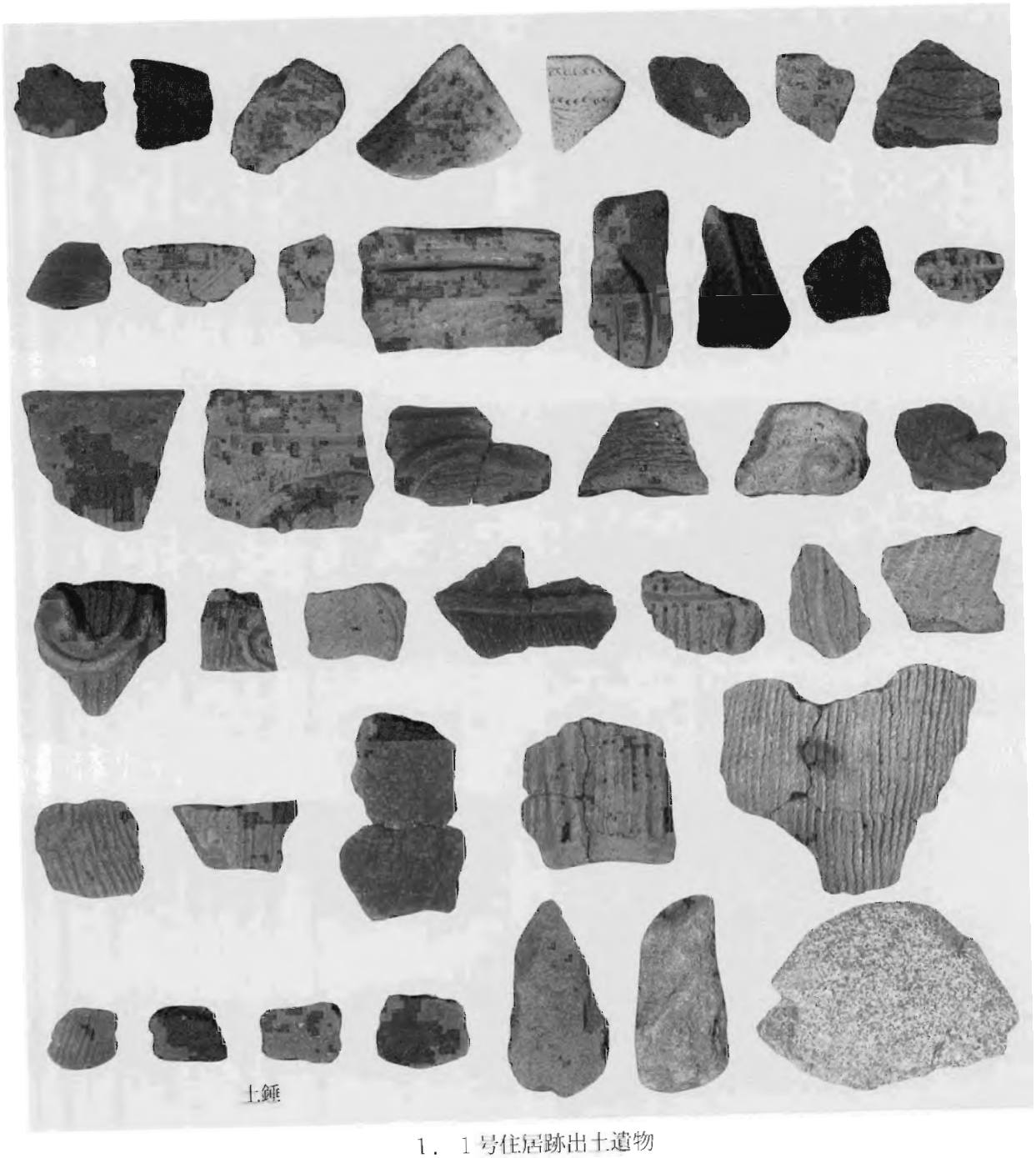
4．9～11号土坑

5．12号住居跡、12～15号土坑

6．18～20号土坑

7．21号土坑遺物出土状態

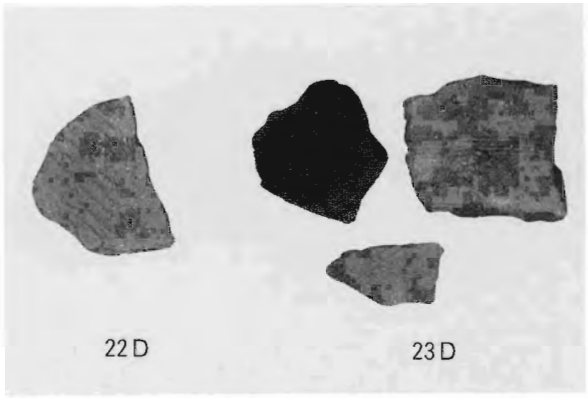
8．21号土坑



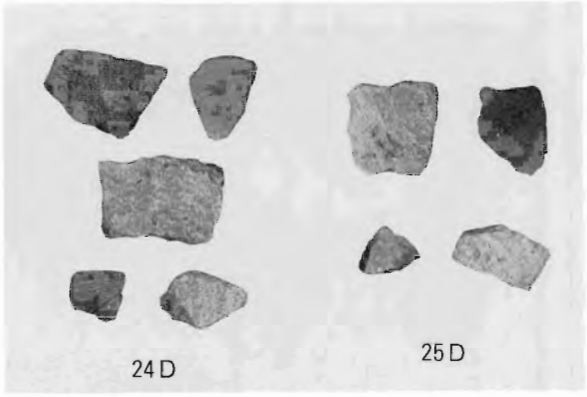
1．1号住居跡出土遺物

2．1号住居跡出土石器

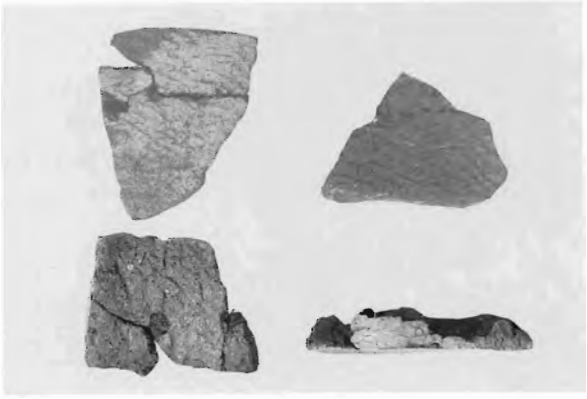
3．4号土坑出土遺物



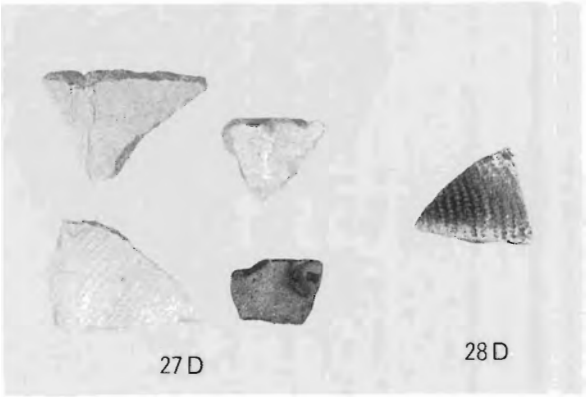
1．22・23号土坑出土遺物



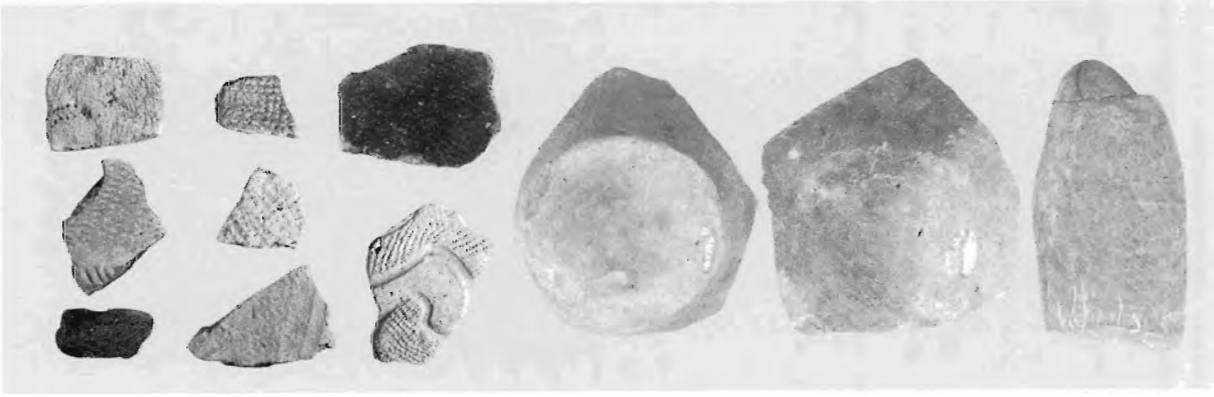
2．24・25土坑出土遺物



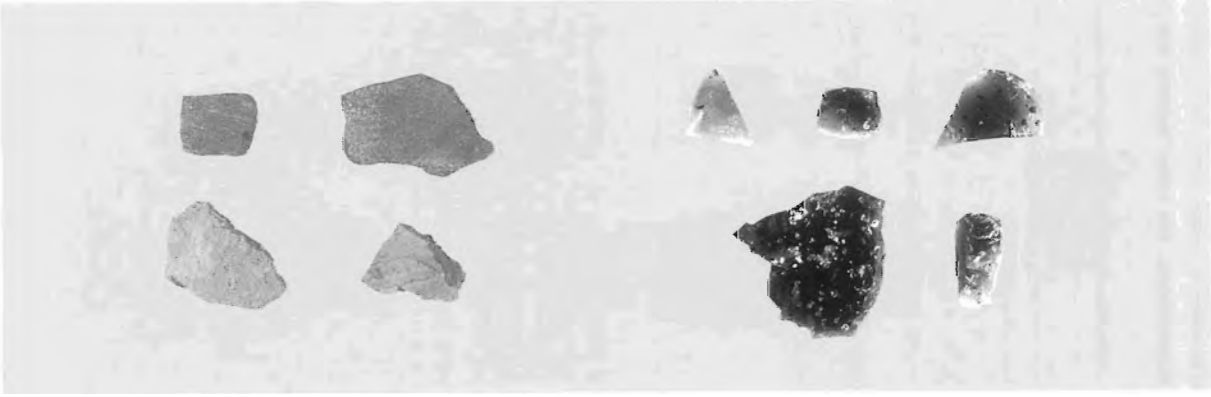
3．26号土坑出土遺物



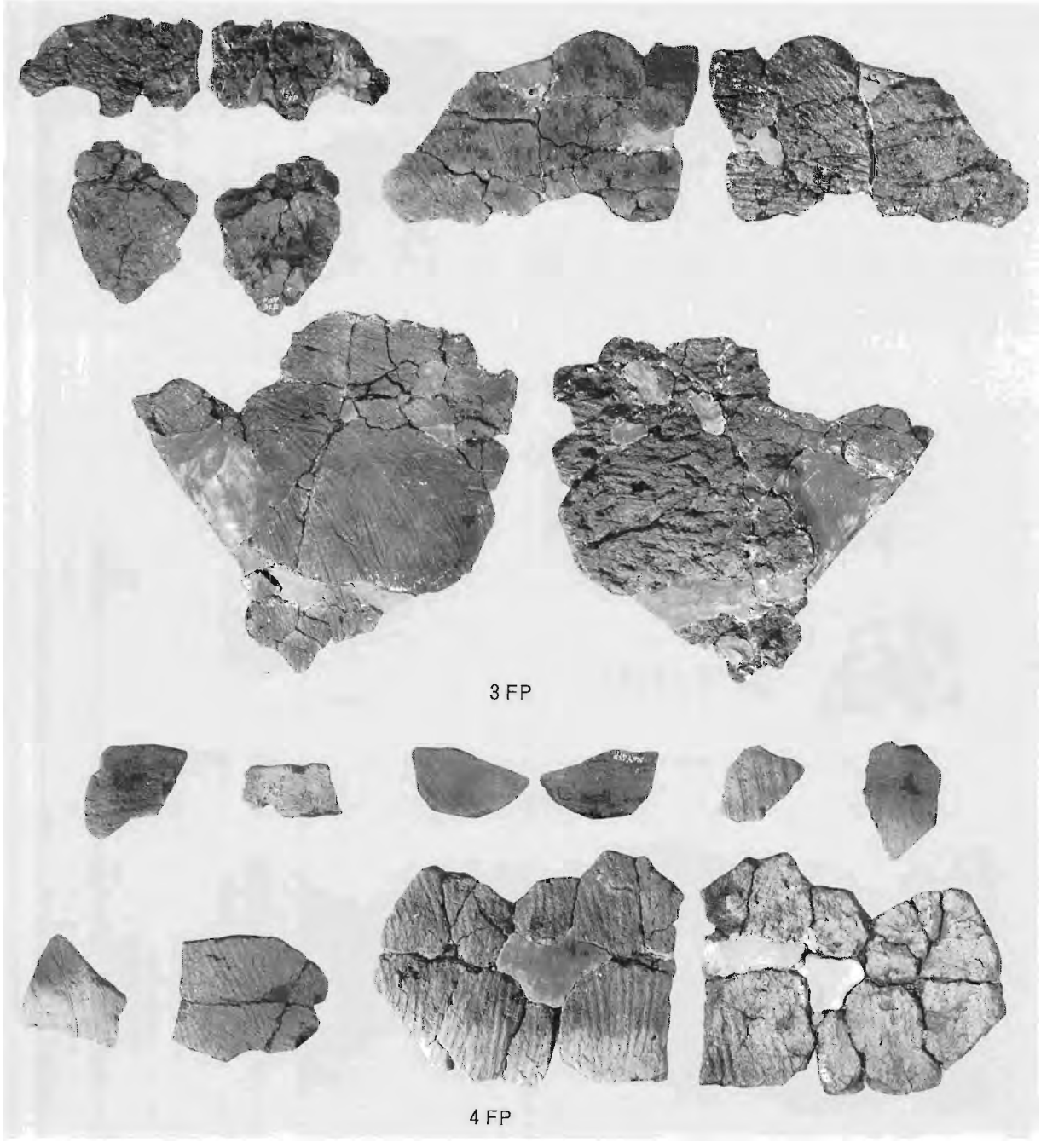
4．27・28号土坑出土遺物



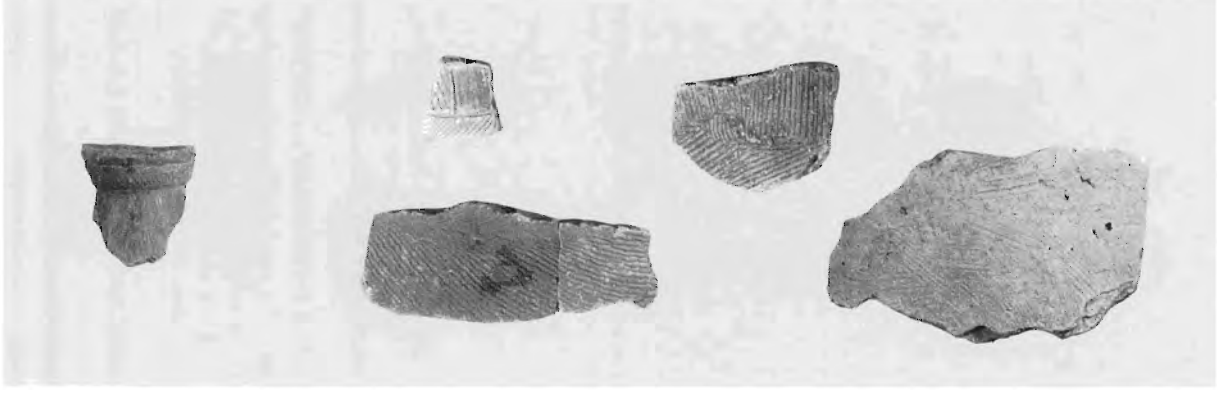
5．29号土坑出土遺物



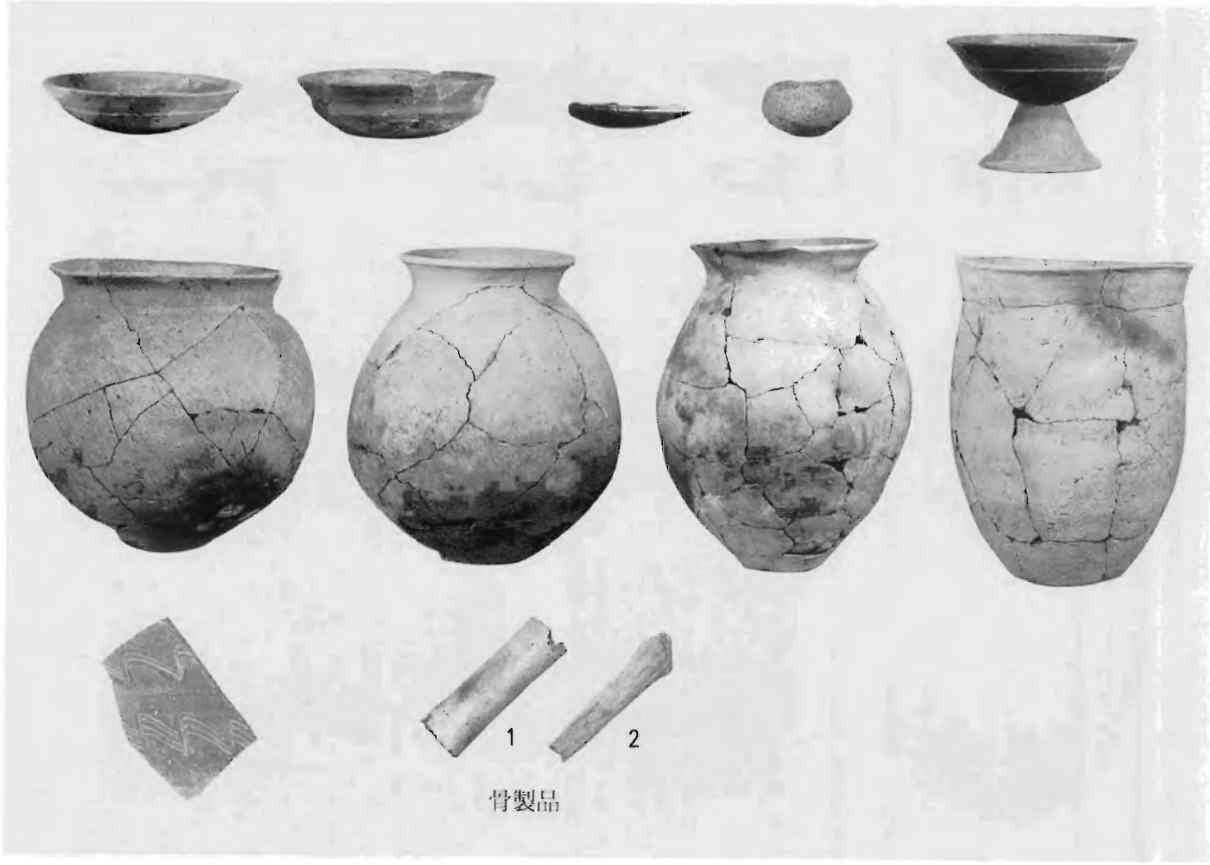
6．2号炉穴出土遺物



1．3・4号炉穴出土遺物



2．4号住居跡出土遺物



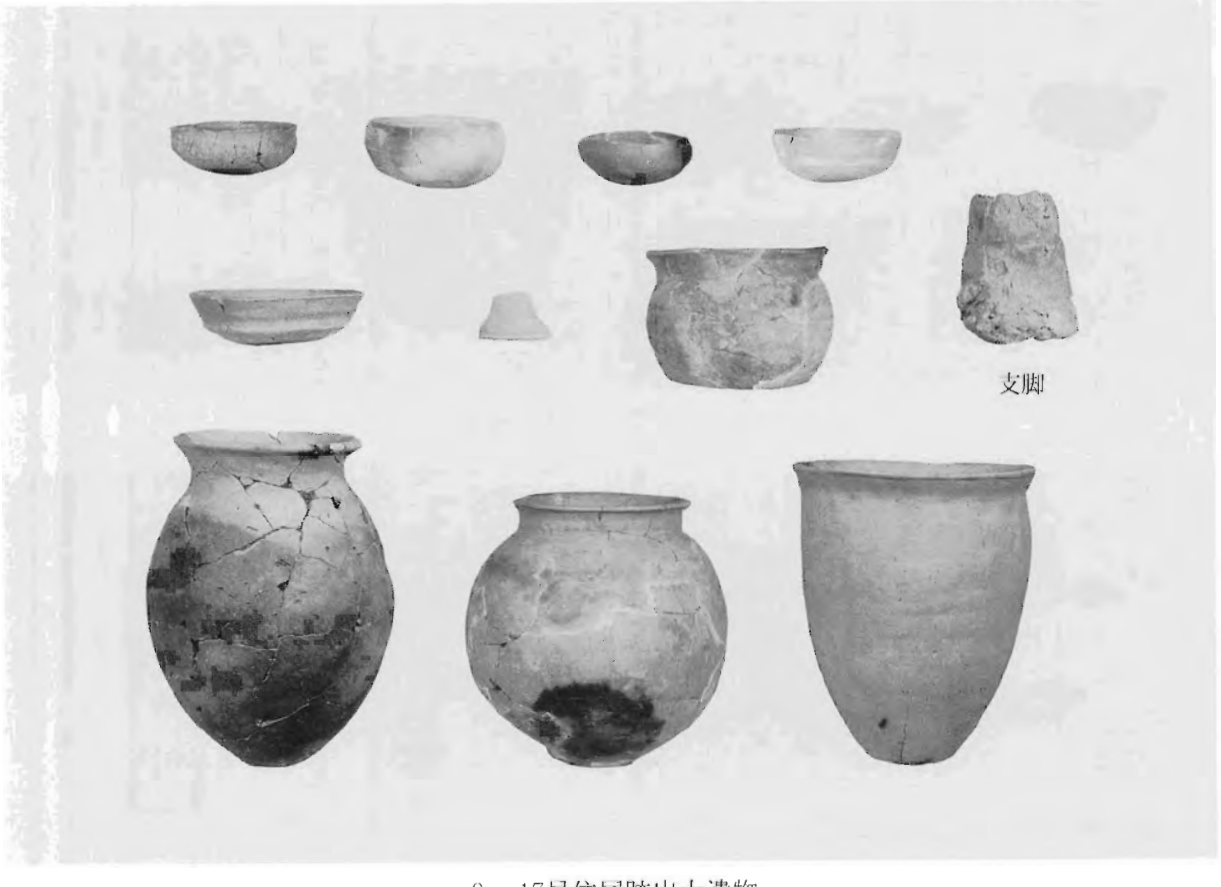
1．10号住居跡出土遺物

2．13号住居跡出土遺物

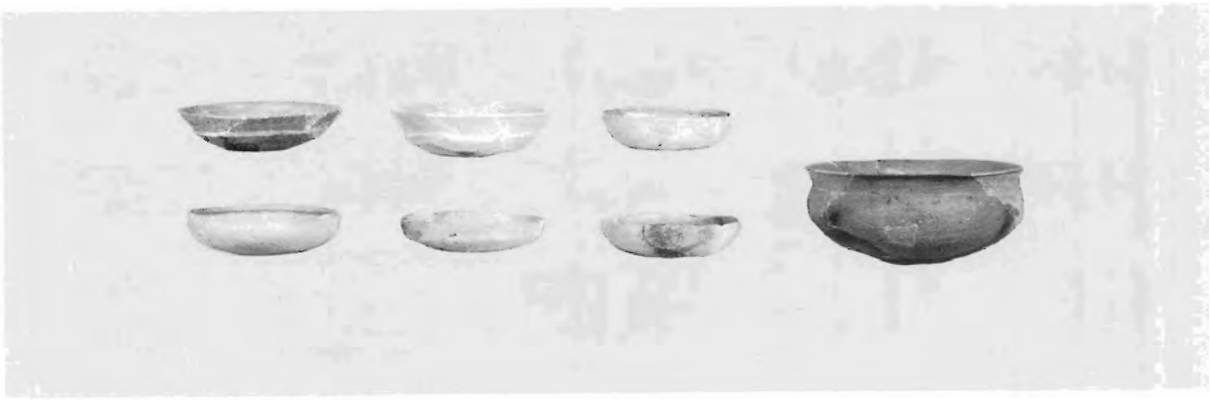
3．14号住居跡出土遺物

4．10・14・16号住居跡出土鉄滓

1．15号住居跡出土遺物

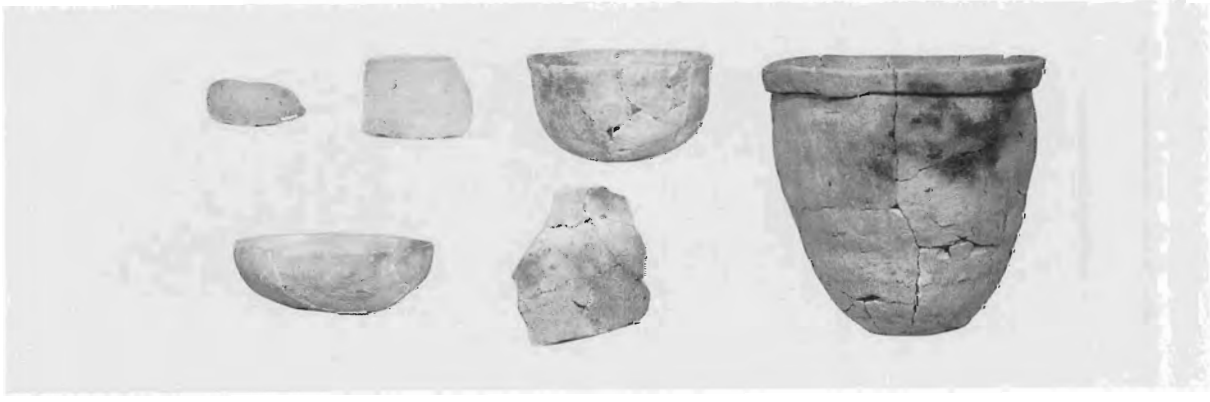


2．17号住居跡出土遺物

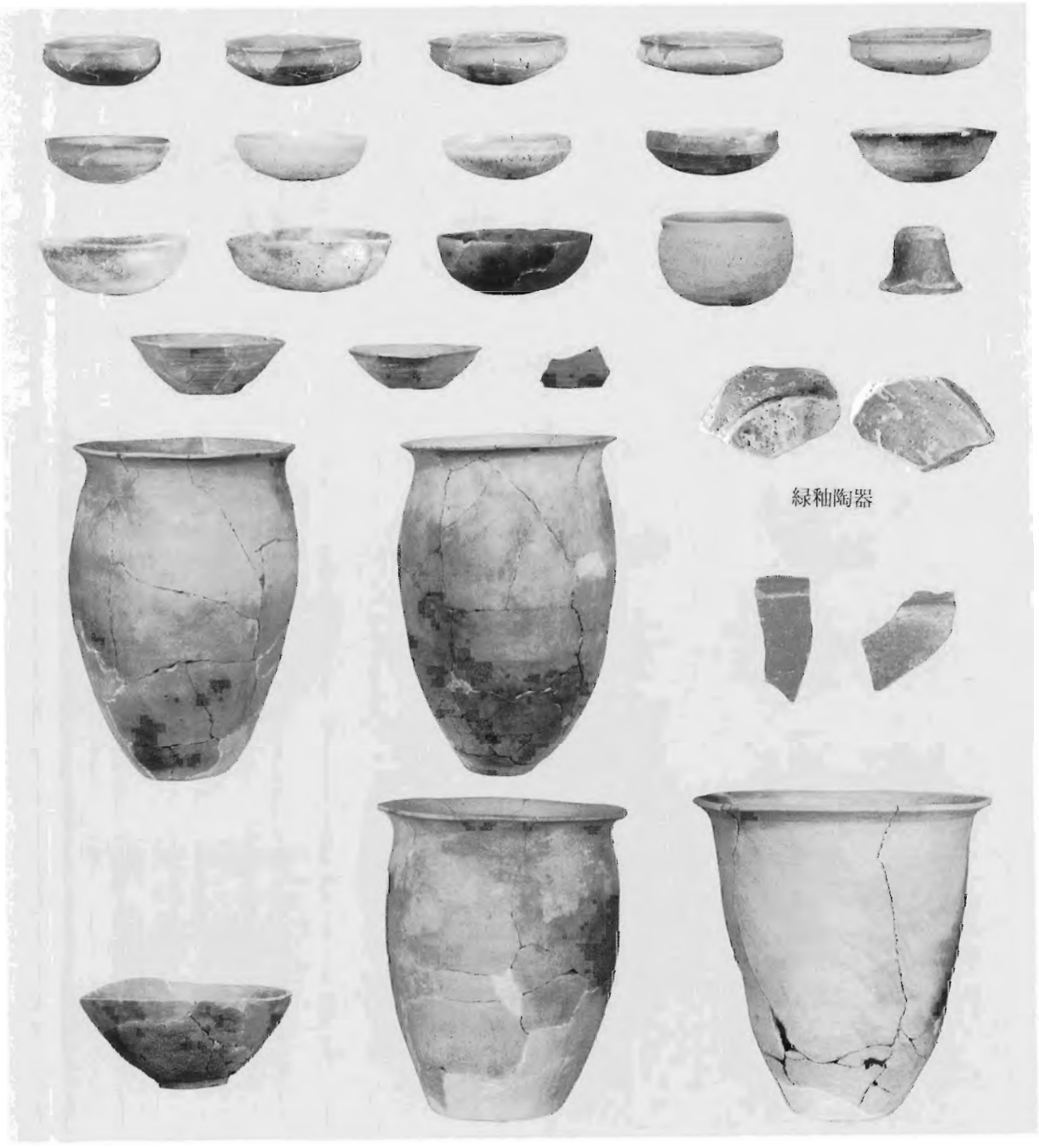


1．16号住居跡出土遺物

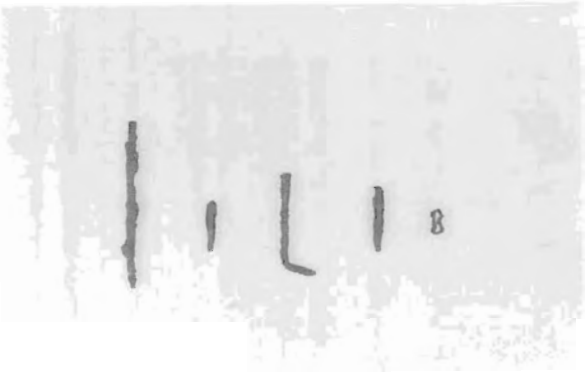
2．18号住居跡出土遺物



3．20号住居跡出土遺物

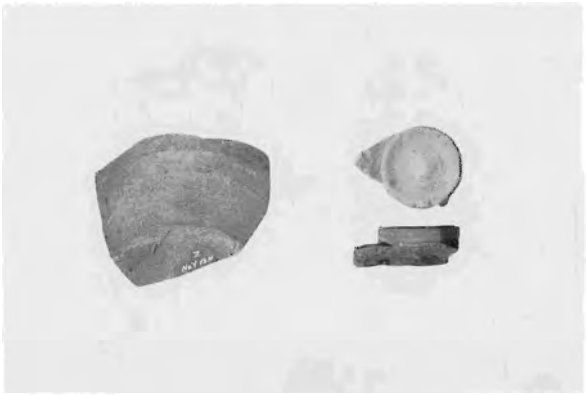


1．19号住居跡出土遺物

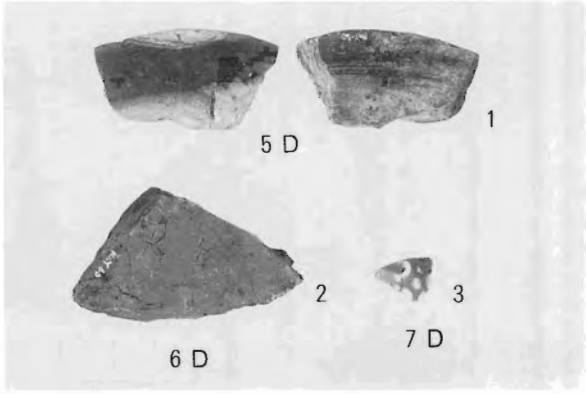


2．19号住居跡出土鉄製品

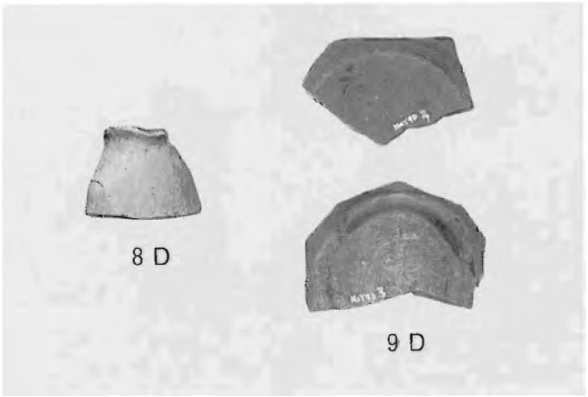
3．19号住居跡出土鉄滓



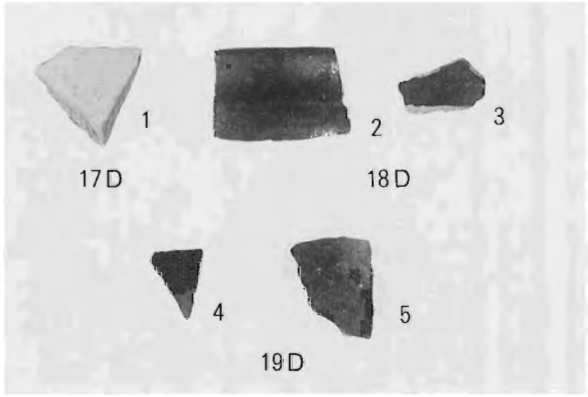
1．12号住居跡出土遺物



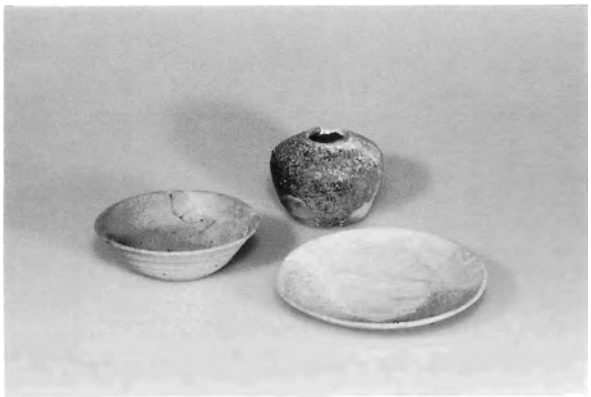
2．5～7号土坑出土遺物



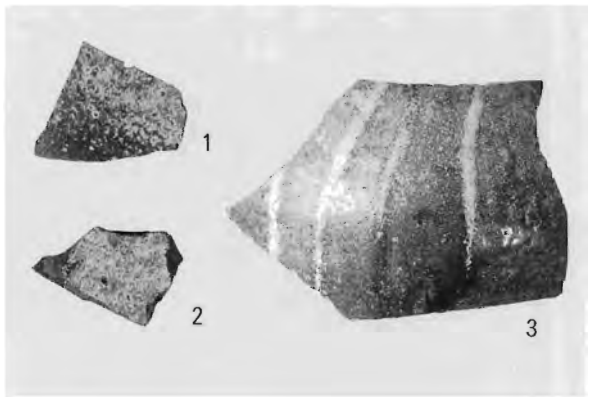
3．8・9号土坑出土遺物



4．17～19号土坑出土遺物

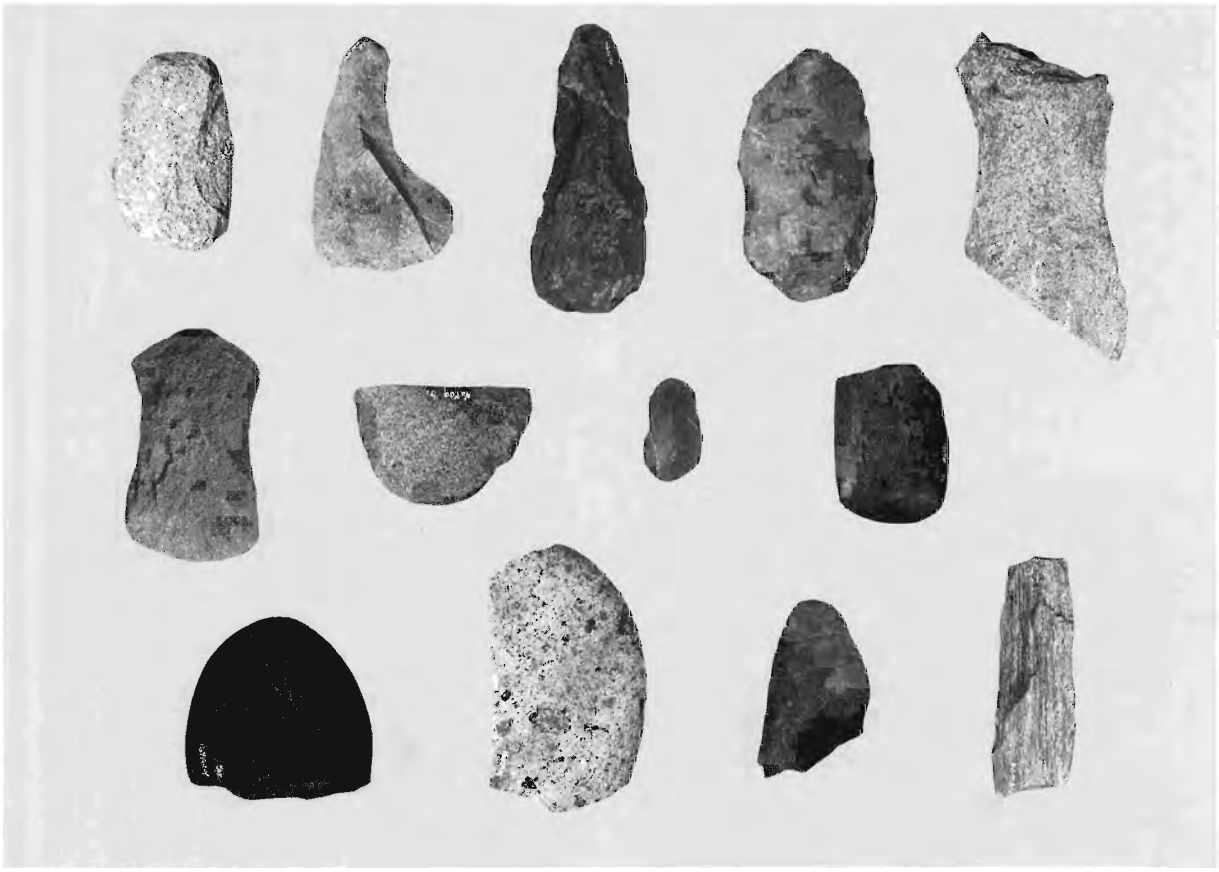


5．21号土坑出土遺物



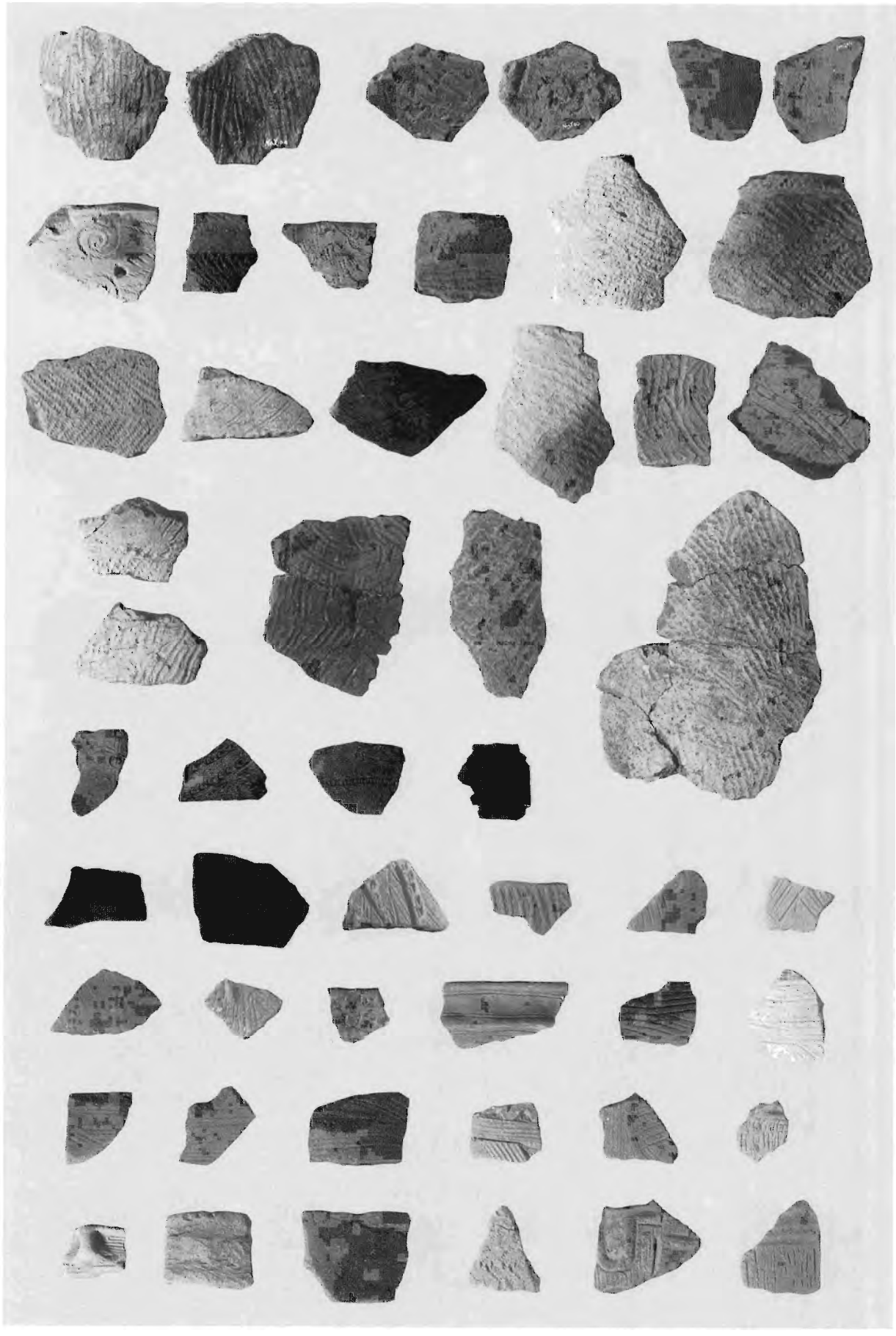
6．21号土坑出土遺物

7．遺構外出土遺物

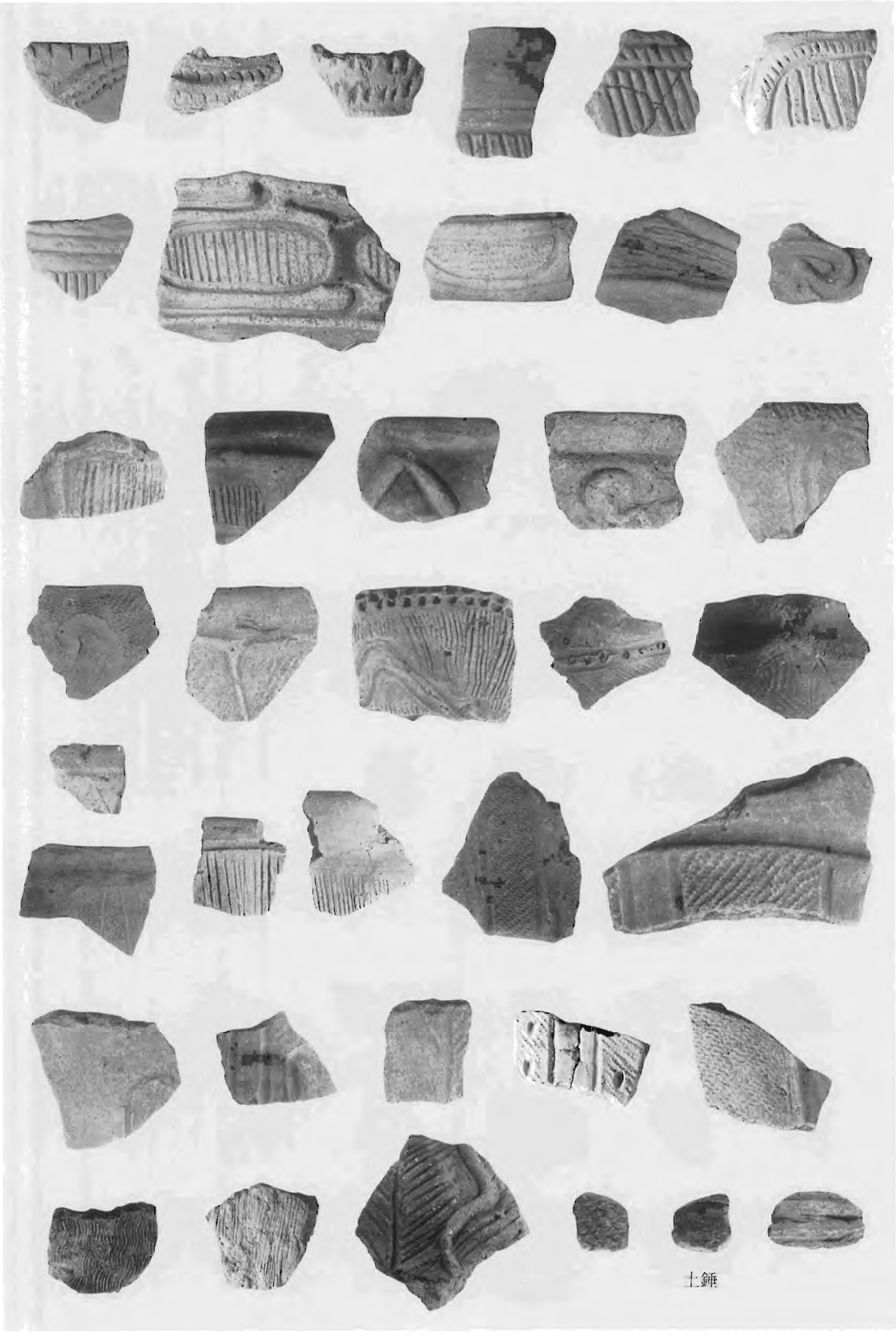


1．遺構外出土石器

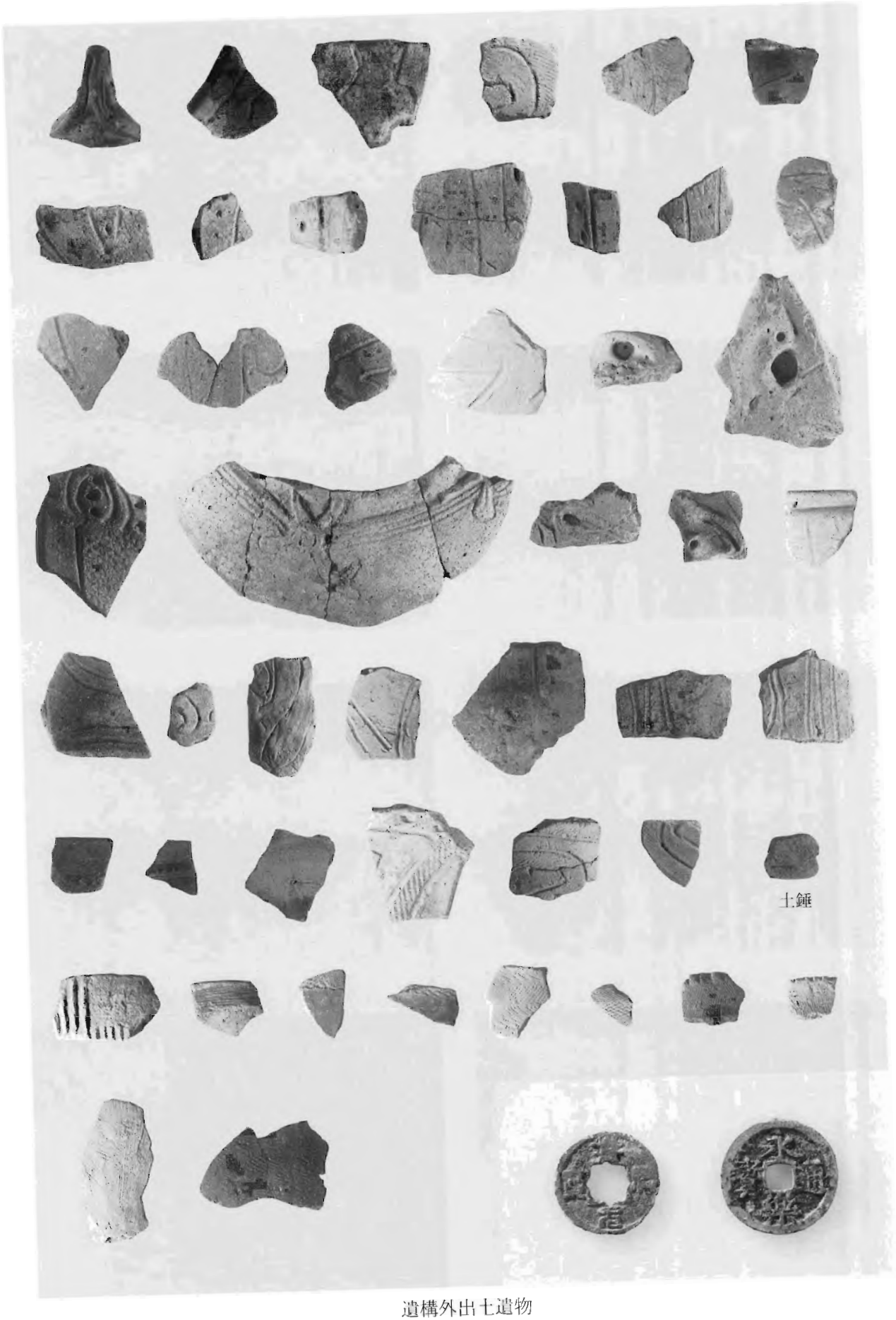
2．遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

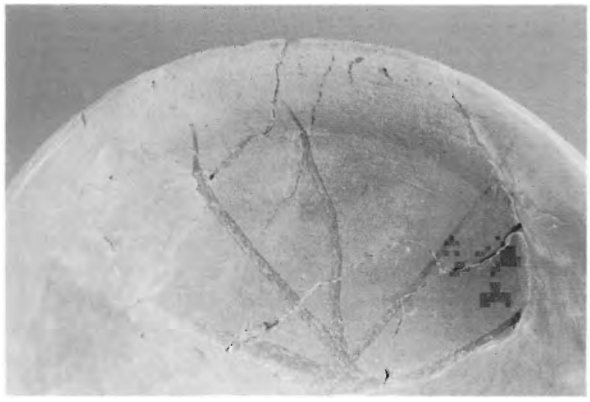
1．ハケ目＋ヘラ磨き　13H－4

2．ヘラ磨き＋ヘラ削り　13H－2

3．ヘラ削り　17H－4

4．未調整部分＋ヘラ削り　19H－7

5．暗文　19H－13



6．暗文　10H－1

7．ハケ目＋ヘラ削り　10H－8

8．ハケ目＋ヘラ磨き　13H－7

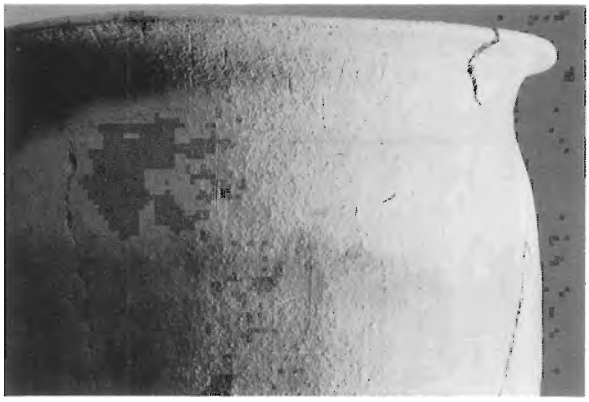
1．ヘラ磨き　17H－8

2．ヘラ削り　10H－6

3．ヘラナデ（ささくれ状）　18H－4

4．ヘラナデ（ささくれ状）＋ヘラ磨き　19H－7

5．口縁部横ナデ＋ヘラナデ（スリップか）19H－13



6．口縁部横ナデ＋ヘラナデ（スリップか）19H－23

7．ハケ目　13H－8

8．ヘラナデ（横方向）　19H－21

1．複合口縁（指頭押捺）＋ ハケ目　13H－6

2．ハケ目 ＋ ヘラ磨き　13H－6

3．ヘラナデ（ささくれ状）　18H－7

4．ヘラナデ（ささくれ状）　18H－7

5．ヘラ削り ＋ ヘラナデ（スリップか）　19H－24

6．ヘラナデ ＋ 磨き（縦方向）　19H－24

7．ヘラナデ（ささくれ状）　10H－9

8．ヘラナデ（斜方向）　15H－13

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 2
書名	埋蔵文化財調査報告書 2
副書名	巻次
シリーズ名	志木市の文化財 巻次 第31集
編著者名	尾形則敏　深井恵子
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所在地	〒352－0002　埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048(473)1111
発行年月日	(2001年) 平成13年3月30日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
中野遺跡 (第25地点)	志木市柏町 1丁目1501	11228	002	35° 49′ 48″	139° 44′ 34″	19920213 ～ 19920720	883.00	駐車場建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
中野遺跡 (第25地点)	集落	縄文時代	住居跡	1軒	土器・石器	古墳時代19号住居跡は一辺10mを越える大形住居跡である。時期は7世紀前半に位置付けられる。
			土坑	9基	土器	
			炉穴	5基	土器	
		弥生時代後期	住居跡	1軒	土器	
			土坑	1基		
		古墳時代後期	住居跡	10軒	土師器多数	
		平安時代	住居跡	2軒	土師器・須恵器	
		近世	土坑	15基	陶器・瓦器	

志木市の文化財　第31集

中野遺跡第25地点

発　行　埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日　平成13(2001)年3月30日
印　刷　株式会社　白　峰　社